

西洋音楽の伝道師

小松耕輔物語

第1部 評 伝

第2部 モコちゃんのピアノ



西洋音楽の伝道師

－ 小松耕輔物語 －

目 次

第1部 評 伝

I ふるさと

1884 (明治17) ~1901 (明治34)

① 玉米村	11
② 小松耕輔誕生	11
③ 眼の病	12
④ 苦渋の治療中断	13
⑤ 音楽との出会い	13
⑥ 矢島高等小学校	14
⑦ オルガンのシャワー	15
⑧ 立志の決断	15
⑨ 玉米八景唱歌	16
⑩ 父母の決断	16
⑪ されど教育費	17
⑫ 吹雪の旅立ち	17
⑬ 郷関を出ず	18

II 音楽学校の青春

1901 (明治34) ~1906 (明治39)

① 上野の音楽学校	19
② 受験勉強の日々	19
③ 視力検査の関門	20
④ 喜びの合格電報	20
⑤ 眼病再発の試練	20
⑥ 学校の俊才たち	21
⑦ ふるさとの山河	22
⑧ 本科1年	23
⑨ ピアノ争奪戦	24
⑩ ユンケル先生	24
⑪ 「音楽新報」	25
⑫ 多士済々の論客	25
⑬ 創作オペラ「羽衣」	26
⑭ 旗揚げ公演	27
⑮ 森鷗外の序文	27
⑯ 理想的国民楽	28

⑰ 音楽学校生の将来	29
⑱ 自由な校風	29

Ⅲ 教育者への道

1906 (明治39) ~1919 (大正8)

① 首席卒業の栄誉	31
② 学習院の制服	32
③ 昭和天皇の唱歌	32
④ 院長・乃木希典の涙	33
⑤ 桜花寿ぐ結婚	33
⑥ 新妻の覚悟	34
⑦ 大葬と殉死	35
⑧ 秋田なまりの儒学者	35
⑨ 幻の関西音楽学校	36
⑩ ニコピンの童謡	36
⑪ 隆盛の浅草オペラ	37
⑫ 白秋と意気投合	38
⑬ 最期の対面	38
⑭ 多忙な日々	39
⑮ 楽しい地方演奏会	39
⑯ 母とお伊勢参り	40
⑰ 「母はかなしも」	41

Ⅳ 欧米武者修行

1920 (大正9) ~1923 (大正12)

① 欧州航路	42
② フランス流派	42
③ パリの下宿屋	43
④ パリ国立音楽学校	44
⑤ クライスラーの魂	45
⑥ 戦争の爪痕	46
⑦ リストの家	46
⑧ ワーグナーの墓碑	47
⑨ コジマ夫人との語らい	48
⑩ バイロイト祝祭歌劇場	48
⑪ 楽聖たちの墓地	49
⑫ ベートーベンの聴音器	49
⑬ ライン川有情	50
⑭ 先駆者サン・サーンス	51
⑮ 「皇帝の葬列」	51

⑩	ファンファール	52
⑪	日本人倶楽部	53
⑫	バロン薩摩	53
⑬	パリの昭和天皇	54
⑭	父と弟の訃報	54
⑮	ニューヨークのジャズ	55
⑯	横浜港の棧橋	56
⑰	旅の終わり	56

V 円熟期へ

1923 (大正12) ~1966 (昭和41)

①	東京シンフォニー	58
②	関東大震災	58
③	家族の絆	59
④	終の棲家	60
⑤	「帝都復興の歌」	60
⑥	「光の会」	61
⑦	著作権の闘い	61
⑧	日本放送協会	62
⑨	コンクールと国民音楽協会	63
⑩	富士山の裾野	64
⑪	軍靴の音	65
⑫	還暦の白内障	65
⑬	玉米村へ疎開	66
⑭	束の間の平穏	67
⑮	山桜の花言葉	68
⑯	8月15日	69
⑰	日だまりの夫婦	69
⑱	音楽教科書	70
⑲	土間のピアノ	71
⑳	人生変えた贈り物	71
㉑	上々吉	72
㉒	魂魄ふるさとに	73

竹久夢二作詞、小松耕輔作曲「母」原曲	74
--------------------	----

付記 小松耕輔の音声テープ

録音テープ その1	77
録音テープ その2	81
録音テープ その3	83

第2部 モコちゃんのピアノ ～師小松耕輔の思い出～

I 声楽家の夢育む

先生からの贈り物	87
チンチン電車さん	87
父との出会い	88
運命を変えた手紙	89

II 東京女高師に学ぶ

素晴らしい教授陣	90
苦しみを励ましに	91
父との別れ	91
茨木のり子さんに寄せて	92
行幸啓のこと	92
陸軍戸山学校	93
志賀高原の夏休み	93
親泊千代さん	94

III 小松先生の思い出

お父ちゃん!	95
レコード鑑賞	95
お宅でおしゃべり	95
和声学で叱られる	96
ピアノ弾かんなんなあー	97
広子日記	97
昭和天皇に慕われる	97
小松4兄弟	97
フランス留学	98
最後の電話	98

IV ふるさと丹波篠山

幸田の小母さん	99
幸田の小父さんのこと	99
木下楽器店のこと	100
畑儀文さんのこと	100
高橋竹山さんのこと	101
論文が最優秀に	101

V 時を越えて

調律師の丹後さん	103
お母さんのピアノ	103
原未夏さんに託す	103
ピアノよ健やかなれ	104

付記 ピアノが紡ぐ不思議な縁 教え子と当主の対談

余分の命に感謝	106
ピアノが届いた日	107
古いアルバム	108
歌詠みの赤ひげ	109
先生を「お父ちゃん」	109
素晴らしい教授陣	110
再評価の機運を	111
オペラ「羽衣」の再演	112
思い出の中に生き続ける	112
小松耕輔の年譜	114
参考文献	115
小松耕輔音楽兄弟顕彰のあゆみ	116
小松耕輔音楽兄弟顕彰会	118
あとがき	119

第1部

評 伝

小林 義人

I ふるさと

1884 (明治17) ~1901 (明治34)

① 玉米村

出羽山地の懐深く、高瀬川が流れる。秋田県由利本荘市東由利^{たてあい}館合。山あいの清流は、やがて石沢川とその名を変え、鳥海山が源流の子吉川に合流して日本海へ注ぎ込む。

明治のころ、ここは「玉米村」と呼ばれた。山間の小さな集落は、その歴史を戦国末期にさかのぼる。現在の由利本荘市からにかほ市にかけての由利地域一帯は当時、「由利十二頭」と呼ばれる12人の豪族に支配されていた。

十二頭の一角をなす玉米氏の城下町として栄えたのが玉米村だ。武士が土着して農地を切り開き、曲折に満ちた歴史と地域色豊かな文化を育んだ。史実は伝説の霧の中だが、「館^{たて}」と呼ばれた小高い城跡や古風なたたずまいの大物忌^{おおものいみ}神社が、風雪になめされて今も残る。戦国武将の血を引く硬質な精神が、人々の心を耕し、逆境にめげない、したたかで、しなやかな気性をこの地に作り上げた。



旧玉米村（現由利本荘市東由利館合）周辺図



大物忌神社

南にでんと座るのが八塩山（標高713メートル）だ。こぶのような形がいささか武骨なふるさとの山は、四季を通じて豊かな伏流水を蓄えてくれる。

人々の生活と田畑を育む命の水である。麓で湧き出す「ボツメキの水」は今も名水の誉れ高く、ポリタンクを手に人々がやって来る。



道の駅「東由利黄桜の里」から望む八塩山

② 小松耕輔誕生

玉米村の集落の中心部、大物忌神社の境内の東隣に、村長や郡会議員を務めた小松平蔵

(1853~1922)の屋敷があった。豪族・玉米氏の重臣の子孫と伝わる旧家だ。藩政期には矢島藩の御用米を雄物川の廻船に載せ、北前船が寄港する土崎まで運んだ。明治期に入ってから大勢の若衆が立ち働き、屋敷の構えも豪壮な庄屋であった。



耕輔が生まれた頃の小松家の玄関

1884年(明治17)12月14日。小松家に待望の男子が誕生した。後に「西洋音楽の伝道師」「音楽の求道者」と、畏敬の念を込めて呼ばれた音楽家・小松耕輔こまつこうすけである。

第一子は夭折していたから、事実上の長男である。平蔵は敷地内に立つ小さな社に詣で、安産の礼を述べた。柏手が鳴って、師走の冷気を震わせた。

人は歴史と文化の中に生まれて来る。近代国家に衣を替えて20年足らず。世の中は「世界に追い付け、追い越せ」の掛け声がかまびすしく、異様なまでの高揚感が東北の山里にも押し寄せていた。背伸びする時代と硬質な精神風土を苗床に、耕輔は育つ。



敷地内の社は今も健在

③ 眼の病

物心つくころから利発な子供だった。父平蔵と母トミ(1860~1936)は旧本荘藩の国学者から短歌を習うほどの教養人。漢籍に通じ、詩文に長じていた。耕輔も父母の隣に座って、いろはがるたと一緒に三十一文字みそひともじを口ずさむようになった。



小松平蔵

そんな幸せな一家を思わぬ試練が見舞う。歩き始めたころから、耕輔は家の敷居や道端の石に躓つまずいた。やがて、両親は眼の異常に気付く。どうやら、良く見えていないらしい。本荘(現由利本荘市の中心部)の医者に診せたが、目薬も効はなし。視力は日に日に落ちた。



トミ

「東京に日本一の眼医者がある」。平蔵が出入りの薬売りから聞いたのは、耕輔が5歳の春だ。平蔵の行動は速かった。「必ず治してやる」。村長を務める役場の仕事に一段落付けて、息子と2人、東京へ向かった。

「日本一の眼医者」は、東京の神田駿河台にいた。洋風建築の玄関に「齊安堂医院」と書かれた看板。はるばる秋田からやって来たと聞いて、看護師がすぐに視力検査をしてくれた。離れて立って検査表をにらみつけるものの、耕輔にはほとんど判読出来ない。今にも泣き出しそうな顔で平蔵の顔を見た。

2人はそのまま診察室へ。

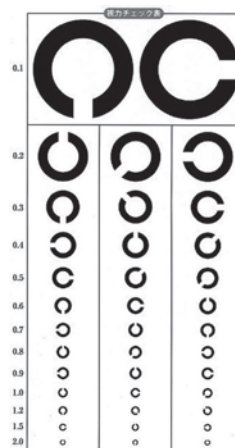
「坊や、眼はどんな具合かな？」

洗いざらしの白衣を着た医者が、拡大鏡をかざして眼球を覗き込む。院長の井上達也（1848～95）である。ドイツとフランスに留学し、後に東大眼科学教室を創設した気鋭の眼科医であった。

5歳の子供がよどみなく答える。

「雲がかかったように眼がかすみます」「本の文字が時々、読めなくなります」「眼のほかは、どこも悪くありません」

的確に症状を説明する耕輔に、医者は「賢い子だ」との印象を持った。



④ 苦渋の治療中断

眼科医の腕は「日本一」の評判通りだった。父親と一緒に入院して間もなく、視力が回復に向かい始めた。しかし、好事魔多し。ほっと安堵したのも束の間、村役場から「村長、スグ帰ラレタシ」の電報が届く。

村では当時、県道新設の計画が持ち上がっていた。事業化の直前になって隣村との協議が難航。村長・平蔵の政治手腕とにらみのきく顔が必要になった。「公のためには一身一家を顧みず」が信条の平蔵。即座に帰郷を決断する。

「先生、秋田に帰らなければなりません」

苦渋の表情で事情を説明する平蔵に、「このまま治療を続ければ治るんです。子供の将来を犠牲にしてもいいのですか？」と井上医師。しかし、平蔵の決断は変わらなかった。子供のために村を犠牲にするわけにはいかない。すまなそうに息子を見つめた目が、「わかってくれるな耕輔」と詫びていた。

「かなり見えるようになったからもう十分だ、お父さん。早く帰ろう」

まだ5つの子供が、父親の胸中をおもんぱかって大人の振る舞いをする。井上医師は「また、いつでも来なさい」と声をかけるほかなかった。

耕輔はその後、67歳で手術を受けるなど、生涯、眼に悩まされ続ける。「あの時、治療を中断していなければ…」後から振り返って、悔やんだことも。しかし、玉米に帰らなければ帰らないで、後悔したはずだ。人の運命は受け入れるためののみある。

余談ながら、井上医師は昭和の女流ピアニスト井上園子（1915～86）の祖父に当たる。園子はウィーン国立音楽院に留学し、日本人として初めてウィーン国際コンクールの本選出場を果たした。後に耕輔も招かれて独奏会を聴くが、それは40年以上も先のことになる。

⑤ 音楽との出会い

東京から戻った翌年の1891年（明治24）4月、耕輔は地元の館合尋常小学校に入学する。当時としては珍しい3階建て、バルコニー付きの洋風建築だったが、ピアノもオルガンもなかった。

視力が弱かった分、音には敏感だった。当時は「^{みんしんがく}明清楽」（※1）という中国由来の音楽がはやって、^{みんてき}明笛や^{げつきん}月琴という楽器が流行した。

母トミは家事の合間に、月琴を弾いて息子に聞かせた。満月の形をした三味線風の楽器であ



館合尋常小学校

で、季節の節目や祭りのたびに、村の若衆が面を付けて演じた。悲しいような、懐かしいような、一種独特な節回しが、少年の心を捉えた。いつしか、若衆に交じって踊っていた。

お気に入りの演目が、二人で舞う「鳥舞」^{とりまい}だった。優雅な振り付けは、今もなお、各地の番楽の看板演目だ。熱心な稽古ぶりを見て、先輩の青年たちが、頭に被る舞装束「鳥かぶと」を新調してくれた。

祭囃子や盆踊りでも、笛を吹き、太鼓を叩いた。梅檀^{せんたん}は双葉より芳し。早くして音楽家の片鱗がのぞいた。



「鳥舞」を舞う由利本荘市内の中学生

※1 明清楽 江戸中期に日本に入った明朝末期の音楽「明楽」と、江戸後期に中国南方から来た「清楽」を合わせて呼ぶ。明治の中頃に流行した。

※2 番楽 鳥海山信仰が由来の民俗伝承芸能。獅子舞や道化舞、武士舞など豊富な演目が伝わる。神社の祭礼や虫追い、二百十日などで舞って、五穀豊穡と無病息災を祈願した。旧玉米村の番楽は今も健在。衣装や面、太鼓が保存され、地元大物忌神社の祭典（8月15日）などで上演される。

⑥ 矢島高等小学校

尋常小学校の修業年限は3年だった。玉米村には尋常小学校しかなく、高等小学校へ進学するには親元を離れなければならない。耕輔は眼に不安があったが、夫婦に迷いはなかった。

「眼が見える今のうちに勉強させてやりたい。あの子は賢い。上の学校に行かせよう」

親の恩はありがたきかな。父と母の励ましは生涯、耕輔の心に風を通し続けた。

玉米村から20キロほど南、トミの実家がある現由利本荘市矢島町に矢島高等小学校があった。修業年限は4年である。1894年（明治27）4月。耕輔9歳の春、祖父母の家に下宿しての新たな学校生活が始まった。

矢島町は旧矢島藩の城下町で、学校は高台の城跡にあった。藩校の日新堂^(※)もここにあ



雪をかぶった鳥海山



「日新堂」の跡地（矢島町）

って、幕末の動乱期、遣米使節団の三浦東造や筑波天狗党の土田衡平など、多くの人材を輩出した。眼前に標高2,236メートルの鳥海山が、天を衝いてそびえる。

「これが奥州一の秀峰か。この山に見られて恥ずかしくないよう、正直に生き、一生懸命勉強しよう」

良心の目方は自分自身で測る。鳥海山が教えてくれた最初の作法であった。

※ 日新堂 矢島藩の藩校。幕末の安政元年（1854）創設。漢学、算学、医学を教え、自立自尊の精神を育んだ。藩政期は東由利も矢島藩に属した。

⑦ オルガンのシャワー

小松耕輔の本格的な音楽との出会いは、ここ矢島高等小学校にあった。入学した日、教室で初めて耳にしたのが、オルガンの音色だった。

弾いていたのは、秋田師範を出た当時33歳の教師木内喜七である。古今のメロディーを自在に奏でるオルガンは、音楽の玉手箱。教室に春風が満ちた。

耕輔はオルガンの虜になった。放課後も演奏をねだっては唱歌を和し、鍵盤に触らせてもら



大正時代初期のオルガン
（北海道開拓の村）

う。1回弾けばたちまち曲をそらんじるなど、音楽のツボに通じる勘の鋭さがあった。

「この子は素晴らしい音感を持っている」

教師は音楽と愛情のシャワーを惜しみなく注ぐ。

音楽の楽しさを知る一方で、耕輔はこつこつと勉強した。図書室の本はほとんど読破。「眼が見えるうちに」との焦燥感が、生来の勉強好きに拍車をかけた。勉強好きは秋田県人の美德だ。

後の自伝「音楽の花ひらく頃」によると、夏休みには玉米の実家に帰省した。迎いの「爺や」に伴われ、八塩山を越えての一日がかりの行程である。山腹で食べたお握りと湧き水のうまかったこと。記憶のアルバムに貼られた少年時代のワンショットである。

⑧ 立志の決断

1898年（明治31）3月、耕輔は矢島高等小学校を卒業した。卒業式に出席した両親を木内が教員室に招き入れた。

「息子さんには才能があります。音楽の道に進ませてください」

推薦したのが官立の東京音楽学校だった。東京芸術大学の前身で、日本の音楽教育の最高峰である。平蔵とトミは顔を見合わせ、うれしさ半分、困惑半分、思案投げ首で聞き入った。

耕輔は13歳、数え年では14歳になる。多くの中学校で「立志式」が行われるように、少年として志を立てる節目の年齢だ。眼の病と一生つきあって行く覚悟を決め、将来の進路を音楽一本に絞った。

無論、音楽学校なんて夢のまた夢。しかし、夢を見るのは自由だ。自分からあきらめること

はない。少年は前を向くことしか知らない。眼が心もとないから、よそ見やわき見は躓きの元。ひたすら前を向いて歩くのみだ。

玉米の実家では、使い慣れた手風琴がご主人の帰りを待っていた。これさえあれば、曲は作れる。木内が持たせてくれた解説本や楽譜が先生だ。晴れた日は野原に寝転んで耳を澄ませた。鳥のさえずり、風のそよぎ、木々の葉ずれ。大地も曲を作り、歌っていた。

音楽の独学の合間には、和歌や漢詩の勉強もおさおさ怠りなく。こちらはトミが先生だった。大人になっても手元に置いた母の歌に2首がある。

「世の中の夢はよそなる身ながらも花にこころのおかぬ日ぞなき」

「かしましき浮世のがれし山里も思いのほかの峰の松風」

⑨ 玉米八景唱歌

その頃、日本中で「鉄道唱歌」^(※)がはやり、玉米村でも盛んに歌われていた。「よし、それなら」と一念発起して作詞、作曲したのが、地元の名所旧跡を織り込んだ「玉米八景唱歌」だ。

小学校に持ち込んで児童に歌わせるようお願いしてみた。「君が唱歌を作るなんて」と、最初は相手にしなかった教師も、耕輔が手風琴で歌うと、見事な出来にびっくり。たちまち、村中で歌われた。

「子供も大人もこんなに喜んでくれる。もっともっと、いい歌を作りたい」

音楽家への夢が、いやが上にも膨らんだ。

「玉米八景唱歌」は音楽家・小松耕輔の記念すべき作品第1号である。譜面は、残念ながら残っていない。今からでも遅くはない。見つければ、文化財級の史料になるはずだ。



唱歌の歌詞には名勝の御神木「法内の八本杉」も登場? (東北森林管理局 HP から)

※ 鉄道唱歌 1905年(明治38)発表。「へ汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり」で始まる歌詞は、全5集334番まで増えて、日本で最も長い歌とされた。作詞は詩人の大和田建樹(1857~1910)。

⑩ 父母の決断

自宅での3年間の頑張りに、ふた親がとうとう折れた。東京音楽学校への進学を許したのである。長男なら家を継ぐのが当たり前の時代。大きな農家ならなおさらだ。しかし、両親は古い慣習をさっさと脱ぎ捨て、ありったけの眼力を集中させて子供の可能性を測った。夫婦の見立ては一致した。

先祖代々の仏壇に燈明を灯して、平蔵が耕輔を正座させた。

「お前には眼の病がある。いつ悪化するかわからない爆弾を抱えているのだ。それでも頑張りぬくと約束出来るか?」

耕輔は父親の顔から眼をそらさず、腹に力を込めて答えた。

「お父さん。音楽は僕にとって魂の食べ物です。これがなければ心が飢え死にする。何が何でも音楽家になりたい」

平蔵の斜め後ろから、トミが膝を進めた。

「決めたからには、弟や妹たちのためにも頑張るのですよ。村の人たちも見ています。恥ずかしい姿は見せられませんよ」

その夜、一家は「玉米八景唱歌」を歌って、惣領息子へのはなむけとした。

⑪ されど教育費

玉米の家には当時、6人の弟と妹がいた。夫婦は耕輔にしたのと同様に、他の子供たちの教育にも出費を惜しかなかった。

「我々兄弟の学費が年々かさみ、国元の家計が大分、苦しくなっていた」（音楽の花ひらく頃）

耕輔は後の自伝でこう、両親の苦労を思いやっている。

平蔵は、懇意にしていた隣村の篤農家・畠山三郎翁に事情を打ち明けて、学費の借入りを頼んだ。畠山翁は小さい頃から耕輔を良く知っていた。

「分かった。才能のある子どもに勉強させてやるのが、わしら大人の責任だ」

篤農家は二つ返事で引き受けた。

耕輔は畠山翁の厚意に実家の仕送りと秋田県育英会の奨学金を併せ、無事、学生生活を全うした。誰もが食べるだけで精一杯の貧しい時代だった。畠山翁については後に触れるが、耕輔は一生、恩義を忘れなかった。

平蔵は家計を立て直す意味もあったのだろう、後に村を出て単身、朝鮮半島に新天地を求めた。日本政府の出先機関である朝鮮総督府に勤務。行政マンとしての手腕を発揮して、彼の地で68年の生涯を終えた。ロマンを求める夢追い人の血は、父子鷹よろしく、まずは父の体に脈打っていたのである。

残されたトミと弟、妹は、東京の耕輔宅に身を寄せることになるが、それは10年ほど後の話である。

⑫ 吹雪の旅立ち

夢に向かって一步、踏み出す日が来た。1901年（明治34）2月。16歳の少年の旅立ちの朝は吹雪だった。まだ奥羽本線が開通する前である。上京するのに最も近い駅は、玉米から120キロ東の東北本線・黒沢尻駅（現岩手県北上市）。商用で上京するひと回り年上の従兄が、案内を買って出た。

自宅前には両親や弟妹、近所の人たちが集まっている。木内先生もいる。同級生もいる。

「皆さん、行って参ります」

「体に気を付けて頑張るんだぞ」

馬そりが走り出す。雪煙が上がる。無限に広がる雪原が、これから漕ぎ出す人生の大海原に見えた。耕輔が念じる。

「風の海もあれば、嵐の海もあるだろう。しかし、志さえあれば道は開ける。ただひたすら前だけを向け。後ろを振り返るな」

小さな胸に夢を詰め込んで、人生の長い旅が始まった。

⑬ 「郷関を出ず」

馬そりは峠を幾つか超えた中継所で小休止した。ぶるぶると胴震いする馬の背から、雪が滑り落ちる。耕輔はトミに教わった漢詩を口ずさんだ。

「男兒志を立てて郷関を出ず。学若し成るなくんば死すとも帰らず」

学問しようとして故郷を出たならば、学業が成就するまでは故郷に帰らない、との意味だ。母の心づくしのお握りをほおぼる。山菜の漬物をかじった刹那、温かい涙がほおを伝わった。

九十九折りの山道を馬そりと人力車で乗り継ぎ、奥羽山脈を横断する。黒沢尻駅に到着した時には、とっぷりと日が暮れていた。揺られ続けた体が岩のように強張っている。駅前の宿で1泊。期待と不安でまんじりともせず、夜が明けた。

翌朝一番の上り線。雪原の向こうから真っ黒な巨体が近づいてくる。もくもくと黒い煙を吐き出すのは、青森と東京を結ぶ蒸気機関車だ。やがて発車のベル。空にちぎれた汽笛の音が、精いっぱいのエールを少年に送った。



昔の上野駅

夕方、上野駅に到着した。東京の玄関口だ。郷里とはまるで違う人の波に目を丸くする。従兄の定宿である日本橋小伝馬町の旅館に上がった。夕食の膳について、いつものように目薬を差す。と、無口な従兄が重い口を開いた。

「耕輔、お前が頑張り屋なのはよく分かってる。ただ、その眼では苦勞するはずだ。どうしようもなくなった時は玉米に帰れ。なんも恥じることはない、胸を張って帰れ」

不安の海で溺れかかっていた少年が、その一言で救われた。涙と一緒にかきこむご飯は、しよっぱい味がした。

綿のように疲れて、その夜は眠りが早かった。

外は凍るような満月。明日の晴れを約束する月の光だった。

Ⅱ 音楽学校の青春

1901（明治34）～1906（明治39）

① 上野の音楽学校

1901年（明治34）2月。上京した翌日は冬晴れの日差しがまぶしかった。耕輔は早速、上野公園へ。^{あわせ} 袷の着物は、母が手縫いの仕立て下ろしだ。



明治23年当時の東京音楽学校

正門にいかめしい顔をして門衛が立つ。

「受験しに秋田から来ました。ちょっとだけ覗かせてください」

門衛の男は、少年の東北なまりに表情をやわらげた。

「遠くからはるばる、よく来たもんだ。玄関前だけなら構わんよ」

門内への立ち入りを許してくれた。

西郷さんへと同様、ぺこりと頭を下げ中へ。校舎は木造2階建ての西洋建築だ。中央と左右、3つの棟に分かれている。

「洋行帰りの建築家の設計だ。フランス風ルネサンス建築様式というんだ」

門衛が自慢そうに教えてくれた。

「奏楽堂」という音楽ホールが入る中央の建物は、正面の屋根の切妻にレリーフの飾りがあった。見上げると、真ん中に火炎太鼓、それをはさんで雅楽の楽器の^{しょう}笙と西洋音楽の豎琴が彫られている。

「さすがに音楽学校は違う。建物が立派な芸術品だ」

壁と天井の内側には、おが屑や稲わらがぎっしりと。防音と音響効果を狙っての工夫である。これも門衛が教えてくれた。

② 受験勉強の日々

東京音楽学校に入学したのは、上京から4か月後の1901年（明治34）の6月である。耕輔はまだ16歳。

坂を上った公園の入り口に、西郷隆盛の銅像が威風あたりを払って立っていた。4年前に建てられた高村光雲の力作だ。他を圧する大きな体に似て、歴史の枠に入りきらない、並外れた正義感が、耕輔は好きだった。

ぺこりと頭を下げ、園内の道を北へ。つい小走りになる。あった。夢にまで見た東京音楽学校が、そこにあった。



奏楽堂(上)と屋根のレリーフ(下) (2022年2月撮影)



高鳴る胸の鼓動を持て余しながら、門衛にぺこり。もともと、入学といっても「選科」である。本当の入学は修業年限1年の「予科」とそれに続く3年の「本科」、さらに2年の「研究科」へと続く。選科は予科の受験準備も兼ねていて、さしたる試験もなく入ることが出来た。

入学式が済んで耕輔は事務室へ向かった。過去の入試問題に目を通すためだ。ページを開いて愕然とする。英語や漢文の問題が難し過ぎて、まるで歯が立たない。玉米村で「神童」とはやし立てられ、その気になった自信と誇りが、もろくも崩れ去る。

「こんなことで入学試験にパス出来るのか？」

耕輔の不安を見て取った事務室の職員は心得たもの。

「地方から来た学生さんは、最初は誰でもそういうものさ」

神田の私塾、今でいう予備校を紹介してくれた。選科の授業が終わると駆け足で私塾へ。寝る間も惜しんで教科書に向かう勉強漬けの日々が、1年3か月続いた。

③ 視力検査の関門

難問がもうひとつあった。こちらのほうが実は厄介だった。予科の入学試験では、視力検査があるのだ。東京に出て眼鏡をあつらえてはみたものの、普通の人々の視力には程遠く、黒板の文字さえ、容易には読み取れない。これでは試験を受ける前に、身体検査ではねられてしまう。

「ここで不合格にされたんでは、死んでも死にきれない」

元来が知患者である。若者らしいはずら心も手伝って一計を案じた。保健室にあった視力検査の視力表を丸暗記したのである。当時の視力表は、四角形の欠けた方向を答えるのであるが、上から下へ、右から左へと、欠けている方向を順番にすべて暗記した。

火事場の頑張りが奏功する。耕輔は無事、視力検査を切り抜けた。

「ズルして申し訳ありませんが、お許してください」

心の中で音楽の神様に手を合わせた。

④ 喜びの合格電報

東京の街にうだるような残暑が張り付いている。1902年（明治35）9月。待ちに待った合格発表の日がやって来た。耕輔は西郷さんの銅像に両手を合わせ、合格を祈願した。いつもは怒って見える顔が、この日は心なしか、和らいで見えた。

やがて音楽学校の正門前に合格者名簿が張り出される。恐る恐る覗いた耕輔の目に墨痕鮮やか、「小松耕輔 秋田縣由利郡玉米村」の文字が飛び込んできた。何度も何度も読み返した。しまいには涙でかすんで文字が読めない。

「音楽の神様、ありがとう。ご恩は一生、忘れません」

玉米の実家に電報を打つ。

「ワレ ゴウカクセリ コウスケ」

電文の文字が躍っていた。

今日から天下晴れて東京音楽学校の学生だ。母の袷をそっと脱ぎ、金ボタンの学生服に袖を通した。

⑤ 眼病再発の試練

しかし、音楽の神様は意地悪だった。予科の合格を喜んだのも束の間、耕輔を奈落の底へ突

き落とす。受験勉強で眼を酷使したせいか、視力が急速に落ちていたのである。神田練堀町の眼科病院を受診すると、「治療に専念しないと失明してしまう。学校は当分、休みなさい」と非情の宣告。医師の指示には抗いがたく、下宿も病院の近くに移した。

耕輔の自伝にこうある。

「昨日まではエデンの園だった学校も、今日は地獄に住む心地」（音楽の花ひらく頃）
郷里の父母の顔が脳裏に浮かんだ。合格を一心に喜んで、安くはない学費を送ってくれている。机の引き出しには「耕輔、お体の具合はいかがですか？」と心配する母からの手紙が束になっていた。病んだ両眼から、ほろ苦い涙が流れ落ちた。

しかし、愚痴は言うまい、こぼすまい。耕輔は弱気の虫を叱りつけて自らを鼓舞した。

「眼の病気はいかんともしがたいが、天よ僕を滅ぼすな。僕に天職を成さしめよ。耕輔よ、生きてる限り、ただ学べ、ただ働け、ただ前を向け」（同）

悶々とする日々が続いたが、試練は心を磨く砥石でもある。耕輔はここで「辛抱」の2文字を骨身に刻み込む。背筋に一本の芯として生涯、貫き通した。

⑥ 学校の俊才たち

傷心の耕輔を慰めてくれたのが、学校での音楽会だった。眼の調子のいい時を選んで、聴きに出かけた。どの演奏も素晴らしく、どの出演者もまぶしかった。世界的なオペラ歌手となる音楽学校の先輩・三浦環^{たまき}(※1)の独唱には、鳥肌が立った。音楽の才能の何たるかに触れる思いがした。



奏楽堂の滝廉太郎像(2022年2月撮影)

後に師事するヘルマン・ハイドリヒ先生のピアノも忘れ難い。「燃えるがごとき情火に焼かれんことを願うような演奏」（音楽の花ひらく頃）と、自伝に書き留めている。音楽の世界に浸れば、眼の病は忘れた。

その頃、学校で見かけて印象に残ったのが、助教授の滝廉太郎(※2)だ。「荒城の月」で一世を風靡したが、結核をこじらせて留学先のドイツから帰国していた。病と闘って作曲を続ける姿に、音楽家としての矜持を見る思いがした。滝は大分の郷里に帰って翌1903年(明治36)6月、25歳の若さでこの世を去る。

「この道」や「赤とんぼ」で知られる山田耕筰(※3)も、その頃に知り合った逸材だ。耕輔より2年遅れて入学している。頭をきれいに分けたおしゃれな学生で、作品が出来るたび、「小松先輩、今度の出来はどうでしょうか？」と批評を請うた。きらりと光る非凡な才能を、耕輔は早くから見抜いていた。2人は20年ほど後、遊学先のパリで再会している。

- ※1 三浦環（1884～1946） 日本人で初めて国際的な評価を得た女性オペラ歌手。プッチーニの「蝶々夫人」で人気。「マダム・バタフライ」と称された。
- ※2 滝廉太郎（1879～1903） 明治の代表的な音楽家。西洋音楽の黎明期をけん引した。「荒城の月」のほかにも「花」「箱根八里」「鳩ぽっぽ」など。
- ※3 山田耕筰（1886～1965） 耕輔と同時代の作曲家。「からたちの花」「待ちぼうけ」「ペチカ」など有名作品が多数。映画音楽にも活躍の場を広げた。

⑦ ふるさとの山河

失意の耕輔を励ましてくれたのは、ふるさと玉米の懐かしい山河であった。1903年（明治36）7月、夏休みを利用して2年ぶりに帰省。上野から東北本線で青森駅へ。秋田から本荘までは馬車。そこから人力車で玉米へ帰った。八塩山が「お帰り」とほほ笑んでいた。

みちのくの小さな村には、東京が失って久しい自然の美しさ与人々の優しさがあった。古びた神社仏閣や祠の地蔵尊、街道の里程塚。それぞれに歴史の手触りがあり、文化の温もりがある。そぞろ歩くだけで、強張った心のひだがほぐされた。

余談をひとつ。耕輔の散歩コースに小さな薬師堂があった。一帯の高台は「後三年合戦（1083～87）の砦跡」との説も。中に高さ1.14メートルの薬師瑠璃光如来像。「宝永四年小松儀平衛尉盛房」と願主の銘が刻まれ、小松家先祖の寄進と伝わる文化財級の銅像だ。どっかとお座るお薬師さんは、重くて大人10人でも持ち上がらないという。だからお堂には、今も鍵がかかっていない。盗まれる心配がないからだ。



薬師堂と薬師瑠璃光如来像（由利本荘市東由利老方）



旧友たちが懐かしい顔をそろえ、東京の話を書きたがった。

「東京ではどんな曲がはやってるんだ？」

「男も女も洋服なのか？」

小学校の恩師たちもやって来て、こちらは音楽学校の話を書きたがった。

「どんな授業をしているんだ？」

「外国人の先生は外国語で教えるのか？」

報告会や歓迎会が続いた。会合の後の食事会がまた楽しい。川の幸ならアユにドジョウにモクズガニ。山の幸ならワラビにコゴミにイタドリ。季節の恵みがふんだんに並んだ。ただし、地酒が並ぶのはまだ先の話である。

こうして2か月が過ぎた。少しずつだが、視力も回復した。これなら東京でも頑張れそう

だ。くじけそうだった心が、張りを取り戻し、ゴムまりのように膨らんでいる。

東京へ戻る前の日、母トミが地元の「山の神神社」へ誘った。うっそうたる杉木立が、真夏の日差しを涼しく遮ってくれる。鳥居を潜って母が言う。

「去年、新築されたお宮さんです。いつもお前の健康をお祈りしていますよ。眼にもご利益があるはずだから」

心配かけまいと、耕輔は眼の不調を隠していたが、母にはすっかりお見通しだった。覚悟の小ささを恥じて、母の優しさの大きさを思う。二人は拝殿に並んで拍手を響かせ、眼の快復を祈願した。

耕輔は9月7日、ふるさとを後にした。再び、前を向いて歩き出す背中に、八塩山が「行ってらっしゃい」とほほ笑んだ。

⑧ 本科1年

この年、1903年（明治36）9月11日、本科へ進級する。

耕輔は既に将来を作曲家と決めていた。視力が不安で、楽器の演奏に臆したこともあるが、子供の頃から曲作りに親しんできた青年には、ごく自然な選択だった。

ところが、ここでまた難問がひとつ。「作曲をやりたいんです」と意気込む耕輔に、面接した教官はにべもなかった。

「ここには作曲科なんてないよ」

当時の音楽学校に「作曲科」はまだなかった。鍵盤と楽譜をにらめっこするピアノ科は、耕輔の視力では難しそうだ。いったんはバイオリン科へ進むものの、作曲にピアノは欠かせないと分かって万事休す。



東京音楽学校の授業風景

そこへ救いの神が現れた。ピアノ科のヘルマン・ハイドリヒ先生（1902～1909在職）である。作曲も教えるという。演奏は何度か聴いていて、耕輔はかねてから憧れと尊敬の念を抱いていた。

「僕は作曲家になるのが夢なんです。眼が悪いのですが、ピアノ科で学ばせて頂けませんか？」

必死の表情の耕輔に、先生はいたずらっぽく片目をつむった。

「OK！一緒に勉強しましょう」

早速、メヌエットのレッスン。ピアノを弾いて「さあ、踊ってみてください」。耕輔にはどんな踊りか見当もつかない。ハイドリヒ先生はいきなり立ち上がり、新しい教え子の手を取って「一緒に踊りましょう、はいっ」。部屋中ぐるぐる踊り回った。

⑨ ピアノ争奪戦

しかし、練習には苦労した。そもそも、下宿にはピアノがない。音楽学校といえども、当時、ピアノを持っている学生はほとんどいなかった。練習には学校のピアノを利用するしかない。仲間の学生たちも事情は同じ。授業が終わると、大勢の学生が長い列を作ってピアノ室の前に並んだ。

耕輔は街路のガス灯が消えない早朝のうちに学校へ。朝もやに同級生のシルエットがひとつ、またひとつ。

「おーい、そこにいるのは誰だ？」

「なんだ、お前も来たてたのか」

息せき切ってピアノ室へ駆け込んだものだ。

この時、一緒に駆けっこした同級生に沢田柳吉^(※)がいる。後に、ショパンを得意とするピアニストとしてその名を高からしめた。

沢田とのつきあいは卒業後も続いた。耕輔の自伝によると、「生粋の江戸っ子で、豪放不羈、規律に従うことを嫌った」（わが思い出の楽壇）。酒が好きで、2人でよく飲んだ。「台所にはいつも一升樽が転がっていた」（同）。



沢田柳吉

※ 沢田柳吉（1886～1936） 東京出身。日本人で初めてショパンリサイタルを開いた。浅草オペラの創設に尽力。ベートーベンの「月光ソナタ」を法被姿で演じて語り草に。関東大震災後、大阪に移住して洋楽研究所を設立する。

⑩ ユンケル先生

ピアノ科のハイドリヒ先生をはじめ、学校には才能豊かで、個性あふれる外国人教師がたくさんいた。声楽を習ったアウグスト・ユンケル先生（1899～1912在職）もそのひとりだ。葉巻をくわえて教室に入るのが常だった。時折、置き忘れて行く。学生たちがちゃっかり失敬して、スパスパくゆらした。

普段は物静かだが、レッスンとなると人が変わった。学生が間違いを犯すたびに指揮棒をたたきつけ、「君たちは豚の頭か！」と大声で怒鳴りつける。

「いいえ、豚ではありません。人間です」

「なら、人間らしい声を出しなさい。さあ、もう一度、はいっ」

また怒鳴られる。体格のいい声楽家だけに音量は十分、怒声が学校中に響き渡った。

しかし、学生たちはそんな先生が大好きだった。飾り気のない、正直な先生だったからだ。1913年（大正2）にいったん、母国のドイツに帰ったものの、日本の水がよほど合ったらしく、永住を望んで1934年（昭和9）、再来日。1944年（昭和19）1月5日、76歳の天寿を東京で終えた。

ユンケル先生はケルン音楽院、ベルリン王室音楽学校でバイオリンを学び、一時、ベルリンフィルでも活躍した俊才だ。

東京音楽学校の創設は1887年（明治20）10月。学校の史料によると、外国人教師はその2年前から採用され、1949年（昭和24）までの62年間で計43人が教鞭をとった。日本の音楽への貢献は大なるものがあった。

⑪ 「音楽新報」

話が固くなる。

音楽家・小松耕輔の業績は、「作曲」「音楽教育」「音楽評論」「音楽団体組織化」の4分野に大別される。耕輔の名が最も早く知られたのが、評論活動の分野である。1904年（明治37）の春、まだ本科1年の19歳にして、音楽の専門誌「音楽新報」の編集を担当。以来、新進気鋭の論客として気を吐き、楽壇や文壇で一目置かれる存在に。

「君はなかなか弁が立つし、文章もうまい。ちょっと手伝ってくれないか」



山田源一郎

「音楽新報」に招いてくれたのが、創刊者で音楽学校の教授だった山田源一郎^(*)だ。大柄で温厚、ざっくばらんな教師だった。耕輔は生涯、「先生」と慕い続けた。創刊号に発刊の目的が書かれている。

「理想的社会の要因たる音楽の社会的地位と発言権の欠如に鑑みて、音楽活動の活発な推進を図る」

堅苦しい文章だが、言わんとするところは音楽全般の普及と振興である。日本音楽界の来し方行く末を論じた音楽雑誌のさきがけだ。

「音楽家とはいかにあるべきか」を考え始めていた耕輔にとっては、渡りに船の誘い。演奏会評、楽壇の批評や提言、ブラームスやモーツ

アルトの論考などを毎号、発表した。

「音楽新報」の発刊と時を同じくして、山田源一郎は音楽学校の教授を辞し、音楽教師を養成する民間の学校を創設した。

「官立の学校はどれも窮屈^{かみしも}でいかん。民間の方が自由でいい」

やはり野に置けレンゲソウ。袴^{かみしも}が嫌いな山田らしい身過ぎ、世過ぎであった。

* 山田源一郎（1869～1927） 東京音楽学校教授、学習院教官。日本で最初の私立音楽学校を創設。「女子音楽学校」「日本音楽協会」「日本音楽学校」へと発展させた。雑誌「音楽新報」を創刊。音楽教科書も多数執筆した。

⑫ 多士済々の論客

小気味いい文章の冴えが評判を呼んで、耕輔はすぐに主筆となり、編集局を自分の下宿に置いた。もっとも、「編集局」とは名ばかりで、文机^{ふづくえ}がひとつあるだけ。だが、耕輔にはそれで十分だった。本名のほかに、「小松玉巖^{ぎょくがん}」「玉巖」「つゆまる」のペンネームを使い分け、筆の赴くままに原稿を書き分けた。

文壇からもそうそうたるメンバーが寄稿する。東京音楽学校の教授で、後に耕輔の結婚の媒酌人を務めた国文学者の武島羽衣^(※1)。山田源一郎や耕輔とともに日本初のオペラを作った作詞家の小林愛雄^(※2)。「山のあなた」の訳詩で知られる詩人の上田敏^(※3) などなど。

珍しいところでは、早稲田大学を創立した大隈重信^(※4) がいる。発刊号に奇抜な音楽論を寄せている。

「口を使うのを忘れて食わずに死ぬ者はないが、耳を忘れて死ぬ者は多い。音楽を聴かずに死んでいく者がすこぶる多い。せっかく天が授けてくれた機会なのに」

けだし^{けいがん}慧眼である。

- ※¹ 武島羽衣 (1872~1967) 国文学者、歌人。東京帝大文科卒。「へ春のうららの隅田川」で始まる滝廉太郎作曲「花」の作詞者として知られる。
- ※² 小林愛雄 (1881~1945) 詩人、作詞家、翻訳家。東京帝大英文科卒。オペラの作詞のほか、海外のオペラを翻訳して浅草オペラの発展に尽力した。「日本作歌者協会」を設立。後に早稲田実業学校の校長を務める。
- ※³ 上田敏 (1874~1916) 詩人、翻訳家。東京帝大英文科卒。訳詩集「海潮音」に収められたドイツの詩人カール・ブッセの訳「山のあなたの空遠く 幸住むと人のいふ」が有名。著書も多数。後に京都帝大教授。
- ※⁴ 大隈重信 (1838~1922) 佐賀藩士。明治政府で首相や外相を務め、維新後の外交や財政をけん引した。早稲田大学を創設して初代総長。にかほ市出身の探検家・白瀬蘆の南極探検隊では、後援会長として資金集めに奔走した。

⑬ 創作オペラ「羽衣」

この頃、時代の先端を行く音楽界の花形がオペラだった。1903年(明治36)7月、グルック作のイタリア語のオペラ「オルフォイス」が日本語訳され、三浦環や音楽学校の生徒たちが演じて評判を呼んだ。日本人による初のオペラ上演で、以後、同様のオペラ公演が陸続と雪崩打つ。

日本音楽界の旗手を自任する「音楽新報」も黙ってはいられない。山田源一郎と耕輔、小林愛雄の3人は1906年(明治39)5月、「楽苑会」という歌劇研究会を立ち上げる。

「音楽新報」の編集局、つまり、耕輔が間借りしている下宿屋の部屋が拠点となる。文机の周りには譜面や書き損じの原稿用紙、新聞や雑誌が散乱して足の踏み場もない。茶碗酒片手の検討会が夜毎に続いた。

「西洋のオペラを真似するだけでは物足りない。日本には日本独自のオペラがあつていい」
「これに挑まないでは『音楽新報』の名が泣く」
「日本音楽界のため、清水の舞台から飛び降りる時だ」

話が盛り上がったところで、山田が酒臭い息を吐いて耕輔の顔を覗き込んだ。

「君は作曲家志望だろう。どうだね、ひとつ自前のオペラを作ってみないかね？」

本科卒業が目前の忙しい時期だったが、耕輔は引き受けた。酒の勢いもあったが、青年らしい野心もあった。選科、予科、本科と学んだ5年間で、音楽家としての力量はどこまで付いたのか、世に問うてみたいと考えたからだ。

「オペラは西洋の総合芸術です。日本で創作するなら、日本の総合芸術である古典芸能に題材を求めるべきでしょう」

弱冠21歳の青年は、疲れも恐れも知らなかった。それからひと月ほど。構成から作詞、作曲のすべてを一瀉千里でやってのけた。選んだのは、ストーリーが広く知られている謡曲の「羽衣」^(※)だった。



オペラ「羽衣」の1場面。漁夫役は斎藤佳三

※ 羽衣 能や歌舞伎の演目として知られる。基本は羽衣伝説。三保の松原の漁師・伯良が、松の枝にかかった美しい衣を見つける。持ち帰ろうとすると、天女が現れて懇願する。「それがないと天に戻れません。返してください」。羽衣をまとった天女は、お礼に優雅な舞をひとさし舞って昇天する。

⑭ 旗揚げ公演

「楽苑会」の旗揚げ公演は6月2日。役者もオーケストラも音楽学校の生徒たちだ。会場の神田キリスト教青年会館は超満員で、入りきれない人たちが長い列を作った。事前の宣伝が効きすぎたようだった。

天女役のソプラノは、山田源一郎が校長を務める女子音楽学校の優等生・朝比奈とく。漁夫・伯良役のテノールは東京音楽学校で耕輔の後輩だった齋藤佳三^{かぞう}(※1)である。

「げに美しき衣よな」で始まるオペラ公演は拍手喝采だったが、耕輔自身は内心、忸怩たる思いがあった。構成や作曲はもとより、歌唱もオーケストラにもわか仕立て。合格点に程遠くて当たり前だった。後に「歌劇と言うには後ろめたい思いがする。作者としては、他日に大成を期したい」（音楽の花ひらく頃）と振り返っている。

ちなみにテノールの齋藤佳三は、耕輔が高等小学校時代を過ごした矢島町の出身である。同郷のよしみで気心が知れていた。耕輔の出演依頼を二つ返事で引き受けた。



矢島小学校の校庭に立つ齋藤佳三顕彰碑

その後の経歴が異色だ。オペラ出演を機に舞台美術に傾倒。3年後に東京音楽学校を中退し、隣にあった東京美術学校に転校してしまう。渡欧して日本初の商業デザイナーになった。

ほかにも多士済々。振り付けは新進気鋭の歌舞伎役者で、当時はまだ学生だった市川団子(※2)。舞台の背景に三保の松原を描いたのは、東京美術学校で洋画を学んでいた平井武雄(※3)だ。こちらは水彩画の巨匠として画壇に重きをなす。

東京音楽学校と東京美術学校は、1949年（昭和24）に統合され、現在の東京藝術大学へと名実ともに発展を遂げる。

※1 齋藤佳三（1887～1955） 作曲家、詩人で、装飾美術・生活工芸の草分け。日本に「商業デザイン」の概念を導入した。母校の矢島小学校の校庭に、自らが作曲した「ふるさとの」の譜面を刻んで「齋藤佳三音楽顕彰碑」が立つ。矢島小学校、矢島中学校ともに、校歌は齋藤の作である。

※2 市川団子（1888～1963） 後の二代目市川猿之助。欧米に留学して新しい舞台芸術を追い求めた歌舞伎界の風雲児。

※3 平井武雄（1882～1943） 北海道出身の洋画家。東京美術学校卒。ニューヨークで5年修業。日本水彩画会、昭和美術会を創立。女子美術専門学校講師。

⑮ 森鷗外の序文

この年の11月、「羽衣」の楽譜が出版された。序文を寄せたのが、明治の文豪・森鷗外(※1)であった。

「出羽の人小松耕輔氏、歌劇羽衣一編を著して世に問わんとす」



森鷗外の切手（1951.7.9 発行）

出来栄にはあえて目をつぶり、その志たるやあっぱれと、果敢な試みを高く評価したのである。耕輔は「無上の光栄」と素直に喜んだ。

森鷗外との親交は長く続いた。本郷千駄木町の自宅を初めて訪ねたとき、陸軍軍医の鷗外は、軍服姿のままあぐらをかいて、赤い毛布にくるんだ箱から葉巻を取り出した。

「君！ 日本では葉巻はこうして保存しなければ湿ってしまう」と葉巻談義をひとくさり。すっかり打ち解けた耕輔は、後に鷗外の詩「沙羅の木」に曲を付けて世に出している。

これまた余談だが、森鷗外は長女の茉莉^{まり}（※2）を溺愛したことで知られている。4年ほど後の話になるが、幼い茉莉にピアノを教えたのが、耕輔と結婚したばかりの妻広子であった。

※1 森鷗外（1862～1922） 島根県津和野町出身。東大医学部卒。漱石と並ぶ日本近代の二大文豪。「舞姫」「雁」「山椒大夫」などがある。オペラも訳詞した。陸軍省留学生としてドイツに4年滞在。陸軍軍医総監。帝国美術院初代院長。

※2 森茉莉（1903～87） 小説家、エッセイスト。鷗外に関するエッセイ集「父の帽子」や小説「甘い蜜の部屋」など。16歳まで父の膝に座ったとの逸話も。

⑩ 理想的国民楽

話をオペラ「羽衣」に戻す。

舞台がはねたのは、1906年（明治39）6月2日の午後10時。耕輔と山田源一郎、小林愛雄の3人は、耕輔の下宿屋の“音楽新報編集局”に戻ってささやかな祝賀会兼反省会。今夜の酒はめっぽうまい。しかし、3人ともなかなか酔わない。大仕事を終えた緊張感が体と心に張り付いたままで、なかなか酔えなかったのである。

「ともかくも本邦初の創作オペラをやり遂げた」と、山田が小さな声で「カンパニー」。周りの部屋は寝静まっている時間だ。お互い、ヒソヒソ声である。茶碗酒をあおった耕輔が、意を決したように話し始めた。もちろん小声で。

「僕はこれから『理想的国民楽』の樹立を目指す。今夜のオペラでよく分かったよ。聴衆はただの西洋音楽ではなく、日本の国民性や個性、風土に根差した日本の音楽を求めているのだ。これを作るのが、僕たち音楽家の使命であり、責任でもある」

小林が相槌を打つ。やはり声を潜めて言った。

「同感だ。よし、次のオペラの台本は僕が書く。小松君は作曲を頼む」

3人は小声で再び「カンパニー」。一升瓶2本が空になった頃には、夜が明けていた。

その年の「音楽新報」で耕輔は、格調高く楽壇に問う。

「一国には必ず一国の国民性があり、特徴があ



明治期の東京音楽学校正門

り、美点がある。仏独英露と音楽の作り方はほとんど相同じ。されどマイアベーアとベートーベン、ヘンデル、チャイコフスキーは相同じとは決して言えない」

耕輔ら3人の「楽苑会」は翌1907年（明治40）4月、2作目の創作オペラ「靈鐘」を発表する。台本は小林愛雄、作曲は耕輔だ。

上演中に舞台の背景が倒れたり、幕が途中で止まったり、鐘が吊り上がらなかつたり。そんなハプニングもご愛敬のうち。新聞の論評は好悪二つが相半ばしたが、悪名も無名に勝る。評判の大きさは1回目をはるかにしのいだ。

「理想的国民楽」は音楽家・小松耕輔の原点となり、目標となる。

⑰ 音楽学校生の将来

またまた話が固くなる。

オペラ「羽衣」上演の前年に時計の針を戻す。本科の3年に進級したばかりの1905年（明治38）。大胆な論文が楽壇に波紋を広げた。題して「音楽学校卒業生の将来」。大上段に振りかぶった論文が、「音楽新報」に3度にわたって連載された。内容は東京音楽学校の改革案だ。20歳の学生が、音楽学校の在り方を論じ、小さからぬ一石を投じたのだ。

当時の卒業生の進路は、唱歌の教員が圧倒的に多かった。作曲家を志したり、プロの演奏家を目指す学生は数えるほどだった。

「唯一の音楽家の養成機関なのにもったいない」

耕輔の慨嘆は骨太の問題提起へとつながっていく。

「音楽者はいかなる方面に向かい、いかにして处世の方法を講ずべきか？」

耕輔は厳しい現実を見据えた上で、社会に責任を持ち、自立できる音楽家の育成を求めた。卒業生の進路として3つを提唱する。「演劇的方面」「社会音楽の方面」「完全な奏楽隊の組織」である。

ひとつ目の「演劇的方面」は総合芸術であるオペラの振興を目指した。「発達せし国民は、発達せし芸術を要す」という訳である。

二つ目の「社会音楽の方面」とは、市井の人たちが口ずさめる、平易で楽しい音楽の振興を意味した。それには作曲家の育成が欠かせない。「一国の中心は一般民衆、特に中流階級であり、その健全な発達はその国の消長につながる」。

三つ目の「完全なる奏楽隊の組織」とはプロの演奏団体を作ることだ。定期的な演奏会や練習で常に研さんし、社会に成果を発表して報酬を得る。プロとして経済的にも技術的にも自立していけるサイクルの確立である。

⑱ 自由な校風

改革案は「理想的国民楽」の考え方と通底した。耕輔から見れば、当時の音楽学校は前例踏襲の通弊そのままに、眠っているも同然だった。ただ西洋音楽を学び、上手に演奏すれば事足れり。作曲は不要だとされた。しかし、それではこの国の音楽に明日はない。耕輔のみがひとり覚醒し、煩悶し、考えた。

書き上げられた原稿「音楽学校卒業生の将来」を最初に読んだ「音楽新報」の主宰者・山田源一郎は、にやりと笑った。

「小松君、学校側は腰を抜かすぜ。でも、怒りはしないよ。うれしくて腰を抜かすんだ。本校の学生がよくぞここまで書いてくれたってね。ただ、『注意』くらいはあるかもしれんよ。学生にここまで言われたら、立つ瀬がないもの」

前に教授を務めていた山田の言葉だけに、妙に説得力があった。

3回に及んだ論文の掲載が終わった。音楽学校の教育方針にかかわるだけに、校長室や教官室で論議を呼び、物議をかもしたであろうことは想像に難くない。しかし、音楽学校は鷹揚なものだった。耕輔に咎め立てはなく、教師たちの対応もそれまでと変わらなかった。

巷では舶来文化の香り高く、「カフェー」が出始めていた。銀座に出来たばかりの店に、山田が耕輔を誘った。

「君の卒業に差し障りがなくて、ほっとしたよ」

コーヒーの苦さに顔をしかめて、山田が続ける。

「この学校は官立にしては結構、自由な校風が流れているんだ。『学生は自由に育てろ』みたいなおおらかさがある。良くも悪くも音楽家の集まりだからね。ほかの官立学校とはひと味もふた味も違う。だから気のいい教師が多いんだ。俺みたいにさ」

耕輔は背を伸ばして高く腕を組んだ。

「そうですか、『自由に育てろ』ですか」

自由に育てられて、耕輔は1年後、首席卒業の榮譽に浴する。本科に作曲科（当時は「作曲部」）が新設されるのは1931年（昭和6）4月。耕輔の提唱から26年後のことである。

Ⅲ 教育者への道

1906 (明治39) ~1919 (大正8)

① 首席卒業の栄誉

オペラ「羽衣」の公演からひと月後の1906年(明治39)7月、耕輔は東京音楽学校の本科を首席で卒業した。来賓の皇族も臨席した式場の奏楽堂は、日本最古の洋式音楽ホール。当代随一の音響効果を誇った洋楽の殿堂に、「君が代」の斉唱が響き渡った。

卒業生の代表が呼ばれる。

「卒業生総代、小松耕輔」

「はいっ。謹んで謝辞を述べます」

玉米村を出てから5年、幾多の思い出が走馬灯のように脳裏を駆けめぐる。眼の病で長期欠席を余儀なくされたこと。練習用のピアノの順番を取り合ったこと。ユンケル先生に「豚の頭」呼ばわりされたこと。涙あり、笑いあり、すべてが懐かしい思い出だ。

青年耕輔は東京音楽学校をゆりかごにして育った。この後も志を同じくする同窓の士と、時には腕を組み、時には競い合い、時には叱咤激励されて、大成への道を歩き続ける。母校への尊敬と感謝の念は、終生、忘れることはなかった。

式場では卒業証書の授与が続いている。みんながみんな、いい顔をしていた。同じ卒業生の中に、後に留学先のベルリンで投身自殺する悲劇のピアニスト・久野久子^(※)がいた。みんながみんな、いい人生を全うしたわけではなかった。



本科卒業の記念写真。上から2列目、右から2人目が小松耕輔(東京藝術大学音楽学部・大学史史料室所蔵)

※ 久野久子(1886~1925) 滋賀県出身。東京音楽学校でピアノを専攻。助教授に。日本初の女流ピアニスト。作家宮本百合子にピアノを教え、その小説に登場する。文部省からベルリンとウィーンに留学。和服姿で通した。

② 学習院の制服

卒業を前にした昼下がり、「音楽新報」を主宰する山田源一郎が、学校に耕輔を訪ねて来た。山田にはいささか不釣り合いな、品のいい女性を伴っている。「下田歌子(1854~1936)と申します」と軽く会釈した。

下田は宮中で女性皇族の教育を担当した後、欧州に学んだ女子教育の第一人者である。学習院で女学部長を務めていた。山田は東京音楽学校の教授を辞して、民間の音楽学校を設立する傍ら、学習院でも教えていた。

山田源一郎が「えへん」とひとつ咳払い。よそ行きの顔で切り出した。

「小松君、学習院で音楽を教えてくれないか」

学習院は宮内省の管轄下にある官立学校で、皇族や華族の子弟が多く学ぶ。ひと月ほど前から山田に内々、話は聞いていた。しかし、耕輔は本科卒業後は研究科へ進むことに決めていた。

「ありがたいお話ですが、僕はここに残って勉強を続けます」

下田が笑みを浮かべて請け合った。

「それは大丈夫です。研究科に在籍したまま、学習院に来ていただきたい」

音楽学校側とも話は済んでいるという。首席卒業生だからこそ与えられた破格の待遇と言えた。学費と生活費に苦勞する耕輔に、否やはなかった。

学習院から講師の辞令を受け取ったのは9月3日。いささか窮屈な制服に身を包んで学校へ通った。制服は海軍士官型で1879年(明治12)に制定されていた。日本の学校で制服を採用したのは、学習院が最初とされる。

③ 昭和天皇の唱歌

学習院に勤めて2年後の1908年(明治41)4月、当時7歳の昭和天皇が学習院初等科へ入学された。明治天皇の孫にあたることから「皇孫殿下」と呼ばれた。学習院の院長は、日露戦争で武名をはせた陸軍大将・乃木希典(1849~1912)。明治天皇の信任が厚く、孫の帝王教育を託されたのである。

殿下の入学を前に、耕輔が院長室に呼ばれた。院長の乃木は、いつもながらの軍服姿である。伸びた背筋に品格と威厳が漂う。耕輔に助教授昇任の辞令を手渡して言った。



乃木希典院長

「小松さん、皇孫殿下に音楽を教えてくれんか。ただし、扱いは他の生徒たちと同じだ。すべからく『質実剛健』で行く。くれぐれも特別扱いはしないよう」

耕輔は直立不動の姿勢で答えた。

「おそれ多くも、謹んで拝命します」

昭和天皇は卒業までの6年間、教室の木のベンチに同級生と一緒に腰掛け、耕輔の授業を受けられた。

「陛下の御就学の御態度は誠実、熱心の二字に尽きていた」(音楽の花ひらく頃)。耕輔は自伝でこう、振り返っている。

うれしいエピソードがひとつ。

東宮御所に帰られた殿下が、いつも同じ歌を口ずさむという。

「へ月清き丘の上の影は何 ピョン ピョコ
ピョン ピョン ピョン」

はて、聞いたことがない歌だと、侍従が調べてみた。分かった。「兎と狸」という唱歌だ。耕輔の曲だった。作詞は童謡詩人の葛原しげるだが、葛原についてはこの後、触れる。

殿下は耕輔の人となりにより好意を持たれたのであろう。後に何度も宮中や御用邸、訪欧中のパリの宿舎などにお召しになって、初等科時代をしのばれた。



学習院の正門（学校法人・学習院のHPから）

④ 院長・乃木希典の涙

乃木は唱歌の授業をしばしば参観した。その都度、殿下は「院長閣下」と丁寧にあいさつされた。

4年の時、唱歌「楠木正成」を歌われた。乃木の目に宿った一粒の滴を、耕輔は忘れられない。楠木正成は鎌倉から南北朝時代にかけて、後醍醐天皇の忠臣として義を貫いた武将だ。利害も打算もまるでない、ただひたすら忠義に励んで滅びの道を選んだ。武人・乃木が、歴史上の人物で最も敬愛してやまなかったのが正成だった。

殿下は車での送迎をやめ、雨の日も、風の日も、ランドセルを背に徒歩で通学された。御所から700メートルほどの距離とはいえ、身辺警護を考えれば異例であったに違いない。すべては乃木の指示だった。

院長・乃木希典の印象は忘れ難い。やせぎすで背が高く、どちらかというと無口で、考え考え話すタイプだった。耕輔には武人というよりも学者のイメージが強い。常に軍服を着ていて、必ず「さん」付けで人の名を呼んだ。

皇居を右手に見ながら、学習院から3キロほど北に上がった一角に、神楽坂がある。高級料亭が軒を連ねる花街だ。行き慣れないにぎやかな坂を登っていたある日のこと、坂を下りてきた人力車が、耕輔の前で止まった。乗っていたのが軍服姿の乃木である。

耕輔に向かって挙手の礼をした。ところが、耕輔はまるで気が付かない。乃木が人力車から半身を乗り出しても気が付かない。乃木は耕輔の眼のつらさを知っていた。気を悪くする風もなく、にこにこ笑いながら去って行った。

そばにいた友人が耕輔の袖を引っ張り、「いま乃木大将があいさつされたよ。君はひどい男だねえ」と大笑い。耕輔の顔がみるみる朱に染まる。人力車が消えた坂道を春の風がなでた。桜が満開である。

⑤ 桜花寿ぐ結婚

1910年（明治43）4月2日、耕輔は東京音楽学校の後輩の本多広子と結婚する。三重県出

身で耕輔より4つ若い。2人の恩師にあたる音楽学校の教授武島羽衣が媒酌の労をとった。前に触れたが、滝廉太郎が作曲した「花」（へ春のうらの墨田川 のぼりくだりの船人が～）の作詞者として知られる国文学者だ。広子は卒業後も武島に短歌を習い続けた。



広子夫人

その日は朝から雨だった。満開を過ぎた日比谷大神宮の桜が、ひとひら、ふたひら舞い落ちて、石畳の参道をまだらに彩った。新郎新婦は顔も心も桜色である。披露宴は日比谷公園の老舗・松本楼だ。

「へ高砂やあ この浦舟に帆を上げてえ」

武島の謡いには、年季が入っていた。こちらは祝い酒で、顔がほんのり桜色。

⑥ 新妻の覚悟

式を終えた新婚夫婦は新橋駅へ。気疲れした顔に笑みを作って、見送りの人に手を振った。午後9時半、2人を乗せて列車が出発した。京都や名古屋を回る6日間のハネムーンである。

耕輔は身辺が清潔過ぎて、浮いた噂がまるでない。「芸術家としていささか面白みに欠ける」とは、飲み仲間の無責任な評。女性と2人だけの旅行は、どこか気詰まりで、五線紙に音符を転がすような訳には行かない。緊張している。

初めて乗る1等席も、緊張に輪をかけた。新妻も緊張しているらしい。車窓に流れる東京の夜景を、黙って眺めている。意を決して、耕輔が語りかけた。

「これから宜しく願いたい」

そして、続けた。

「君は音楽教師だ。すぐに家庭に入ることはない。日本の音楽教育のために力を発揮して、僕を手伝ってほしい」

新妻は「はい」と素直にうなずいた。

広子は生涯で1男3女を育てながら、高等女学校や小学校で15年間、教鞭を取る。仕事と家庭を両立させた女性の先駆けだった。

この夜の宿は富士山が望める国府津だ。駅が近くなって、耕輔はひとつ、言いにくそうに付け加えた。

「玉米の田舎に母や弟、妹がいる。いずれ東京に引き取りたい。頼めるか？」

父親の平蔵だけは、単身、朝鮮半島に渡って留守だった。

広子は嫌な顔ひとつせず、再び「はい」とうなずいた。そして、耕輔の顔をまっすぐに見た。

「これでも士族の娘、武家の出です。結婚を決めた時から覚悟は出来てます」

それから3年後、玉米村から母トミと5人の弟妹がやって来る。子供も生まれて、小松家はけた外れの大家族に。広子の苦勞たるや、察するに余りあった。

夫婦のおしどりぶりはつとに知られた。音楽会や講演会、パーティーには、事情が許す限り、一緒に出掛けた。結婚の翌年の1911年（明治44）3月には帝国劇場が日本初の西洋式劇場としてオープン。開場式には夫婦そろって出席している。

⑦ 大葬と殉死

日露戦争、日韓併合、大逆事件と、日本の近代史が揺れながら、もがきながら、先を急いでいる。1912年（明治45）7月30日、明治天皇が崩御した。元号は明治から大正へ。9月13日が葬儀だった。耕輔は生徒たちを引率して青山御所の前で葬列を見送った。27歳の夏である。



明治天皇の大葬

学習院へ引き上げた耕輔に悲報が飛び込む。事務職員が教員室に駆け込んだ。

「乃木院長が夫人ともども殉死されたそうです」

明治天皇の後を追って自刃したのである。耕輔は呆然と立ち尽くすしかなかった。軍人としての乃木には、人により、立場により、歴史観により、様々な見解があろう。しかし、耕輔にとっては学習院院長としての乃木だけが胸の内にある。

陣頭に立った日露戦争で、乃木は長男と次男を失っている。残る2人の子はいずれも夭折していたから、夫婦に子はない。その分の愛情を生徒に注ぎ込んだ。学校の寄宿舎で暮らし、生徒と寝食をともにした。60歳を過ぎてなお、剣道や水練は自ら指導した。

嵐の朝は暗いうちから校内を巡視、寝ぼけ眼でやって来る耕輔たち教員に「ご苦労、ご苦労」と笑顔で声をかけた。記憶のひとつひとつが、温かく、うれしく、悲しかった。

「乃木院長、お世話になりました。そして、お疲れ様でした」

耕輔は乃木の辞世をもとに「乃木大将の歌」を作曲する。思慕の念が曲にあふれて、人々の心を打ったのであろう。巷で広く歌われた。翌年8月には明治天皇ご夫妻の御製に曲を付け、「御製唱歌集」として出版した。

⑧ 秋田なまりの儒学者

この頃、耕輔は時間をやり繰りして、東京帝国大学の授業を聴講している。明治の気骨を身にまとった同郷の学者がいた。儒学者の根本みちあき通明博士（※）だ。授業が強烈だった。ちょんまげに羽織袴のいで立ちで教壇に立つのである。

秋田県刈和野村（現大仙市）出身。幕末に秋田藩の藩校・明德館の館長を務めた。戦場に立つ古武士のように、鉄扇をバシバシ叩きつけた。

「漢学は自分とともに滅びる。お前たちは私の目の黒いうちに謹んで講義を聴け」

講談調の名調子はかなりの秋田なまりである。若い学生たちは意味を解しかねて、盛んに首をひねったが、耕輔には子守唄のように聞こえた。「このような痛快な、そして身にしむ講義というものは、後にも先にも聴くことはなかった」（音楽の花ひらく頃）と、後の自伝で懐かしんでいる。



根本通明

※ 根本通明（1822～1906） 幕末、明治の儒学者、漢学者。帝国学士院会員。秋田県人として初の博士号。易経と論語に通じ、明治天皇にも御進講。

⑨ 幻の関西音楽学校

耕輔は教職や作曲、評論執筆の傍ら、音楽団体の組織化にも力を入れた。年表風にたどってみよう。

- 1907年（明治40） 東京音楽学校の卒業生を中心に「帝国音楽会」を設立。隔月で音楽会を開く
- 1910年（明治43） 「音楽教育会」を設立して学校での音楽振興を図る
- 1915年（大正4） 「音楽普及会」を旗揚げして年に10回の演奏会
- 1917年（大正6） 「作曲研究会」を設立。翌々年に1回目の作品発表演奏会。耕輔は「沙羅の木」（森鷗外）「砂丘の上」（室生犀星）「芭蕉」（北原白秋）「泊り舟」（同）などに曲を付けて発表する

すべてが順調だった訳ではない。1919年（大正8）、耕輔が音頭を取って関西での官立音楽学校創設を求める期成会を旗揚げし、国会に請願書を提出した。音楽教育の底上げのためには、二つ目の官立学校が必要だったのである。理解と機運が高まったところで、文部省が東京音楽学校の校長に意見を求めた。

しかし、これがいけなかった。校長は著名な歴史学者だったが、教育者としての信念と度量が、少々、足りなかったらしい。「それほど予算があるならうちへ回してほしい。関西に増設しても、わが校の卒業生は出しません」。話をご破算になった。

味方のはずの内側から足元をすくわれて、関西音楽学校構想は幻に終わる。音楽学校の校長にもいろいろな人がいることを学んだ。

⑩ ニコピンの童謡



葛原しげる

学習院で唱歌を指導する耕輔は、子供の音楽教材も研究と議論の俎上に載せた。仲間に加わったのが、童謡詩人の葛原しげる^{くずはら}（※1）と、音楽学校の後輩だった作曲家の梁田貞^{ただし}（※2）である。同志的つきあいが終生、続く。

ある日の夕方、3人は耕輔宅の狭い書斎で酒を酌み交わした。耕輔が本棚から唱歌の教科書を取り出す。

「固い文語調ばかりで、子供が歌うには難し過ぎる。美しい歌詞で、歌いやすく、しかも芸術的な旋律の音楽の創作が必要だ」

我が意を得たとばかりに葛原。

「同感だ。子供がニコニコピンピンと元気でいられるような歌を作ろうぜ」

梁田も膝を乗り出す。

「僕は教員になる。日本語の繊細な美しさを、歌で子供たちに伝



梁田貞の胸像（札幌市内）

えたい」

3人は毎週集まって研究を重ねた。耕輔は自伝の中で「作っては直し、作っては直し、時として果てしなく議論が続いた」（音楽の花ひらく頃）と懐かしむ。

こうして1915年（大正4）から18年（大正7）にかけて、「大正幼年唱歌」12巻120曲、続いて「大正少年唱歌」24巻240曲が刊行された。大正、昭和の唱歌の原典となった。

葛原が昭和天皇のお気に入りの唱歌「兎と狸」の作詞者だったことは、先に触れた。「ぎんぎんぎらぎら」で始まる「夕日」など、生涯で4千編余の童謡を作詞した。無類の子供好きで、「ニコニコピンピン」が口癖。耕輔と2人で作った唱歌と童謡は約200曲、校歌は約100曲に上る。

晩年、酒を酌み交わしながら、知り合ったきっかけを思い出そうとした。2人とも思い出せず、「気が付いたら、あんたがそばにいた」と、互いに指さし合って呵々大笑した。



左から小松、梁田、葛原

※1 葛原しげる（1886～1961）童謡作詞家、童話作家。東京高等師範（現筑波大）卒。出身地の広島県福山市で高校の校長を務め、「ニコピン先生」と呼ばれた。地元の「葛原文化保存会」は命日の12月7日を「ニコピン忌」とし、功績を伝承。

※2 梁田貞（1885～1959）札幌市出身。東京音楽学校で声楽と作曲を学ぶ。「どんぐりころころ」「城ヶ島の雨」などを作曲。教員を務めた中学、高校では、その風貌から「ライオン先生」と慕われた。札幌市の資生館小学校校庭に胸像と楽譜の碑。

⑪ 隆盛の浅草オペラ



大正期の浅草オペラ

耕輔は浅草オペラや寄席といった大衆演劇への目配りも忘れなかった。正統派クラシック音楽劇のオペラは、庶民的なミュージカルに装いを変え、浅草六区に活躍の場を得ていた。耕輔も「若松美鳥」のペンネームで脚本執筆や訳詞、曲作りなどを手伝った。

弟の三樹三みきぞうがオペラ劇場にいた。オーケストラの担い手を養成するため、帝国劇場が設立した管弦楽部の第1回卒業生である。指揮者兼バイオリニストとして、浅草オペラのリーダー的存在だった。耕輔が提唱する「一般民衆への音楽の普及」の最前線にいたわけだ。

浅草の雑踏をかき分けて、耕輔が楽屋に弟を訪ねた。

「ここには現代の嗜好を映す音楽が存在する。筋書きは通俗的だが、西洋音楽が一般の人た

ちにも親しまれるようになった。その功績を見落としてはいけないよ」

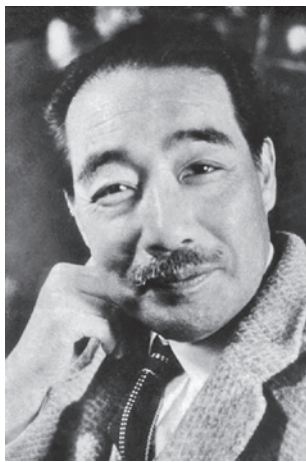
三樹三がうれしそうにうなずいた。

「オペラというよりはミュージカルのショーです。歌手もオーケストラもレベルアップして、ハイカラな娯楽を求める日本人の心をはっきりつかんだ。音楽の普及と時代の要請が、見事にかみ合ったのです」

浅草オペラに向ける弟の眼差しは熱く、兄の眼差しは優しかった。

⑫ 白秋と意気投合

音楽界で気鋭の論客となった耕輔は、文壇にも人脈の輪を広げていく。川路柳虹、三木露風、室生犀星、福士幸次郎、柳沢健と、枚挙にいとまがない。機知に富んだ談論風発が、音楽家・小松耕輔の教養と視野を広げ、地味豊かな人格を養った。



北原白秋

詩人北原白秋^(※)もそのひとりだ。

初めて会ったのは1917年（大正6）5月27日である。耕輔は江戸川河畔の葛飾村に白秋を訪ねた。玄関に「紫煙舎」と書かれた看板。あいさつもそこそこ、白秋が川向こうの料理屋へ誘った。渡し舟で向かうあたりが小粋だ。まだ日が高い。

白秋は斗酒なお辞せずの口だが、耕輔も負けてはいない。耕輔はかねて、白秋の詩集「思ひ出」を愛誦していた。酔いと興に任せて、一節を高吟した。

「過ぎし日のしづころなき口笛は 日もすがる葦の片葉の鳴るごとく」

白秋の顔がぱっと輝いた。2人の間の垣根が消えた。料理屋が看板となっても、まだ話し足りない、まだ飲み足りない。渡し舟で再び北原宅へ。夜の更けるまで盃を重ねた。耕輔の自伝に「十一時半の終電車で辛うじて家に帰った」（音楽の花ひらく頃）とある。翌朝は二日酔いだったに違いない。

耕輔が曲を付けた白秋の作品に「泊り舟」がある。あの日の江戸川河畔の情景が、情感たっぷりに描写されている。

「へ芦間出て見よ煙があがる あれは時雨のもやひ舟 煙たつなら細々立ちやれ やはり浮世の泊り舟」

※ 北原白秋（1885～1942） 福岡県柳川市出身。詩人、歌人。早大英文科卒。今日に最も歌い継がれている童謡作家のひとり。「からたちの花」「この道」「ベチカ」「待ちぼうけ」など。三木露風と並んで「白露時代」と呼ばれた。

⑬ 最期の対面

酒のつきあいはその後も続く。

白秋の酒は底抜けだったらしい。ある日、明治座の帰りに一緒になって、小料理屋へ。

「白秋は子供の三輪車に太った体を乗せ、『殿様のお通りだ、そこのけ』と部屋中を乗り回した」（音楽の花ひらく頃）

「白秋はいくら酔っても唄はうたわなかった。齒の浮くような文学談もしなかった。ただ愉快に飲んだ。それが彼のよいところだった」（同）

白秋は翌年、小田原に山荘を構えた。自伝によると、耕輔は箱根の芦ノ湖に遊んだ帰り、山荘で飲み明かしている。

詩壇の偉才は薄命だった。白秋は1942年（昭和17）11月2日、東京・阿佐ヶ谷の自宅で57年の生涯を閉じる。家が近かった耕輔は、逝去の報にすぐ駆け付け、誕生日がひと月ほどしか違わない無二の友と最期の対面を果たした。

白秋は酒がたたってか、晩年は糖尿病で眼がほとんど見えなかったという。しかし、死の間際までペンを離さなかった。最後まで詩人を全うした。

耕輔は白秋の死に臨み、音楽家の視点で作品を振り返っている。

「白秋の詩はすべての点で優れていたが、特に音楽的なりズムの点で特徴があった。彼の詩の中に流れている音楽的な要素は、すぐ汲み取ることが出来た」（わが思い出の楽壇）

⑭ 多忙な日々

このころの耕輔は多忙を極めた。午前中は学習院に出勤。午後は個々に自宅で教えたり、教えに出かけたり。その合間に作曲し、著書を執筆し、音楽雑誌に原稿を書き、音楽普及会などの会合に駆け回る。

かてて加えて、東京外国語学校（現東京外語大学）の夜学でドイツ語とフランス語を学んだ。音楽を研究する中で語学の必要性を痛感したのである。

自伝「音楽の花ひらく頃」の頁をめくる。

「カチカチとセコンド刻む音きけば時間の立つはおそろしきかな」（1916年3月22日）

「すべてをなげうって創作に没頭すべし。これ汝の生きる途なり。明日ありと思うなかれ、無常は迅速なり」（同4月5日）

30代に入ったばかりだったが、無理がたたって体調を崩したことも。妻広子の日記をめくる。

「主人発熱。39度9分。直ちに氷にて冷やす」（1915年11月16日）

「主人、三原病院へ入院す」（17日）

退院は翌12月9日だから、23日間もの長期入院だった。広子はこの間、自分の仕事に加えて、夫の代わりにピアノの出稽古や音楽普及会の例会など、逆にこちらが多忙を極めてしまう。もっとも、「主人の切符をもらいて帝劇のフィルハーモニー音楽会に行く。久々にてよき保養せり」（21日）とあるから、余得にもあずかったらしい。

⑮ 楽しい地方演奏会

「理想的国民楽」の普及には地方での活動も欠かせない。耕輔は夏休みを利用して東北、北海道や中国東北部（旧満州）へ演奏旅行に出かけた。多忙な日々にあって格好の息抜きに。長い音楽家人生での楽しい思い出のひとつだ。

旅の一例を自伝「音楽の花ひらく頃」から拾う。

1916年（大正5）7月21日夜、上野駅を出発して東北へ。旅の仲間は、前年に立ち上げた「音楽普及会」の発起人メンバーで、いずれも音楽学校の後輩のバイオリニスト東儀哲三郎（※1）と、声楽家の大和田愛羅（※2）である。

一行は秋田市を手始めに、弘前、青森、函館、札幌と1か月近く遠征。弘前では「ねぶた

踊り」を見た。耕輔が2人にうんちくを傾ける。

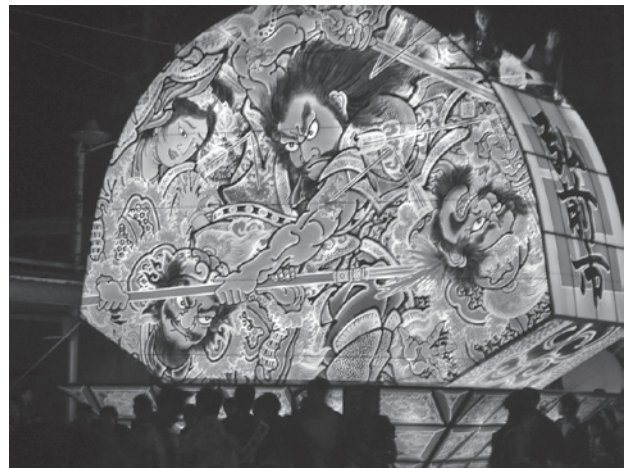
「足舞いがロシア舞踊の農民の踊りと似ているだろう。ストラヴィンスキー^(※3)の『春の祭典』にも似た踊りだ。佞武多の原型はロシアの沿海地方から東北に渡ってきたのではあるまいか」

東儀が「曲調がどこか、雅楽に似てるね」と腕組みして、巨大な佞武多人形を見上げた。

演奏旅行を打ち上げて東北からの帰途、耕輔は那須温泉で妻広子や子供たちを呼び寄せた。久しぶりの家族との再会である。

「仕事に出てばかりで済まない。たまには温泉でゆっくりするのもいいさ」

結婚して以来、仕事にかまけて、家のことは妻に任せきりだった。久しぶりに見せた父の顔、夫の顔である。一家は2週間、那須に滞在した。湯につかり、高原を散歩し、山里の珍味に舌鼓を打つ。子供たちの笑顔がまぶしかった。



勇壮な弘前ねぶた

- ※1 東儀哲三郎（1884～1952） 宮中の雅楽を伝える東儀家に生まれる。宮内省雅楽部を経て東京音楽学校でユンケルにバイオリンを学び、卒業後は母校で教える。宝塚音楽歌劇学校の指揮者として、オーケストラの充実に尽力。
- ※2 大和田愛羅（1886～1962） 東京音楽学校声楽科で学ぶ。東京第一師範、上野学園大学各教授。「へ今は山中 今は浜」の文部省唱歌「汽車」の作曲者。
- ※3 イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971） ロシアの作曲家、ピアニスト。『火の鳥』『ペトルーシュカ』『春の祭典』で知られる。1959年4月来日。

⑩ 母とお伊勢参り

那須温泉に家族で遊んでいた頃、母トミは朝鮮半島に出かけて留守だった。朝鮮総督府に勤務する父平蔵が、病気で寝込んだからだ。

平蔵の体調も落ち着いて帰国したトミは、さすがに疲れの色が隠せない。「親孝行、したいときに親はなし」という。耕輔は母の念願だったお伊勢参りに連れ出した。

出立は1918年（大正7）7月14日の夜。鉄路に揺られて翌朝、名古屋駅に着いた。駅前の茶屋で軽く朝食をしたためる。

食後のお茶を飲みながら、トミが気遣った。

「忙しいのに無理させました。済まなかったね」

テーブルの向かいで、耕輔が照れ臭そうに居住まいをただした。

「これまで何一つ、お母さんのために尽くすことが出来ませんでした。申し訳なく思っています。一緒に上方見物出来て、僕もうれ



伊勢神宮

しいんです」

鳥羽行き^{とようけのおおかみ}の列車で伊勢神宮へ。外宮の祭神「豊受大神」は、玉米村の守り神・大物忌神社^{おおものいみ}と同じ食物の神だ。社殿は質朴簡素。ヒノキの白木が目まぶしい。念願の参拝を果たしてトミがほほ笑んだ。「お父さんの分もお参りさせてもらったよ」

⑰ 「母はかなしも」

2日後には四国の金毘羅さんへ。ここで耕輔は母の老いに胸を衝かれる。

「百何段かの石段を上る母の姿に、老いの見ゆるを見て悲しくなった」（音楽の花ひらく頃）

漂泊の歌人・石川啄木（1886～1912）の一首が頭に浮かぶ。

「たわむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」

母の老いに気が付かなかった自分のうかつさを、耕輔は責めた。幼い日の自分を時に励まし、時に叱ってくれたトミ。失意の帰郷を静かに見守ってくれたのもトミだった。この母がいなければ、今の自分はない。

加賀の偉いお坊さんが言ったという。「十億の人に十億の母あれど 我が母に優る母なし」と。2人は10日間の旅を終えて帰宅の途についた。

耕輔は竹久夢二の詩「母」に曲を付ける。

「へふるさとの 山のあけくれ みどりのかどに たちぬれて いつまでも われまちたまふ 母はかなしも」

叙情豊かで、哀切に満ちた曲の原風景は、母と歩いたお伊勢参りの旅路にあったに違いない。トミ57歳、耕輔33歳の夏である。

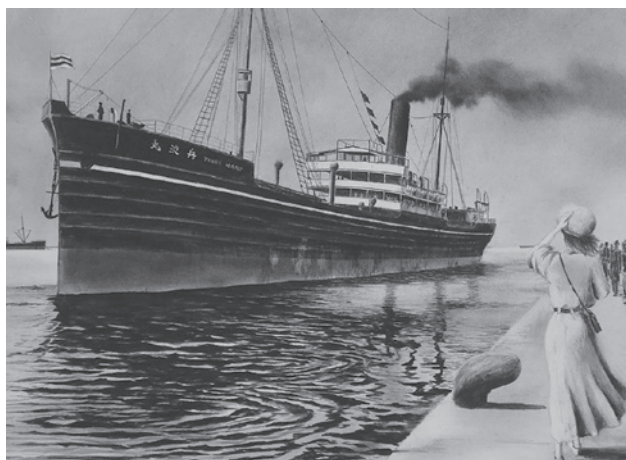
IV 欧米武者修行

1920 (大正9) ~1923 (大正12)

① 欧州航路

1920年(大正9)9月19日夕方の東京駅。「万歳」の嵐がホームの夜気を震わせた。おろしたてのスーツに身を包んだ小松耕輔が、瘦身をかがめて謝意を表す。十重二十重に取り囲んだ人の輪は200人を超えた。

恩師の山田源一郎がいる。童謡作家の葛原しげるがいる。飲み仲間の文人や詩人、学習院の同僚や教え子。人垣から少し離れて、妻の広子が目頭をハンカチで押さえ、夫を見つめている。



丹波丸

「あなた、行ってらっしゃい」

「留守を頼んだぞ」

目と目でうなずき合って、耕輔が列車に乗り込んだ。

午後7時30分。再び沸き上がる「万歳」の歓呼を汽笛が切り裂いて、急行列車が滑り出た。耕輔35歳の秋。2年半にわたる欧米遊学の旅立ちであった。

神戸港で「丹波丸」に乗船したのは5日後の朝。日本郵船が欧州航路を走らせる6,100

トンの客船だ。英国建造で乗客定員160人。「4号7番」の船室が、この日から44日間の船旅の宿となった。

上海、香港、シンガポール、コロンボを回って紅海、スエズ運河、地中海へ。フランスのマルセーユに錨を下ろしたのは、11月6日午前9時である。ここから列車で北上。目指すパリに着いたのは8日午前9時半だ。

東京駅を発ってから51日目。耕輔の音楽武者修行が始まった。

② フランス流派

時計の針を渡航前の日本に戻す。

当時、日本の音楽界はドイツ志向が主流だった。東京音楽学校の先輩・滝廉太郎はドイツのライプチヒに、後輩の山田耕筰や信時潔のぶときよし(※1)はベルリンに留学した。小松耕輔はなぜ、フランスを選んだのか？

東京駅を出発する1週間前の9月12日夕。本郷の自宅でごく内輪の送別晩さん会が開かれた。音楽界や学校関係の壮行会ラッシュにもひと区切りついた。帝国劇場での送別演奏会は予想以上の盛況で、思わぬ臨時収入も。いつもは財布のひもの固い妻の広子が、この夜だけは奮発。老舗のフランス料理店「燕楽軒」からシェフを呼んで、豪勢なコース料理をふるまったのである。

問わず語りに耕輔が話し始めた。

「フランス行きには文部省も最初はいい顔をしなかったんだ。昨今、音楽留学はドイツと相場が決まっているからね」

勤務先のアメリカから一時帰国した商社マンで、4つ年下の弟・^{みどり}翠が、ワイングラスを片手に聞き返した。

「兄さんはなぜ、フランスにしたの？」



ドビュッシー

耕輔はグラスをテーブルに置いて、ピアノの前に腰を下ろした。こぼれるような音色が部屋に満ちる。「ドビュッシー^(※2)の『月の光』ですね」と言ったのは、音楽教師の広子だ。さわりだけ弾いて、耕輔は食事の席に戻った。

「どうだい、夜空にぼんやり浮かび上がる月のようなイメージだろう。ドイツ音楽は論理的に音楽を作り上げていくから哲学的と言えるが、フランス音楽は響きの色彩感を重視する傾向があるから、その意味で純芸術的で絢爛豪華だ。僕はフランス音楽の方が好きだな。日本人の感性にも近いと思うよ」

東京音楽学校の研究科3年だった1909年（明治42）、米人ピアノ教師ルドルフ・ロイテル（在職1909～1912）が音楽学校に赴任した。着任あいさつのリサイタルで演奏したのが、ドビュッシーだった。

フランス音楽に触れる機会はそれまでもあったものの、ロイテルのピアノは耕輔の心をわしづかみにした。音楽雑誌に書いたその時の評論が、日本におけるドビュッシー論の嚆矢とされる。フランス音楽への傾斜がこの時、始まった。

※1 信時潔（1887～1965） 作曲家、チェロ奏者。大阪市出身。東京音楽学校教授。唱歌「一番星みつけた」の作曲者。万葉集の長歌に曲を付けた「海ゆかば」が、戦時中の大本営発表や出征兵士を送る際に使われるなど、軍国主義に利用されたとして、生涯、悔やんだ。

※2 クロード・ドビュッシー（1862～1918） フランスの作曲家。伝統にとらわれない独自の作曲法で、大きな影響力を持った。広く知られる曲に、ピアノ曲「月の光」がある。

③ パリの下宿屋

時計の針を再び1920年（大正9）のパリに。街の魅力を支えるのは歴史と文化だが、当時は第一次世界大戦（1914～1918）が終わったばかり。ヨーロッパの主戦場となったフランスは、まだ混沌の淵にあって、花の都パリの魅力は死んでいた。

重苦しい空気に覆われる中、既存の価値観を壊し、自由で新しい芸術を創り出そうとの機運が高まった。音楽界では「反印象主義」「新古典主義」の旗を掲げて若手作曲家が台頭する。「レ・ザネ・フォル」（狂乱の時代）と呼ばれる歴史のひとつコマだ。世の中はバブル経済が始まりつつあった。変わり目にある時代の熱気を肌で感じながら、耕輔はパリで暮らす。

パンテオン広場に面した「ホテル・パンテオン」。耕輔は11月8日、ここで旅装を解く。ホテルと言っても要は下宿屋だ。部屋は4階。窓から大きなドームの大聖堂「パンテオン」が見えた。



パンテオン

翌日はさすがに疲れが出たらしい。朝の目覚めは遅かった。ホテルのお嬢さんが、コーヒーとパンを運んでくれた。パンを手にした途端、不覚にも涙がこぼれた。東京の家のにぎやかな食卓と家族の顔がまぶたに浮かび、一瞬、寂しさがこみ上げたのである。

「僕も案外、弱い人間だな」

ひとりごちて食事を済ませ、妻と子供たちに絵葉書を書いた。

荷物を整理していると、ドアをノックして青年が入ってきた。「田中耕太郎^(※)と申します。パリの案内ならお任せを」とにこやかに握手。「僕も音楽が大好きで

す。いろいろ教えてください」と続けた。

耕輔より4つ年下の留学生だ。東京帝国大学法科の助教授で、6階に下宿していた。パリ滞在中に最も世話になり、音楽会や食事会を共にしたのが、田中だった。

法律家の堅いイメージとは裏腹に音楽通である。「法律の授業はそっちのけで、専ら音楽会や美術館、古本屋を回っています」とあっけらかん。ピアノも習っているという。オペラのチケットの買い方から、あまたある音楽会の前評判、レコード店の案内と、パリでの暮らし方のほとんどを教わった。

※ 田中耕太郎 (1890~1974) 鹿児島県出身の法学者。文部大臣、最高裁長官、国際司法裁判所判事を歴任したクリスチャン。軽井沢のテニスコートで、皇太子時代の上皇さまと美智子さまの出会いを演出したひとりとされる。

④ パリ国立音楽学校

パリ国立音楽学校へ入学したのは、ひと月後の12月8日である。看板教授シャルル＝マリー・ヴィドールの作曲クラスの聴講生である。ヴィドールは既に76歳。作曲家、オルガニストとして広く知られていた。教え子にシュヴァイツァー博士^(※)がいる。



シャルル＝マリー・ヴィドール

作曲教室に入ると、マドンナの壁画を背に、部屋の主が迎えてくれた。

「日本からようこそ。ここには才能豊かな音楽教師がたくさんいます。いい先生を見つけてください」

耕輔があいさつを返す。フランス語は既にしてかなりのレベルだ。

「日本の音楽教育はようやく始まったばかりです。フランス音楽を学んで日本へ持ち帰りたいと思います。よろしくご指導ください」

ヴィドールの言葉に誇張はなく、ほかにも有能な教師が多士済々。耕輔は和声学のポール・フォーシェや作曲家のポール・ヴィダル、同じく作曲家のヴァンサン・ダンディらに学ぶ機会を得た。当時の日記にはフォーシェの名前が頻繁に登場する。後に続く日本人留学生の多くが彼に師事した。

パリ国立音楽学校（パリ音楽院）の歴史は、ブルボン王朝時代の「王立音楽アカデミー」に

さかのぼる。「太陽王」と呼ばれたルイ14世が、1669年に開いた。耕輔には校舎に足を踏み入れた日の感動が忘れられない。

「ここは世界楽壇の聖場。幾多の天才たちがこの殿堂から巣立った。建物は欧州各国の音楽学校に比して決して立派な方ではない。しかし、どっしりした落ち着きがある。芸術に精進する音楽修道士の殿堂としての威容は十分、供えている」（世界音楽遍路）



パリ音楽院（2009年9月、四反田素幸氏撮影、この建物は現在「国立高等演劇学校」として使われている）

※ アルベルト・シュヴァイツァー（1875～1965） 独仏で領有権を争ったアルザス出身の博愛主義者。医師、神学者、哲学者、オルガニスト。アフリカで医療と伝道に従事し「密林の聖者」と呼ばれた。バッハの研究でも知られる。

⑤ クライスラーの魂

パリ国立音楽学校に入学した日、ホテルの部屋にピアノを借りた。月40フランである。ピアノを運び入れた夜、田中耕太郎に案内されて、ドビュッシー作品のピアノリサイタルを聴いた。

ホテルに帰ってワインを開けた。さざ波のような旋律が、頭から離れない。「ドビュッシーはいつ聴いてもいい」と田中がグラスを傾ける。耕輔は「僕がフランス音楽に惹かれるきっかけは、ドビュッシーだったんだ」と、ルドルフ・ロイテルの思い出話を聞かせた。



フリッツ・クライスラー

耕輔は以後、パリを拠点に各地でコンサート三昧の日々を送る。音楽に浸る至福の時間が、心と体をすり抜けた。思い出に残るバイオリニストがいる。クライスラー(※)だ。ロンドンとベルリンで2回、コンサートを聴いた。ベルリンのコンサートは1922年（大正11）10月24日。耕輔が後に振り返る。

「魂が歌い始めた。思わず涙が流れる。聴衆は水を打ったように静まる。聞こえるのは脈々たる魂の歌だけだ」（世界音楽遍路）

2人はこの後、偶然にもシカゴで顔を合わせる。クライスラーは1923年5月に日本で公演。帰国したばかりの耕輔が、歓迎の辞を述べた。合縁奇縁を感じた忘れ難い演奏家のひとりである。

※ フリッツ・クライスラー（1875～1962） オーストリア出身のバイオリニスト、作曲家。フランスを経てアメリカで永住した。日本でも高い人気を誇って、1923年の5回の公演はすべて満席だった。

⑥ 戦争の爪痕

パリに着いて間もない11月11日は、第一次世界大戦の休戦1周年記念日だった。パンテオンで盛大な式典があった。9月に就任したばかりのミルラン大統領を先頭に、無名戦死者の棺を乗せた車を引いて、長い行列が凱旋門まで続く。人々の顔は深い悲しみに満ちていた。

大戦でフランスは国民総動員の「総力戦」を経験する。犠牲者は史上空前の140万人とも。宿敵ドイツに勝利はしたものの、フランス国内が主戦場になった。人的、物的被害は、国民の受忍限度をはるかに超えた。各地で市民が犠牲になり、街が壊された。

14日には鉄道に揺られて北へ約200キロ、古都ランスの戦跡を見学した。有名なノートルダム寺院は、砲撃を受けて見る影もない。街を歩いても、無傷な建物はほとんどなく、寒空の下にかじかんだ光景が広がっていた。

午後から車で塹壕戦の現場へ。シュマン・デ・ダームの小高い丘に上ると、置き去りにされた大小の兵器や塹壕がそのまま残されている。兵士は血と泥とシラミの塹壕で、絶望感にさいなまれ、19万人が死んだ。

仮埋葬された名もなき兵士の墓が延々と。板切れの十字架を立てただけの土饅頭の上に、錆び付いた銃が横たえられていた。兵士がこの世に生きたことを示す、ただ一つの、悲しくも無残な証しであった。

耕輔は言葉を失って、その場に立ち尽くした。

「地上には音楽がある。芸術がある。年齢が違い、人種が違い、言葉が通じなくても、心の底からわかり合い、握手し合える。なのに、どうして人間は戦争をやめられないのか？」（音楽の花ひらく頃）

フランス国民もドイツ国民も、音楽を愛する民ではないか。戦場の光景は生涯、耕輔の心を離れることはなかった。

ランスの市街に戻ってホテルへ。砲撃で天井が落ちている。寒々とした思いで夕食を取っていると、隣の部屋からピアノとバイオリン、チェロの三重奏が聞こえてきた。やるせなさが胸に満ちる。

「荒涼たる火事場の跡のような町の一角で音楽を聴くのは、何とも形容出来ぬ寂しさを覚えた」（世界音楽遍路）

⑦ リストの家

パリ滞在中は、大陸に四通八達した鉄道で大概の国へ行くことが出来た。ドイツ、オーストリア、ベルギー、オランダ、イタリア、英国。帰りに米国に寄っている。その地で演奏会を聴き、音楽学校を視察し、巨匠の家や墓を訪ねた。

印象深かったひとりがフランツ・リスト^(※1)だ。生家があったのはドイツのワイマール。ゲーテ^(※2)やシラー^(※3)の生地として知られるが、当時は国民主権をうたう「ワイマール憲法」がこの地で公布されたばかり。時代を先取りした高揚感からか、街の表情は意外と明るかった。

訪ねたのは1921年（大正10）4月27日。「袖触れ合うも他生の縁」とは、洋の東西を問わないらしい。途中の列車で乗り合わせた紳士が、現地の警察署長だった。「外国人には馬車賃を高くふっかけるから」と、駅で客待ちしていた御者に料金交渉をしてくれた。



リストの家は郊外の公園近くにあった。小じゃれた別荘風の2階建てで、70代半ばとおぼしき女性が応対に出た。

「私はリストさんが亡くなるまでの35年間、おそばに仕えたのよ」

ちょっぴり自慢げに角ばった鼻が上を向く。

2階に大きなピアノがあった。米スタンウェイ社から贈られたという。机には使い古したインクのつぼやペン、吸い取り紙が、生前のままに置いてある。



ワイマール市街とリストの家

後ろの書架に3人の娘の子供時代の写真があった。ひとりが後にワーグナー^(※4)の妻となるコジマ夫人だ。案内の女性が、耕輔に聴きとれるよう、ゆっくりとしたドイツ語で説明する。

「ワーグナーもここに来たことがあります。だけど、ワーグナーは態度がやや傲岸。リストは温厚な方でした」

※1 フランツ・リスト（1811~86）ハンガリー出身のピアニスト、作曲家。ドイツやオーストリアなどヨーロッパ各地で活躍した。交響詩の創始者とされる。

※2 ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749~1832）ドイツを代表する文豪。「若きウェルテルの悩み」「ファウスト」など。シラーとともにドイツ古典主義文学を築いた。ゲーテの作品にはシューベルトら多くの作曲家が曲を付けた。

※3 フリードリヒ・フォン・シラー（1759~1805）ドイツの詩人、劇作家、思想家。独自の哲学に基づいた理想主義や英雄主義は、ドイツ国民の精神生活に大きく影響。ベートーベンの交響曲第9番第4楽章「歓喜の歌」の詞で知られる。

※4 リヒャルト・ワーグナー（1813~83）19世紀を代表するドイツの作曲家。ロマン派歌劇の頂点に立ち、「楽劇王」と呼ばれた。思想家、文筆家としても知られ、ヨーロッパに大きな影響を及ぼした。

⑧ ワーグナーの墓碑

2日後、そのワーグナーの家を訪ねるため、チェコとの国境に近いバイロイトへ。列車を3度も乗り換えたが、ここでもりゅうとしたスーツの紳士と道連れに。40代半ばで、当地で病院を経営し、医学校の教授も務めるドクトルだった。

「ワーグナーの長男ジークフリートとは懇意です。ぜひ案内させて頂きたい」

またまた袖触れ合う縁に甘んじた。翌朝、ドクトル宅を訪問。一緒に「ヴァンフリート館」と称するワーグナー邸へ。

案内人に連れられて、ワーグナーの墓へ詣でる。黒大理石の上に立派な花輪が置かれていた。墓碑を囲むようにして老木が林立。若葉に降り注ぐ日差しが目まぶしい。

墓の周りを二度、三度と、ゆっくり歩いた。

「東洋の果てからあなたの墓を見にきました。闘いに明け暮れた人生とお察しします。でも、最後には素晴らしい休息の場を見つけられましたね。静かにお休みください」（音楽の花ひらく頃）

西洋音楽界の巨匠である。怖れにも似た感慨が胸にこみ上げた。

⑨ コジマ夫人との語らい

ヴァンフリート館へ入る。長男のジークフリートはイタリアへ演奏旅行中だった。ワーグナーは晩年の10年間をここで暮らした。応接間に大きなピアノが座る。オペラの出演者たちの塑像が、来客を出迎えた。



コジマ・ワーグナー夫人

ヴァンフリート館の左手に、いささか質素な建物があって、家族はここに暮らしていた。コジマ夫人^(*)に面会を求めたが、風邪で遠慮したいとの由。あきらめて外に出たところで、案内人が追いかけてきた。はるばるやって来た日本の音楽家を気の毒に思ったのだろう。

「少しの時間ならお会いして構わないそうです」

2階の居間に通された。窓からワーグナーの墓が見通せる。夫人は朝な夕なに墓を眺め、亡き夫と語っていた。御年84歳。小柄で上品な女性だった。羽毛のうちわであおぎながら話し始めた。

「遠くからようこそ。フランス語とドイツ語、どちらがよろしいですか？」

「どちらも怪しいのですが、フランス語の方が幾分、ましかと。いまお庭でお孫さん方を見かけました」

「あれが今の私の一番の楽しみです」

夫人はその場で孫と一緒に写った写真にサインし、プレゼントしてくれた。

ワーグナーが建てたバイロイト祝祭歌劇場について尋ねると、大戦が始まった1914年に公演して以来、一度も使っていないとのこと。ここにも戦争の影が。

「でも来年はリハーサルをして、再来年には公演できそうです」

「この頃では、日本でもワーグナーを聴くことが出来るんですよ」

耕輔はこの後も夫人と文通して、近況を確かめ合った。

* コジマ・ワーグナー（1837~1930） リストの娘でワーグナーの2番目の妻。夫の死後、バイロイト音楽祭を取り仕切ってワーグナー作品を上演。哲学者ニーチェは「高貴な天性の持ち主」とコジマ夫人を称賛した。

⑩ バイロイト祝祭歌劇場

バイロイト祝祭歌劇場は、街の中心部から2キロほど北の丘の上にあった。菩提樹とアカシアの並木道をドクトルと並んで歩く。やがて着いた劇場は、正面から見ると教会堂か学校のように見えた。

完成は1876年。収容客数1500人。天才ワーグナーが誰に気兼ねもなく、自分の作品だけの

演奏を目的に造った。

内部はすべて木造だ。ギリシャ円形劇場をモデルにレイアウトされ、すべての座席が舞台に向くよう、工夫されていた。舞台の設備が圧巻だった。奈落から天井までの高さは客席の3倍だ。奥行も客席より5割ほど広がった。

「何度来ても素晴らしい劇場です」と、ドクトルが胸を張った。

劇場を後にした耕輔は、その足でドクトルの家に招かれた。ランチをごちそうになる。ドクトルは独身だそうで、一緒に暮らす妹が座を盛り上げてくれた。

「今日はありがとうございました。ドイツ音楽の神髄を見た思いがします」

「たまたま仕事がない日で良かった。休みの日は暇なのです」

ワーグナーに触れた感動で、体が火照っている。乾いたのどに地元産ワインがおいしかった。見も知らぬ一人旅の日本人を、こうまでもてなしてくれる。ドイツ人に対する好き嫌いや歴史的評価は人それぞれ、国それぞれだが、一昨日の警察署長といい、この日のドクトルといい、ドイツ人の優しさに触れる思いがした。



バイロイト祝祭歌劇場

⑪ 楽聖たちの墓地

5月22日はウイーンへ。「楽聖たちの墓地」を訪ねるためだ。

並木道を歩くと、楕円形の花園の後ろにモーツァルトの墓碑があった。碑を中心に左後方にベートーベン、右後方にシューベルト、左前方にヨハン・シュトラウス、右前方にフランツ・スプベの墓が並ぶ。巨匠たちのオーラが足元から立ち上り、季節外れの暑熱となって耕輔を包んだ。

グルック(*)の墓の前で60歳ほどの女性に出会った。

「日本の方にお会いするのは初めてです。グルックはお好きですか？」

「嫌いじゃありません。日本人が演じた最初のオペラがグルックでした」

女性が続ける。

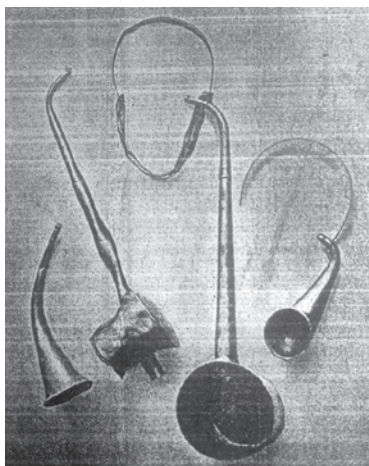
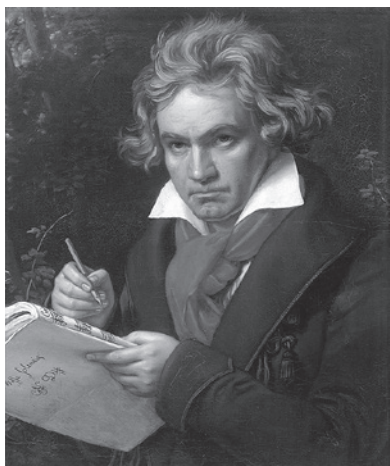
「ベートーベンは努力の人ですが、モーツァルトは生まれつきの真の天才です。私もチェロを弾きます。ウイーンはいいところですが、戦争で何もかもさんざんです」

ここにも戦争の影が色濃く。立ち去る女性の背中が寂しげだった。

* クリストフ・グルック (1714~87) ドイツ生まれのオペラ作曲家。オーストリアやフランスで活躍、「オペラの改革者」と呼ばれた。1903年、東京音楽学校の奏楽堂で、イタリア語のオペラ「オルフォイス」3幕が、日本語に訳されて上演された。日本人による初のオペラであった。

⑫ ベートーベンの聴音器

ドイツに戻って5月30日はボンへ。はるかアルプスを水源と発し、「父なる川」と呼ばれ



ベートーヴェンと聴音器 (小松耕輔著「世界音楽遍路」)

胸像が座っていた。

2階に降りる。生前に使ったピアノは、象牙の鍵盤が使い減りして、ところどころで木地がむき出しに。命を削って音楽に生き、音楽に殉じた苦悩と煩悶が刻まれていた。どこか狂気が宿って、凄惨な感じがするピアノだった。

次の部屋で耕輔は息をのむ。大小4つの聴音器がテーブルの上に。難聴の作曲家・ベートーヴェンの命綱であった。小さいのは長さ2.4センチほどで、動物の角のような形をしている。最も大きくて50センチほど。柄杓のような形をしていた。

聴覚を失ったベートーヴェンは晩年、ウィーンで交響曲第九番を演奏した際、嵐のような喝さいが聞こえなかった。演奏者のひとりが彼の顔を聴衆に向けて、初めて演奏会の成功を知った。一瞬、天井を仰いだ後、恥ずかしそうに答礼をした。

「音楽者にとって、これ以上、悲惨なことがあり得ようか。私は涙なくして4つの聴音器を見ることが出来なかった」 (音楽の花ひらく頃)

耕輔も視力で苦勞してきた。つらい思いの幾分かでも分かち合えた気がした。

※ ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) ドイツを代表する作曲家。古典派音楽を集大成して、続くロマン派音楽に橋渡しした。世界の音楽家に最も影響を与えた作曲家とされ、日本では「楽聖」と呼ばれる。交響曲第九番の演奏は、各地で年末の恒例行事に。

⑬ ライン川有情

胸にしまうには重たすぎる感慨を引きずって、ライン川の橋を渡った。広大な流れを眺めていると、頭の中をベートーヴェンの音楽が、次から次へ渦を巻いて流れた。第5番「運命」の出だしの音符が、怒涛のようにたけり狂い、第九の合唱曲「歓喜の歌」がクライマックスへ。軽いめまいを覚えて、耕輔は橋の欄干に両手をついた。

「あの豪壮な、男性的な音楽と、その裏に蔵された無限の悲哀とそれを彩る憂鬱とは、とりもなおさずこの川の姿である」 (音楽の花ひらく頃)

ケルンに向かう汽船に乗った。甲板から子供たちの歌う「ローレライ」(*)。大人たちがすぐ、低音部を和した。にぎやかな四重奏が船内に満ちる。この国では人々の生活に音楽が溶け

込んでいた。

晩春の夕日が西に傾き、朱く照らされた雲が、肖像画のベートーベンに見えた。聴音器を下界に向け、ローレライの合唱にタクトを振っている。ちょっぴりうれしそうだ。耕輔の胸の中の憂鬱が少しだけ解け、ライン川の水に流れて消えた。

※ ローレライ 世界的に有名なドイツの歌曲。日本には明治末期に紹介されて広く歌われた。「ローレライ」とは「妖精の岩」の意味。ライン川の中流で大きな岩があって難所となり、多くの船乗りが命を落としたと伝わる。

⑭ 先駆者サン＝サーンス

パリ滞在が1年を過ぎた1921年（大正10）12月17日、サン＝サーンス^{（※）}の訃報が飛び込んで来た。旅先のアルジェで亡くなったという。86歳。旅に生きて、旅に恋し、旅に死んだ。

自宅はパリの公園近く。耕輔は公園の散歩が日課だったから、よく知っている。アルジェから帰ったら訪問する約束を取り付けていた。その矢先の突然の訃報。痛恨の極みだった。

サン＝サーンスはこの国における国民音楽創造のリーダーであり、耕輔には理想のお手本と映った。普仏戦争（1870～71）で敗北し、落ち込む国民を奮い立たせようと1871年2月、「国民音楽協会」を旗揚げして、フランス音楽振興の国民運動を展開した。

当時、室内楽曲や管弦楽曲はドイツやオーストリアの作曲家の作品ばかりが演奏されていた。サン＝サーンスはフランス人作曲家の新作の演奏を呼びかけ、主だった作曲家たちがこの運動に参加したのである。

運動の底に流れるナショナリズムは別として、音楽振興の国民運動には共感するところ大、学ぶところも大。耕輔は帰国後の1927年（昭和2）、同じ名前の「国民音楽協会」を日本で立ち上げる。



サン＝サーンス

※ カミュ・サン＝サーンス（1835～1921）作曲家、ピアニスト、オルガニスト。多彩な文筆活動でも知られる。フランス音楽界における国民的英雄。日本では「動物の謝肉祭」が有名。最高峰といわれたマドレーヌ教会のオルガニストを務めた。

⑮ 「皇帝の葬列」

サン＝サーンスの葬儀は、多大な功績と高潔な人柄に国中が謝意と敬意を表し、異例の国葬に。葬儀は12月24日。パリの冬には珍しい青空の下、耕輔はその一部始終を目に焼き付けた。

マドレーヌ寺院前の広場は、群衆で埋め尽くされている。古代ギリシャ建築のカトリック教会は威厳に満ち、コリント式の大円柱が冬の弱い日差しを四方にはね返していた。

午前10時。教会のパイプオルガンが大音量で響き渡った。故人が若き日の20年間、専任奏者を務めた祈りと癒しのオルガンだ。やがて、サン＝サーンスの曲の演奏が始まる。総勢250人の大編成。葬列は「英雄行進曲」で送り出された。伸びやかで、厳かな曲である。6頭立て

の馬車の前後を儀仗兵が守り、群衆が脱帽して見送った。

葬送を最後まで見届けようと、耕輔は車を呼んでモンパルナスの墓地へ急いだ。ここも群衆でいっぱいだ。やがて葬列が上ってくる。

後の自伝で、抑制を利かせた筆致で描写する。

「それは全く皇帝の葬列であった。私はかくまで威容と感激に満ちた葬列を見たことがない。美しく、輝かしく、そして悲しく、つつましく…」(音楽の花ひらく頃)

群衆は水を打ったように静まり返り、棺の前にこうべを垂れた。耕輔の近くで、だぶだぶのズボン姿で太った職人風の男がつぶやいた。

「ああ、我々のサン＝サーンスが死んだ！ 音楽の帝王が死んだ！」

耕輔は墓の前に立ち、棺の上に落ちる最後の土の響きを聞いた。

⑩ ファンファール

小松耕輔は日本へ帰国後、合唱コンクールの振興に尽くした。原点が欧米の各地で見た多彩なコンクールである。フランスでは「ファンファール」と呼ばれた。出演するのは、地域や職場でチームを作る一般の市民だ。

初めて見たのは、1921年(大正10)6月1日のパンテオン広場。管弦合唱団のコンクールである。1チーム50~60人ほどが、朝の9時、パリの東西南北から団旗を掲げて集結する。旗のてっぺんで、過去の受賞メダルが誇らしげに揺れている。

旗を持つ男のひとりが、ベンチでたばこを一服し、出番を待っていた。金ボタンのユニフォームに、「ケピ帽」と呼ばれる円筒形の帽子。「ボンジュール」と声を掛けると、「ボンジュール」とにっこり。

「年に一度のお祭り。この日のために1年を働いているようなものさ。戦争のつらい思い出を忘れたいしね。だから、みんな一生懸命だよ」



パリから出された年賀状

後の紀行文から、耕輔の共感ぶりが伝わってくる。

「何千人という民衆によって演奏される光景は壮観無比。民衆の精神は全く一体となって真の協同が出来る。この日はパリ全市がラッパの音で埋め尽くされた」(世界音楽遍路)

壮観の裏にはフランスの音楽の長い歴史があり、重厚な蓄積がある。

同じ広場で2か月後に金管合奏のコンクールがあった。参加者たちは日の暮れるまで演奏。フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」を歌いながら家路についた。「音楽もここまで一般的に普及しなければその甲斐がない」（音楽の花ひらく頃）。満ち足りたあの顔、この顔を思い浮かべながら、耕輔は帰国後、各種の音楽コンクールを創設し、音楽の種まきに奔走する。

⑰ 日本人倶楽部

パリ滞在中、耕輔は日本から来る各界各層の人士と交流を重ねた。格好の社交場となったのが「日本人倶楽部」だ。洋画家の東郷青児（1897～1978）、フランス語学者の折竹錫^{たまう}（1884～1950）、社会学者の綿貫哲雄（1885～1972）、バリトン歌手の照井栄三（1888～1945）ら、多くの画家や文化人が集まり、耕輔の散歩や会食の仲間となった。



藤原義江

テノール歌手の藤原義江^(*)もそのひとりだ。ロンドンを拠点に活動していたが、浅草オペラ時代からのつきあいである。再会は1921年（大正10）7月24日だ。

「オペラはこちらが本場だ。勉強になるだろう」とワインを勧める耕輔に、ひと回りほど年下の藤原が、彫りの深い顔に笑みを浮かべて答えた。

「『ミラノには歌の教師とテナーと人間がいる』と言いますが、初めてオペラを聴いた時には体が震えました。浅草オペラなんて、オペラのうちに入りません。天と地ほどの開きがあります」

藤原は自由奔放な振る舞いから、欧州の日本人社会で孤立。その悔しさと寂しさをばねに精進を重ね、米国や帰国後の日本で大輪の花を咲かせた。そんな藤原が、耕輔には好もしく映った。リサイタルに足を運び、「彼の芸術は完全に聴衆を魅し去った」（音楽の花ひらく頃）と手放しでほめた。

こぼれ話をひとつ。藤原義江は訪欧の船旅で音楽家の信時潔と知り合いになった。留学先のベルリンに訪ねた時の様子を、自伝で振り返っている。

「ベルリンで信時さんの家を訪ねると、下宿の真っ暗な一室でセロを弾いていた。あまり部屋が暗いので、音は聞こえても信時さんもセロも見えなかった。まだ昼過ぎというのに、想像もつかないベルリンの憂鬱さである」（歌に生き 恋に生き）

天性の楽道家である藤原には、信じ難い光景であっただろう。信時のストイックな留学生生活を垣間見るようで、興味深い。

* 藤原義江（1898～1976）男性オペラ歌手。父親がスコットランド人、母親が日本人のハーフ。「我らのテナー」の愛称で、戦前から戦後にかけて活躍。欧米各国で公演を重ねた後、藤原歌劇団を創立して日本オペラ界の発展に尽くした。一方で、派手な女性遍歴のゴシップが新聞紙面をにぎわした。

⑱ バロン薩摩

藤原義江はパリで耕輔と再会した時、まだ二十歳そこそこの大富豪・薩摩治郎八^(*)を伴っ

ていた。パリに暮らして、後に「バロン薩摩」と呼ばれ、日本人芸術家の支援者として知られた。

耕輔と親しくなったのは、湯水のように散財する前の、比較のおとなしい時期の薩摩である。妹がパリにピアノ留学した際には、耕輔が身元引受人に。パリ国立音楽学校の教授ポール・フォーシェにも引き合わせた。若い薩摩は、パリ暮らしの先輩の耕輔に案内されて、音楽会や演劇、旅行へと足を運んだ。

フランス文学者の鹿島茂は、好著「蕩尽王、パリをゆく 薩摩治郎八伝」の中で、パリ社交界にデビューするまでの薩摩の足取りを、耕輔の自伝「音楽の花ひらく頃」から時系列的に追跡。几帳面な日記録に助けられたようで、「パリでの治郎八の足跡を知る上でまたとない貴重な文献」と評価し、感謝する。

耕輔の影響もあったであろう、薩摩はフランス音楽の日本への導入に大きな役割を果たす。1925年（大正14）10月、フランス人ピアニストのジル＝マルシェックスを日本に招いて6夜のリサイタルを成功させた。

耕輔は「驚くべき音響の詩人！」（音楽の花ひらく頃）と絶賛したが、「日本の聴衆は、この時初めて本格的なフランス音楽の演奏に接し、大きな衝撃を受ける」（四反田素幸「小松耕輔の業績」）。耕輔の幅広い人脈が、こういう場面でも生かされたのである。



バロン薩摩の評伝

※ 薩摩治郎八（1901～76）「木綿王」と呼ばれた東京・日本橋の豪商の孫。実家が送金する莫大な資金で、パリで豪遊生活を送った。秋田県立美術館の壁画「秋田の行事」を描いた藤田嗣治ら、多くの芸術家を支援。日本人留学生のための宿泊研修施設「パリ日本館」を建設した。

⑱ パリの昭和天皇

欧州訪問中の皇太子（後の昭和天皇）ともパリで再会して、昼餐に招かれた。1921年（大正10）6月28日である。戦艦「香取」「鹿島」の2隻の艦隊で各国を回られているとのことだった。

耕輔は学習院初等科時代の6年間、音楽をお教えしている。遠い異国の地にあつてのお召しに、殿下の気遣いと優しさが感じられ、うれしかった。

皇太子は翌29日、第一次世界大戦の戦跡を視察。「戦争賛美者にこの光景を見せるべきだ」とお話しになり、戦争被災者のために1万フランの下賜を命じられた。

耕輔は同じ年の12月、フランス陸軍士官学校に留学中の東久邇宮稔彦殿下（1887～1990）から、晚餐に招かれている。殿下は終戦直後に首相に就任。激動と混乱の真ただ中で戦後処理内閣を率いた。

⑳ 父と弟の訃報

この間、身内の不幸が続いた。1921年（大正10）12月に、すぐ下の弟三樹三がチフスで死去。31歳の若さだった。「四季はなお定まれる序あり 死期は序を待たず」と、「徒然草」の一説が耕輔の口を衝く。翌年3月には父平蔵がソウルで亡くなった。享年68歳であった。

異国の地で、肉親の訃報ほどつらいものはない。父を偲んだ一首がある。

「父と子のえにし薄しと思わねどいまわの水をとらぬ悲しさ」

耕輔は平蔵の理解と英断があったからこそ、東京への進学がなかった。今こうしてパリにいられるのも、あの父とあの母がいたからだ。

4歳下の三樹三は、いつも耕輔の後をついて来た。一緒に明笛を吹いたのも懐かしい思い出だ。短い人生には、短かったが故に濃密な春夏秋冬があったはず。耕輔はひとり静かにスコッチをなめ、三樹三に呼び掛けた。

「向こうで親父をよろしくな。たまにはバイオリンでも聴かせてやってくれ」

落ちる涙がスコッチを割り、グラスの底に2人の顔が浮かんだ。笑っているような、泣いているような…。耕輔は帰国後に出版した紀行文「世界音楽遍路」の序文に書いた。「本書をこの二人の霊前に供えたい」と。

②① ニューヨークのジャズ

帰国の途中に立ち寄ったのが、列強の一角に加わり始めた米国だ。大西洋を横断して1923年（大正12）1月13日、ニューヨークの土を踏んだ。友人の三浦省三が迎えに来てくれた。

米国の滞在はひと月余り。ここではニューヨークでのジャズ体験に触れる。

三浦が大きなジャズホールに誘ってくれた。度肝を抜かれた。ステージと客席が一体となって、歌い、演奏し、踊っている。「しょっちゅう飛んだり跳ねたりしていなければ、客が承知しない」（世界音楽遍路）。今まで聴いた音楽とはまるで違う、異質の音楽と異様な空間がそこにはあった。

叩きつけるドラム、耳をつんざくトランペット。やたらとテンポが速く、無駄に音量の大きい演奏に閉口しながらも、音楽家の感性のアンテナが何かを捉えた。言葉で説明するのは難しいが、心の揺らぎが不思議と心地良かった。



今では日常に溶け込んだジャズ（札幌市内で）

外に出ると雪が舞っていた。ニューヨークの冬は寒い。コートの襟をすぼめて、ダウンタウンのショットバーへ。

体を温めるようにバーボンを2杯、ロックであおって、耕輔が切り出した。

「私に言わせれば、ジャズは殺伐として下品だ。でも、それだけではない何かがあるよ。アメリカ人の生活に根差した新しい音楽だな」

三浦がバーボンをお代わりして言う。

「ジャズはアメリカ人の魂の叫びだ。ここ

は人種の^{るっぽ}垣塙。差別もあれば、犯罪もある。鬱屈した魂の解放がジャズだ」

頭の中ではまだ、トランペットの音が鳴りやまない。頭をぶるっと振って続けた。

「野蛮と文明がひとつの鍋の中で煮えたぎっている。不思議な困惑と陶酔が、アヘンの煙となって聴覚に迫ってくるようだ。天国と地獄との共存だよ」

三浦がいたずらっぽく混ぜっ返す。

「クラシック音楽の王道を歩く小松先生には合わないかな？」

耕輔が「うん、ちょっとね」と笑ってグラスを置いた。

「僕はパリでつくづく感じたよ。音楽は急速な勢いで変わりつつあるってね。ヨーロッパだって、神を賛美するだけの音楽は消えゆく運命にある。ジャズが将来、世界の音楽にどう影響して行くのか？ 実に興味のあるところだ」

たかがジャズ、されどジャズ。外は雪が降り続けている。

② 横浜港の栈橋

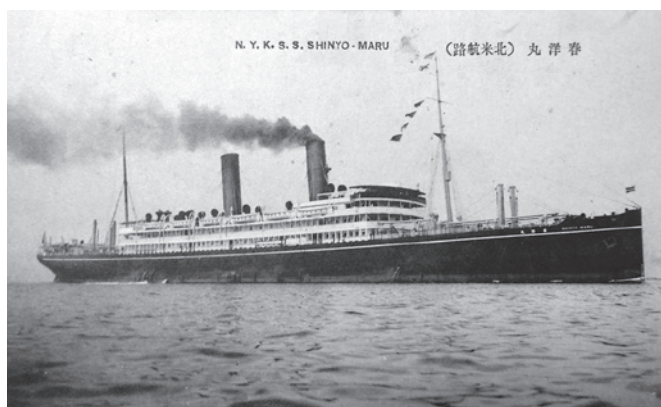
1923年（大正12）3月9日朝。横浜港の栈橋に、サンフランシスコ航路の船を待ちわびる一団の人たちがいた。やがて、沖合に2本の煙を上げる豆粒のようなシルエット。

「見えたぞ」

「あれだ！」

迎えの人たちの輪から歓声が上がる。3週間の旅を終えようとしている東洋汽船の大型客船「春洋丸」（13,377トン）であった。

豆粒のシルエットは、やがてあたりを圧する巨象となって、2隻のタグボートに押されたり、引っ張られたり。煙突からももうもうと上がっていた太く、黒い煙が、大仕事を終えたとばかり、ぱたりとへたり込んだ。ドラが鳴る。着岸は午前9時だった。



春洋丸

トラップを降りて故国の土を踏んだ。小松耕輔38歳の誇らしい凱旋である。右手に重そうなトランク。2年半の欧米遊学で集めた音楽関係の資料や譜面、日記類が、思い出とともにぎっしり詰まっていた。

「小松先生、お帰りなさい」

「ご無事で何よりです」

東京音楽学校の後輩や学習院の同僚が歩み出る。

ひと呼吸はさんで、妻の広子が満面の笑みで近付いて来た。

「お帰りなさい、あなた」

「ただ今。留守中、心配かけたね」

後ろに母トミと弟の翠、平五郎、清、妹の千代。耕輔は船会社に頼んで、家族を船内に案内、船旅のよもやま話を聞かせた。

③ 旅の終わり

帰りに本郷の曹洞宗・喜福寺に立ち寄った。父平蔵と弟の三喜三が眠っている。墓前に花を手向け、帰朝を報告した。

「葬儀に出られなくて申し訳ありませんでした」

不義理を詫びて合掌した。

長い旅が終わった。

欧米の音楽のただ今現在を知ることは、日本の立ち遅れを直視することでもあった。「私は

ペンを投じて慨嘆せざるを得ない。我が日本の音楽教育の現状は、何という情けない有様であろう」（世界音楽遍路）。しかし、あきらめはしない。夢を追うのも音楽家の仕事だ。故国の光を体に浴び、故国の風を心に通して、耕輔は再び、前を向いて歩き出す。新しい旅が始まった。

V 円熟期へ

1923 (大正12) ~1966 (昭和41)

① 東京シンフォニー

1923年 (大正12) 3月。帰国の翌日から小松耕輔は動き始めた。昼間に家に居ることはほとんどなく、あちらへ出かけ、こちらに呼ばれて、楽壇振興の旗を振った。

あきれたような顔で、広子がため息をついた。

「お疲れなんですから、少しはゆっくりされたいかがですか？」

夫が不機嫌な声でたしなめる。

「外国へ遊びに行ったら訳じゃない。ぼんやりしている時間はないんだ」

妻のあきれ顔が、あきらめ顔に変わった。



壮年期の小松耕輔

欧米遊学の2年半で、策は十分に練り上げてある。心に帆をかけ、満を持しての行動開始だ。手始めに動いたのが、東京シンフォニー管弦楽団の創設の後押しだった。

総員80人の大所帯。帝国ホテルと横浜グランドホテルのオーケストラ団員がメインだったが、共産革命から逃れたロシア人演奏家も少なくない。ふた月で3回の演奏会をこなすなど、パワー全開で走り出した。

ある日のステージの幕間。創設に協力した発起人の面々に謝辞を述べて、耕輔が話し始めた。

「欠点は多々あるが、この楽団には聴衆を引き付ける魅力があります。指揮者の優れた技量と、演奏者の熱心さです。何よりも熱い志がある。期待出来るオーケストラです」

見立て通りに、東京シンフォニーの演奏会はどこでも大入り満員。期待以上の滑り出しを見せた。



1946年6月27日公演のプログラムに掲載された写真 (東京交響楽団HPより)

② 関東大震災

首都圏をまさかの大地震が襲ったのは、1923年 (大正12) 9月1日の正午前。関東大震災である。日本の心臓部が壊滅的打撃を受けた。東京シンフォニーは演奏どころではなくなって

万事休す。解散の憂き目を見て、音楽界はにわか冬を迎える。

大震災の日は朝から雨だった。耕輔は阿佐ヶ谷に新居を建築中で、それを見に行こうと身支度していたところを激しい揺れに襲われた。

「みんな外へ逃げろ！お母さん、こっちへ！」

妻広子は勤務先の東京女子高等師範学校で二学期の始業式を終え、姑トミの薬をもらいに薬局へ。そこへ大きな揺れが来た。テーブルの下に潜り込んだ。ガラスが割れ、壁が崩れ落ちた。揺れが次々とやって来て、立ってられない。

「うちは大丈夫かしら？ お母さんや子供たちは無事かしら？」

不安が胸をよぎる。誰かが念仏を唱え始めた。揺れの合間を見て、やっとの思いで外へ。電車が止まっている。がれきの街の中を小一時間、本郷の自宅目指して懸命に歩いた。両手に傘と雨合羽。下駄ばきである。汗が吹き出した。



関東大震災

③ 家族の絆

幸いにして、家族にけがはなかった。家も無事だ。しかし、揺れがやまない。そのたびに、みしみしと不気味な音がする。外にイスを持ち出し、シイの木の下にゴザを敷いて身を寄せ合った。

当時の小松家は、耕輔夫婦と子供たち、耕輔の母、弟、お手伝いさんを入れて10人近かった。家長の威厳を身にまとして、耕輔が声を励まして言う。

「みんな落ち着くんだ。揺れはいずれ収まる。火の始末に気をつけるんだぞ」

広子が子供たちの顔を順番に覗き込んだ。

「大丈夫よ。こんな時こそ家族のまとまりが大切なのよ」

いつもは騒がしい子供たちが、けなげにもおとなしく座っていた。

夕食はビスケットと牛乳で済ませた。広子が近くの八百屋に行くと、ローソクやマッチ、缶詰を買い求める人たちであふれている。夜はゴザの上に夜具を並べて野宿した。東京中がそんな有様だった。

翌2日の朝はコンロを持ち出してご飯と味噌汁を作った。温かい食事にみんなのほおが緩む。類焼に備えて、めいめいが大事なものと着替え1組を風呂敷に包んだ。

3日は朝から再びの雨。玄米3キロうどん、ソーメンを何とか手に入れた。食料の不安は尽きない。そこへ弟の清が、焼け出された友人とその両親を連れて来た。身を寄せる先がないらしい。

「困ったときは相見互いだ」

耕輔夫婦は当たり前のように迎え入れた。しかし、友人一家は小松家の家族の多さに遠慮し

たらしい。「親戚を訪ねてみます。ご心配をおかけしました」と出て行った。善意と気遣いのはざま、誰もが必死に生きていた。

④ 終の棲家

2か月が過ぎた。阿佐ヶ谷の新居が被害もなく、無事、完成した。混乱のさなかの東京にあって、奇跡的と言っていい。家を建てた大工の棟梁は、浅草の自宅を丸焼けにされていた。工事現場に仮小屋を建て、家族とともに寝起きして仕事を急いでくれた。

新居が出来上がった日、腕一本生一本の棟梁が、晴れ晴れとした顔で言った。

「小松先生には強運の星がある。人徳の賜物でござんしょう。震災にも負けなかった家だ。大事に住んでやってくださいまし」

耕輔と広子は、精いっぱい祝儀をはずんで、棟梁に頭を下げた。家は夫婦の終の棲家となった。

⑤ 「帝都復興の歌」

音楽家に出来る復興の手助けは、音楽でしかない。音楽家には音楽家の分があり、道があるのだ。耕輔は復興応援歌の創作を思い立つ。何度も演奏旅行を共にした作詞家の小林愛雄に、話を持ちかけた。

「君は東京の生まれだろう。東京市民を鼓舞する詞を書いてくれ。僕が心を込めて曲を付けるから」

江戸っ子の小林に否やのあろうはずはない。

「いま書かずして何のための作詞家だ。ぜひ、やらせてくれ。一世一代の詞を書くよ」

被災した人々への思いやりと励ましが、言葉を紡ぎ出し、メロディを創り出す。こうして「帝都復興の歌」が発表された。



「帝都復興の歌」の楽譜表紙

「♪陽は照る瑠璃の空の下 悪魔の群れは跡もなし 若き光のさすところ 大地も人もよみがへる♪」



大正期の蓄音機（北海道博物館）

「♪今新しき土の上 ころを堅く結びつつ 若き生命の輝きに 真理を目指し進みゆく♪」

2人の思いが市民の心に届いた。東京から全国各地へ広がり、愛唱された。

帝都の復興は音楽の復興でもある。楽壇も徐々に生氣を取り戻す。翌1924年（大正13）2月には、総合音楽雑誌「音楽新潮」が発刊。耕輔は毎号、筆を執って音楽界の進むべき道を指し示した。

時には逆風も。大震災の復興で予算に窮した政府は、新たな税源を探す。標的となったひとつが蓄音機だった。ぜいたく品とみなして高額課税に打って出ようとした。

音楽界にしてみれば、とんでもない暴挙である。即座に耕輔

は反対運動に立ち上がって、舌鋒鋭く課税の非を鳴らした。

「蓄音機は音楽の教育と普及の最も重要、かつ便利な手段だ。健全娯楽の見地からも大事な必需品。政府当局は何に血迷ったのか！」

かいあって蓄音機課税は沙汰やみに。ところが3年後に岡山県が地方税として創設、県内の音楽愛好家を苦しめた。

⑥ 「光の会」

震災後の暗い世相の中であって、愉快的思い出も。酒にまつわるエピソードをひとつ。

震災から1年余り過ぎた11月15日、神田の料亭で「光の会」と称する会が、ささやかに持たれた。いわば、楽壇の禿げ頭コンクールである。酒を酌み交わし、その酒で朱に染まった頭の光り具合を競う。

1位はともに「音楽新報」で健筆をふるい、耕輔を学習院に呼んでくれた山田源一郎。2位は「ニコピン先生」こと、童謡詩人の葛原しげる。3位にわれらが小松耕輔が入った。

盃に差しつ、差されつ。和気あいあいの談笑が弾ける。

「若い人たちと飲む酒が一番うまい」と、山田が何度も「乾杯」を繰り返す。葛原は作詞した「夕日」の歌詞をもじって、「へぎんぎんぎらぎら頭が赤い」とまぜっ返す。耕輔は小唄の「二上がり新内」をひと節。「へ一度は氣休め 二度は嘘 三度のよもやに引かされて」と、小粋にうなって座を盛り上げた。

それから2年半後、山田源一郎は胃がんでこの世を去る。享年57歳。早過ぎる死だ。創設した学校の前途が、よほど気がかりだったのだろう。息を引き取る間際、「日本音楽学校万歳」と叫んだ。

後日の学校追悼会で、小松耕輔作曲、小林愛雄作詞の「追悼の歌」が合唱された。小林もまた、「音楽新報」の同志であり、一緒にオペラ「羽衣」を作った仲間であった。

山田源一郎は23年の長きにわたって耕輔の師であり、兄であり、友であった。心にぽっかり、穴が開き、「呆然自失するばかりであった」（わが思い出の楽壇）。悲しみを置き去りにして、盟友が旅立った。

耕輔は年齢を重ねるほどに、友を愛し、酒を愛した。楽壇や文壇の有志が集う「十日会」や「野牛会（のモーかい）」。真ん中には常に彼がいて、「楽壇三大酒豪」の異名を頂戴した。浅酌低唱を旨として、マナーも座持ちもいいから、どこからでも、誰からでもお座敷が掛かる。幅広い交流人脈は、豊富な読書量と並んで、その後も見識と教養の枯れることなき水源となった。

⑦ 著作権の闘い

話を本筋に戻す。いささか固くなる。

欧米遊学から帰った耕輔は、著作権侵害の実態に驚く。無断出版、無断転載、無断録音、無断公演。音楽界を取り巻いて、ありとあらゆる無法が横行していた。

「これを許しては、音楽家と音楽界に未来はない」

著作権の確立と擁護の必要性を痛感した耕輔は、1925年（大正14）11月、「作曲者組合」を設立する。メンバーは東京音楽学校の後輩・中山晋平^(※)や弁護士を含む9人だ。

耕輔は行きつけの小料理屋で中山に説いた。耕輔40歳、晋平38歳。

「作曲という労働に対する正当な報酬と権利を得るためには、作曲家自らが立ち上がらなければならない。欧米のように、自分の権利は自分で主張し、自分の領域は自分で開拓していくのだ」

中山晋平は当時、小学校の教員で糊口をしのぎながら作曲活動が続けていた。苦労人には耕輔の言葉が、すっと胸に落ちた。

「僕も食べて行くだけでやっとなです。次の世代のためにも頑張らしましょう」

3年後の1928年（昭和3）12月には仲間が23人に増え、「日本作曲家協会」と改称した。理事長に小松耕輔。少し遅れて、著作権法の起草者で法学博士の水野鍊太郎を会長に迎える。



中山晋平

※ 中山晋平（1887～1952）童謡、流行歌の作曲家。長野県出身。小学校で代用教員を務め、東京音楽学校ピアノ科へ。「シャボン玉」「てるてる坊主」「船頭小唄」「ゴンドラの唄」「東京音頭」など、多くの作品が歌い継がれている。

⑧ 日本放送協会

次に闘う相手が日本放送協会であった。現在のNHKである。相手にとって不足はない。「日本作曲家協会」の看板を背負って、堂々の論陣を張り、駆け引きなしで筋を通した。

当時の日本放送協会は、作者や作詞者の名前を明らかにしないまま、童謡や合唱曲を放送し、報酬も極めて安かった。

「現在の著作権の使用料は余りにも安過ぎる。音楽文化発展と音楽家育成のためにも、社会の先頭に立って範を示してほしい」

対する日本放送協会は頑なだった。

「限られた予算の中では、現行料金が精一杯」

国策で出来て10年ほどの放送協会は、お役所体質のにおいがふんぷんと。権力をかさに着るあまり、耕輔を甘く見過ぎた。

日本放送協会の頑なな態度に見切りをつけた耕輔は1933年（昭和8）6月、「著作権使用料が解決しない限り、会員の楽曲は放送させない」と宣言して席を蹴った。放送協会幹部の顔がさっと青ざめたのを、耕輔は見逃さなかった。こうなれば我慢比べ。気骨稜稜の反骨精神は、音楽学校時代からの筋金入りだ。

日本放送協会の我慢はひと月が限界だった。ラジオドラマ作家の長田幹彦^(※1)が仲介に入って7月、譲歩に転じた。

著作権使用料は大幅に増額され、時間ごとに設定された。演奏時間5分以内4円、10分以内8円、20分以内16円、20分以上32円。作曲家や作詞家たちには干天の慈雨。音楽活動の経済的基盤がようやく固まった。作曲家協会は3年後、日比谷公会堂で「作曲祭」と銘打った音楽会を開催。これを日本放送協会が全国中継した。双方の手打ち式であった。

日本作曲家協会が、社団法人・大日本音楽著作権協会へと発展を遂げるのは、1939年（昭

和14) 11月。今日の「日本音楽著作権協会」(JASRAC)の前身である。耕輔と一緒に汗をかいた中山晋平は、1944年に理事長、48年に会長へ就任した。

ちなみに、音楽界での著作権法違反判決の第1号は1934年(昭和9)4月。古賀政男^(※2)の名曲「酒は涙か溜息か」が、改ざんされてレコード化され、偽作者に罰金刑が言い渡された。

※1 長田幹彦(1887~1964) 小説家、作詞家。草創期の日本放送協会でラジオドラマの脚本を手がける。早稲田の学生時代、北海道の炭鉱や鉄道工事現場、旅芸人一座を渡り歩いた放浪経験で知られる。

※2 古賀政男(1904~78) 昭和を代表する作曲家。ギタリスト、マンドリン奏者。「古賀メロディー」で親しまれた。「影を慕いて」「東京ラプソディ」「湯の町エレジー」など。亡くなった10日後に、史上2人目の「国民栄誉賞」。

⑨ コンクールと国民音楽協会

前にも触れたが、小松耕輔が欧米から持ち帰った手土産に「コンクール」がある。もともとは「競争」を意味するフランス語だ。欧米では各種音楽コンクールが盛んで、これをつぶさに見た耕輔が日本で定着させた。

耕輔は社会への音楽の普及を目指して1927年(昭和2)、「国民音楽協会」を設立、その理事長に就任する。フランスの「国民音楽協会」と同じ名前にしたのは、創設者サン＝サーンスへの尊敬と思慕の念があったからだ。旗揚げ公演としてこの年の11月、1回目の「合唱競演大音楽祭」を開く。



耕輔の尽力で定着したNHK合唱コンクール。1980年8月兵庫県予選(明石市民会館)

「コンクール」と銘打ちたかった耕輔だが、準備会で異論が出た。「音楽会は体育競技ではない。勝負を争うというのはけしからん」と言うのである。

楽壇も人間の社会だ。縦軸に妬みがあり、横軸にそねみがある。当時は「コンクリート」と誤記した新聞もあったくらいだから、異論が出るのもやむを得まい。耕輔はあえて反論しなかった。機が熟すのを待ったのである。

フランス語の小じゃれた語感もあったのだろう。「コンクール」という名称が定着するまでに、さほどの時間はかからなかった。耕輔が最も力を注いだのが合唱コンクールだ。理由を当時の雑誌「音楽世界」で簡潔に述べている。

「合唱は社会民衆、つまり一般の人たちと最も関係の深い音楽だ。音楽で最も普及しやすいのは声楽。声さえ出ればいい。器楽のように、複雑で高価な楽器は必要ない」

いささかあけすけな物言いだが、分かりやすい。耕輔は生涯、空論癖は持たず、実証的な態度を崩さなかった。

⑩ 富士山の裾野

耕輔が晩年、取材に答えた録音テープが残っている。学校音楽と社会音楽の双方の大切さを説いて、概略、次のように話している。

「音楽を普及させるには、国民全体が実際に音楽に接し、音楽を感じ、音楽を好きになってもらわないといけない。学校教育だけでは限界がある」

「富士山の頂が高く、美しいのは、日本一長いすそ野があるからだ。一般の人たちが合唱を和し、演奏を聴き、自分でも楽器を弾いて、社会音楽のすそ野を作る。それがあってこそ、プロの作曲家や演奏家は富士山の頂上で頑張ることが出来る」

国民音楽協会には理事長・小松耕輔の下に、弟の平五郎^(※2)と清^(※3)が理事に名を連ねた。同じく弟でバイオリニストの三樹三^(※1)は耕輔の遊学中に他界している。3人の弟が音楽家の道を志したのは、長兄・耕輔の影響なくしては考えられまい。

東北の小さな山村で生まれた4人の兄弟が、音楽界の富士山を目指した。秋田県人の辛抱強さと向学心があればこそだが、稀有の例としか言いようがない。



左から小松三樹三、平五郎、清の兄弟

国民のための音楽団体を作りたい。作曲家は自分の作品を発表出来る場を、オーケストラは演奏を公開できる場を、一般の人たちは手軽に演奏を聴ける場を」

長兄の音楽哲学がしっかり伝わっている。

末弟の清は、母校の東大でフランス文学の教授を務めながら、ピアニストとして活躍。舞台用の舞踊音楽を創った。ふるさとの東由利を懐かしんだのであろう、「由利泉」のペンネームを記した自筆の譜面が残る。



上野学園大学の「小松文庫」。1300曲の自筆譜や著書、日記などを分類、整理して保管

3人の弟を年齢順に振り返ってみよう。三樹三については、浅草オペラ時代の活躍ぶりを既に触れた。

平五郎は慶応大学に進んで指揮者と作曲家を目指した。1928年（昭和3）2月「国民交響管弦楽団」を創設。設立趣意書がある。

「一部の特殊階級に占有される音楽団体ではなく、われわれ一般

- ※1 小松三樹三（1890～1921）指揮者、バイオリニスト。大正初期の浅草オペラ座で活躍して、大正オペラの振興に尽くす。耕輔の外遊中に死去。妻の澤モリノは浅草オペラで活躍した著名な舞踏家。
- ※2 小松平五郎（1896～1953）指揮者、作曲家。慶応大出身。地元のために「ハタハタ音頭」「由利小唄」「館合小学校校歌」などを作曲。
- ※3 小松清（1899～1975）東京音楽学校でピアノを学んだ後、東京帝大文学部へ。東大、東京芸大、東海大で教授を歴任。フランス文学者と音楽家の双方で貴重な実績を残す。日本作詞会長、ユネスコ国内委員、日本音楽学会理事。

⑪ 軍靴の音

一方で、日本は陰鬱で暗い時代に入りつつあった。巷に軍靴の音が響き渡って、音楽家も戦争への協力を迫られた。耕輔も例外ではあり得ない。国民から募集した軍歌の審査員を務め、愛国心を鼓舞する歌を作曲し、戦地を訪問した。

1940年（昭和15）5月、国民学校教科書編集委員に任命される。後の自伝で戦時体制の学校教育のいびつさを証言する。

「軍部が教科書の編集に口を出し始めた。文部省の中には、始終、軍人が剣をガチャガチャさせて階段を上下しており、督学官室に毎日詰めていた」（わが思い出の楽壇）

学校教育の現場にも軍国主義の影が忍び寄る。軍部と一部の音楽教育者が、「音感教育」を持ち込もうとした。「飛行機や潜水艦の音を聞き分けられるような耳を育てよう」というわけだ。音楽家としても、教育者としても、到底、受け入れられる話ではなかった。

耕輔はクビを覚悟で反論する。

「週に1、2時間、特異な唱法で音感教育をしたところで、そんな耳の育つはずがない」（わが思い出の楽壇）

「それほど必要なら、音楽の時間にこそこそとやらず、国防科でも設けて飛行機の音を聴かせたらどうだ」（同）

1941年（昭和16）12月8日、太平洋戦争開戦。耕輔は学習院の教授から東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の教授へ転じていた。学生と一緒に農作業に汗を流し、軍需工場へ出かける日々が続く。

⑫ 還暦の白内障

B29の空襲が激しさを増した1945年（昭和20）3月。勤労働員の学生を監督する軍需工場で、突然、視界がかすんだ。

「ついにぶり返したか…」

耕輔60歳。そろそろ老いが忍び寄る年齢だ。眼の病とは幼少の頃からのつきあいだ。なだめすかしては折り合いを付けて来た。しかし、今度の症状はかなり深刻だ。失明の恐怖感に襲われて、背中がじっとり汗ばんだ。

「転んでけがでもしたら、周りに迷惑をかける」

妻の広子に相談した。

「あなたはもう十分、勤められました。体の疲れが眼に出たのでしょうか。この際、お休みになったらいかがですか？」

「還暦の節目も過ぎた。仕事を辞める潮時かもしれんな」



東京女高師の教授陣（前列・中央が小松耕輔）と学生たち（中列、後列）

一晩考え、広子の意見も汲んで学校に退職の意向を伝えた。ところが、校長が首を縦に振らない。男手が戦地を取られ、教員が足りなかった事情もあるが、教育者としての耕輔の実績と人望は、余人をもっては代えがたかったのである。

駿河台の井上眼科病院を受診した。時の流れは速い。診てくれたのは、子供の頃に世話になった井上達哉医師の孫だった。

「眼球の水晶体が濁ってますね。白内障の症状も深刻です」
3か月の加療を命じられた。

学校に診断書を提出して、3か月欠勤の許可をもらう。

「眼が不自由では、空襲から逃げるのも難しい。この際、家族みんなで^{とうまい}玉米へ帰ろうか？」
幸い、玉米村には古い家が残っている。

「こちらに帰って静養してはどうか？」。

小松家当主の小松栄男から届いた手紙も、背中を押してくれた。かつての父平蔵と同様、栄男は玉米村の村長を務めていた。夫婦は疎開を決断する。

⑬ 玉米村へ疎開

出発は4月30日。朝が早いため、前の日は上野駅で一夜を明かした。同行したのは妻広子、3女久子、弟平五郎の3人。母トミは9年前、75歳で亡くなっていた。駅は疎開する人たちでいっぱい。東の空が白み始めた午前5時10分、乗客をぎゅうぎゅう詰めにして列車が出発した。福島駅で奥羽線に乗り換え、秋田県に入って横手駅へ。

ホームで懐かしい顔が待っていた。小松栄男の姉の富貴である。「よくもご無事で」と駆け寄り、広子の荷物を持った。その夜は駅前の旅館で1泊した。

この日、ドイツではヒトラーが自殺した。イタリアではその2日前、ムッソリーニが銃殺されている。東京は連日連夜の空襲で業火がやまず、沖縄戦の戦況も悪くなるばかり。敗色の暗雲が日本列島を覆い始め、疎開の旅は曇天が続いた。

翌5月1日、^{おうしょうせん}横莊線^(*)に乗り替える。バスとさほど変わらない軽量車体に揺られて午前

10時半、終点の下郷村（現由利本荘市東由利）・老方^{おいかた}駅に到着した。玉米村はここから2キロほど南だ。迎いのリヤカーに荷物を乗せ、田植え前の田んぼ道を歩いて小松栄男宅に着いた。



往時の横荘線（「RM LIBRARY 羽後交通横荘線」より）

30歳になったばかりの青年村長・栄男が、日焼けした顔をほころばせて長旅の労をねぎらった。

「ご苦労さんでした。ここは耕輔さんの生家だ。何の遠慮もいらない。亡くなった平蔵さんの代わりに、精いっぱい、面倒を見させていただきます」

若い当主の気遣いがうれしかった。

※ 横荘線 現在の横手市と由利本荘市を結ぶ全長 68.6 キロの路線として、大正期に計画され、1930年（昭和5）横手・老方間 38.2 キロが開通。水害を経て 1953年（昭和28）老方・二井山間が廃線、1971年（昭和46）全線廃止。

⑭ 東の間の平穏

ふるさとは駑蕩とした時が流れていた。日記につづる。

「農村の朝は静寂そのもの。警報もなし、敵機も見えず。きょうは近所の山に出掛けてカタクリを採った」（わが思い出の楽壇）

耕輔は眼の病も忘れて、心のひだに積もった綿埃を払い落とした。旧友を訪ねては昔話に花を咲かせる。歓迎会もはっきりなし。したたかに酔いつぶれ、村の若者に担がれて帰った夜も。

弟の平五郎は、請われて村の助役に。ここも大勢の職員が戦地に駆り出されていた。村役場のピアノで「玉米小唄」や「玉米音頭」を作曲。踊りの振り付けと合わせて発表し、村人を喜ばせた。



93年に始まった小松耕輔音楽兄弟顕彰・ひがしゆり音楽祭（2016・10・8）

後日談がある。

疎開中の耕輔と語らった級友に、下郷村・老方小学校の校長がいた。彼も音楽の教師だったから、新しい時代の音楽教育の在り方などで話が弾んだ。戦争も終わって翌年の夏休み、秋田県内の音楽教師を下郷村に集め、新しい音楽教育を研究し合う3日間の研修会を開いた。最終日は「世界音

楽の夕べ」を企画した。教師全員が出演する急ごしらえの舞台に、客席も一体となって盛り上がる。教師たちは音楽を普及させる大切さを使命感として胸に刻んだ。

時代が下って、旧東由利町（現由利本荘市）では1993年、「小松耕輔音楽兄弟顕彰・第1回ひがしゆり音楽祭」と銘打った町民音楽祭をスタート。その後は会場を由利本荘市中心部の文化交流館「カダーレ」に移し、市民音楽祭として今日に引き継がれている。



会場を市中心部「カダーレ」に移して続く市民音楽祭（2019・11・9）

⑮ 山桜の花言葉

晴れた日の午後、耕輔は山ひとつ越して東由利の袖山地区を目指した。篤農家・畠山三郎翁（※）の墓に詣でるためだ。学生時代、学費を援助されて卒業出来たことは前に述べた。本人は1933年（昭和8）に亡くなり、田畑と屋敷は遺族が守っていた。

「こうして音楽教師になれたのも先代のおかげ。私の大恩人です。本当にありがとうございました」

霊前に花を手向けて焼香し、遺族と連れ立って墓参りへ。八塩山と鳥海山が並んで見え、畠山翁の粋な計らいか、虹がかかっていた。思い出話が尽きずに2泊した。

3日目に畠山家を辞した。雨上がりの山道をぶらぶら家路に就くと、遅咲きの山桜があちこちに。薄紅色の花びらが、雨の水滴をはじいて七色の光が乱舞する。山桜の花言葉は「あなたにほほ笑む」。耕輔の心に七色の虹がかかった。

ここでも後日談がある。

小松耕輔は晩年、大学教員の退官を記念して、遺族に感謝の品を贈った。藤の花をあしらった蒔絵の文箱である。平成に入って、遺族が由利本荘市教育委員会に寄贈を申し出た。「小松先生の偉業を後世に伝えてほしい」。文箱は地元の東由利総合支所で大切に保管されている。



畠山三郎翁と文箱

※ 畠山三郎翁（1859～1933）私財を投げ打って、地元・袖山地区への分校開校に協力。学校建設費の一部や教材、用具などの資金を提供した。玉米村長、郡会議員、県会議員を歴任。

⑩ 8月15日

運命の日は唐突にやって来た。8月15日は朝から雨だった。出羽山地に囲まれた盆地の山里に、糸のように細い雨が音もなく降り続けている。せみの声も聞こえず、静寂があたりを包む。

季節が家の中に入り込んで、畳の部屋が異様に蒸し暑い。正座している耕輔一家に、茶箆の上のラジオが正午の時報を告げる。続いて、いささか甲高い声流れた。戦争の終結を告げる玉音放送である。

「堪へ難キヲ堪へ、忍ビ難キヲ忍ビ、以ッテ万世ノ為ニ、太平ヲ開カムト欲ス」

時折、雑音が入るものの、耕輔には聞き覚えのある声だった。学習院時代に6年間教えた昭和天皇のお声である。懐かしさがこみ上げ、やがて悲しみに変わって、涙がほおを伝わった。

日記には1行だけ。

「ただ感慨無量、御胸中を拝察するだに懼れ多し」
(わが思い出の楽壇)

長い戦争が終わった。



円熟期の小松耕輔

⑪ 日だまりの夫婦

「できるならば林間に掘っ立て小屋でも建てて、老後に隠棲したい」(わが思い出の楽壇)

そうつぶつた耕輔だが、音楽界を取り巻く状況がそれを許さなかった。後ろ髪を引かれる思いで東京へ。日本人の心は今、新しい時代の音楽を求めている。戦後の日本の社会と人々を、音楽家はいかに支え、どう手助け出来るのか？ 今こそ前を向いて歩く時、いや走る時だ。これもまた天命。耕輔は走りながら考え、考えながら走った

耕輔の戦後を年表風にたどってみよう。

- 1946年（昭和21） 明仁皇太子（現上皇さま）に音楽の講話。「西洋音楽史」出版
- 1948年（昭和23） 教育音楽協会会長。全日本合唱連盟を結成して理事長。第1回全日本合唱コンクール
- 1949年（昭和24） 文部省の著作権審議会専門委員
- 1950年（昭和25） 「現代フランス音楽」出版（1927年出版「現代仏蘭西音楽」の文庫化）
- 1952年（昭和27） お茶の水女子大を定年退官。明仁皇太子（現上皇さま）立太子の礼のお祝いで皇居参内
- 1958年（昭和33） 紫綬褒章

耕輔は帰国直後から音楽家の伝記12巻の「楽聖伝記叢書」を著すなど、精力的に執筆活動



小松耕輔編著・昭和28年度用の中学校音楽教科書

それでも、笑みは絶やさず、口ぶりはどこか楽しそう。音楽家の夫婦は、人生の円熟期にあった。平穏という名の日だまりが2人を包む。

頼まれて校歌を作曲し始めるのもこの頃だ。ざっと160校。秋田県内では由利、矢島、角館、横手、横手城南、雄物川の各高校の校歌を作った。

⑱ 音楽教科書

新しい音楽教科書の執筆、編集にも心血を注いだ。

そばで代書する妻に夫が言う。

「子供たちの心を豊かに育むには、楽しさをいかにして教えるかだ。最も教育的で、しかも芸術的な曲を教科書に載せねばならない」

妻が苦笑交じりにたしなめる。

「耳にたこが出来ましたよ、あなた」

聞こえないふりをして、夫がコホンと咳をした。



小松音楽兄弟顕彰室を見学する児童ら

1953年（昭和28）版の文部省検定済教科書「中学の音楽」は、小松耕輔の「編著」。つまり責任編集である。「中学生のみなさんへ」と題した序文に、耕輔の音楽教育論が分かりやすく述べられている。少々長いが、引用する。

<音楽を楽しみましょう> よい音楽は心や生活を豊かにして、人格を向上させ、社会を健全にします。音楽を楽しむことは、ひとりひとりの幸福になるばかりでなく、その幸福が社会の健全な発展につながっているのです。

<音楽の理解を深めましょう> 音楽の楽しみは、わたくしたちが音楽を理解する程度に応じて違います。音楽をよく理解している人は、理解の浅い人よりも、価値の高い楽しみを得られるのです。

<音楽の教養を身につけましょう> 音楽の理解を深めるためには、歌ったりひいたりす

る実技の練習はもちろんのこと、そのほかにもいろいろなことを学んで、教養を身につけねばなりません。わたくしたちは、こうして身に着けた教養と、人生においての様々な体験を心の背景に持って、音楽を感じ取っているのです。

⑱ 土間のピアノ

1台のピアノが人の人生を変えることもある。

兵庫県丹波篠山市。中国山地の東端に位置する城下町だ。400年前の石垣を今にとどめる篠山城址の近くに、古民家風の観光喫茶店「みくまり」がある。店の奥に、1台のピアノが座る。

黒光りするつやが少々、くすんでいるが、どっしりとして威厳のあるピアノだ。寄贈したのは元高校教諭の内山茂子さん（99）。娘のように思っている「みくまり」の原未夏さんに、思い出のピアノを託したのである。

90余年前の記憶と感動は今も鮮やかだ。1929年（昭和4）の春。「モコちゃん」の愛称で呼ばれていた少女が、幼稚園から家に帰ると、土間に立派なピアノ。ふたを開けて鍵盤を叩いてみた。ポン、ポン、ポロロン。初めて聞くピアノの音色が、天使のささやきに聞こえた。



小松耕輔から贈られたピアノ

⑳ 人生変えた贈り物

ピアノは東京の小松耕輔からの贈り物だった。地元で医院を開業する父親は若い頃、東京で勤務。ある日、同郷の知人が訪ねて来た。

「親しい友人が病気で寝込んでいる。貧乏で医者にも診てもらってない。助けてやってくれないか」

後日、やって来た「友人」が耕輔だった。ひと目で重症患者だと分かった。

胸膜炎である。当時は死にもつながる病とされた。苦学しているらしく、体は異様にやせ細り、夜具もみすぼらしい。同じく地方出身者として苦労した父親は、自らの来し方を重ねて治療に当たった。ようやく一命をとりとめた。父親は治療費を受け取らなかった。

父親は文学青年だった。耕輔とは波長が合ったらしい。2人の交流が始まる。後に父親は篠山に帰って開業した。末っ子のモコちゃんも、2歳上の姉「デコ（英子）ちゃん」も歌が好きだった。「そうだ、娘たちにオルガンを」と思い立ち、東京の耕輔に相談の手紙を書いた。

耕輔がぽんと膝を打つ。「うちに手ごろなピアノがある」。パリ時代に求めたドイツ・オート社製の1台だ。「世話になった恩返しに」と送ってくれた。モコちゃんの人生が変わる。

父親は娘たちを医者にして跡取りにと考えていた。姉は女医の道を歩いたが、妹はピアノの音色に魅かれるまま、音楽の道に。耕輔に勧められるまま、1939年（昭和14）4月、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大）を受験して、狭き門に合格。主任教授だった耕輔に師事

する。

一度だけ叱られた記憶がある。

「私は和声学が不得手で、試験が終わって小松先生から『どうしたんだ』とにらまれました」

しかし、耕輔先生の眼鏡の奥の目は笑っていた。耕輔には、この教え子より4つ年上の娘がいたが、名前が同じ「茂子」。ここでも不思議な縁を感じたらしい。



ピアノを弾く高校教師時代の内山茂子さん

卒業後は地元の高校で教鞭を取る傍ら、地域で合唱活動を指導。メゾソプラノ歌手として関西のオペラ界で活躍した。

内山さんが感慨深げに振り返る。

「あのピアノがなかったら、私は女医になっていた。音楽という素晴らしい世界にいざなってもらった。天国の父も許してくれているでしょう」

1台のピアノが少女の人生を変えた。

② 上々吉

閑話休題。

妻の広子は1958年（昭和33）9月、71歳で生涯を閉じる。

妻の日記と短歌を、夫は「広子日記」として本に残す。序文に妻への感謝の思いをつづった。

「妻と二人で一生懸命、音楽教育のために働いた」

「平凡な女ではあったが、家庭の主婦として、また私にとって、かけがえのない宝であった」

武骨な明治の男としては、最大級の賛辞であろう。季節が変われば、咲く花も変わる。季節が変わっても、変わらない花を夫婦は育てた。思いやりといたわりの花を。広子が遺した歌に、耕輔を詠んだ一首がある。

『ふるさとの香をなつかしみ我が夫の^{つま} 植えし山百合ぬれて色よき』

「広子日記」の奥付に「昭和三十八年九月十日発行 著者小松広子 発行者小松耕輔」とある。上梓から間もない1966年（昭和41）2月3日、耕輔は81歳で鬼籍に入る。その年の元旦の日記にこうある。

「初春や まず思うこと 親の恩 今年82歳 両親より長命である。健康である。眼、耳、とにかく用を弁ず。手足不自由なし。他人にうらまれることなし うらむことなし 上々吉」

遥^{はる}けくも来^きつるものかな。ひとつ事を成し遂げ、枯淡の境に達した人の文章は、簡にして

明。ただ美しい。

⑫ 魂魄ふるさとに

小松耕輔音楽兄弟の顕彰碑が、東由利中学校の前庭に立つ。

耕輔の言葉が刻まれている。

「日本語は歌いやすく美しいことばである」

音楽に生き、音楽に恋し、音楽に殉じた。だから、耕輔の曲には、ぬくもりがある。思いやりがある。懐かしさがある。

著書の文章がまた味わい深い。五線紙に躍動する音符のように、達意の筆運びで音楽を語り、文化を論じ、日本の国と人々の行く末を案じた。

音楽が服を着てひょうひょうと歩いて来たような耕輔の人生。80有余年の来し方は、作品の曲調にも似て、まっすぐで、清潔感があって、伸びやかだ。秋田が生んだ音楽家・小松耕輔は、魂魄なおふるさとにとどまって、「母」を歌い、「泊り舟」を歌い、「砂丘の上」を歌って、あなた方を見守っている。



小松音楽兄弟の顕彰碑

完

母

竹久夢二 作詩

小松耕輔 作曲

やわらかに、かなしく [♩=116]

p

ふ る さ と の や ま の あ け く

やわらかに、かなしく [♩=116]

p sempre dolce

4 *mf*

れ み ど り の か ど に た ち ぬ れ

mf

8 *f* *p*

て い つ ま で も わ れ ま ち た

f *p*

12 *mf* *rit.* *a tempo* *p*

も う は は は かな し も い

mf *rit.* *a tempo* *p*

母

16 *mf*

くさん かとおくさかりぬふ

20 *f*

るさと のみどりのかどにい

24 *p* *mf*

まもな おわれまつらんかは

28 *rit.* *calando* *pp*

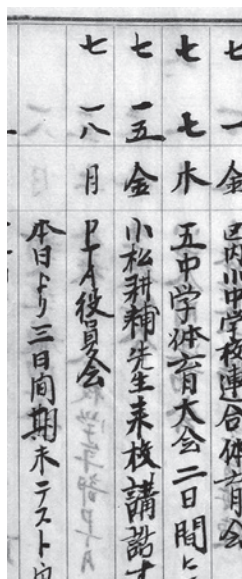
ははとおしも

付記 小松耕輔の音声テープ

晩年の小松耕輔が語った講話やインタビューを録音したテープが、由利本荘市東由利の現小松家当主・小松義典氏宅で見つかった。旧式のオープンリールのテープで、両親が暮らした古い母屋の棚の中に、大事に仕舞われていた。耕輔の肉声を伝える貴重な史料といえ、義典氏が会長を務める小松耕輔音楽兄弟顕彰会は、音声データを耕輔の母校の東京藝術大学・音楽学部大学史史料室へ提供した。



見つかった小松耕輔の音声録音テープ



1960年の旧玉米中学校の学校日誌

由利本荘市東由利中学校に旧玉米中学校時代の学校日誌が残されており、1960年7月15日（金）に「小松耕輔先生来校講話」と記されている。当時の写真も残っていて、1回目と3回目の講話のどちらか一方は、その時の録音とみられる。

録音時間は約2時間。うち、小松耕輔の音声が登場するのは3回で、計70分ほど。1回目は講話で、耕輔75歳の1960年（昭和35）と推定される。広子夫人を亡くした2年後に当たり、録音時間は38分31秒。子供時代の音楽環境や社会音楽振興への取り組みなどを語っている。

2回目はインタビュー形式。芸術における音楽の位置付けや音楽教育の在り方を19分間にわたって答えた。聞き手が秋田方言の男性であることから、由利本荘市内で録音された可能性が高い。3回目は12分。明治時代に流行した^{みんしんがく}明清楽を懐かしそうに振り返っている。

声の張りがあって若々しい。音楽教育の黎明期を、自身の来し方を重ね合わせながら語るなど、実直で飾らない人柄が偲ばれて、興味深い。

由利本荘市東由利中学



昭和35年7月15日
小松耕輔先生講演(最後の故郷訪問)

録音テープ その1

【子供時代の音楽環境】

新楽器が入ってきた。私も盛んに聞いたりしておった。私は純音楽が好きであった。どうしても、これは音楽を研究しなきゃならんという考えを持って、両親の許可を得まして、いよいよ音楽の研究に行くことになった。

ところが、^{とうまい}玉米の学校ですね。尋常小学校でしたからね。(地元には) それしか無かったものですから、矢島の高等小学校へ行った。そこで初めて、本当の音楽教育と言うものを受けたわけです。

矢島の学校には立派なオルガンがありましてね。音楽の時間にはしょっちゅう、そこで勉強できる。今ある専科の先生ではないけれども、非常に音楽に熱心な先生がおりまして、しょっちゅう、オルガンを弾いてくれた。そんな関係で、そこを卒業した。

それから、「これはどうしても東京へ行かんらんし、音楽学校に行くしかほかに方法はない。どうしても官立の音楽学校へ行ってやろう」という考えを持った。

そうして明治34年ですよ。ちょうど2月。当時は^{たてあい}玉米の^{あざ}館合という字。館合から汽車といっても、今の奥羽線はまだない。ほかのバスとか、そういうものも一切、ないんだ。唯一の交通機関というものは^{じんりき}人力ですね、人力。その人力もですね、当時は鉄道は東北本線。それしかない。(東北本線の最寄り駅である岩手県・黒沢尻駅まで人力を走らせる)

月偏に空という字があるでしょう。^{しこうきん}紙腔琴という名前の新楽器があつて、東京の十字屋という楽器店が売り出したんだ。

これはちょっと説明しないと分かん。横が1寸5尺、縦が1尺ほどの箱だ。中を見ると楽譜を書いた木がある。下の方にハンドルがあつて、手で回す機械。右手でハンドルをぐるぐる回すと、ひとりでに下から風が出て来る。

駅にそれ(蒸気機関車)は止まった。同時に大きな声を出して「ワン」。汽笛ですよ、それがね。びっくりして、「汽車というのは大したもんだ」と思って驚いた。(汽笛と紙腔琴の仕組みが似ているという趣旨か?)

汽車に乗って、その晩に上野に着くわけですね。初めて、東京の土を踏んだ。

【東京音楽学校の思い出】

それから早速、音楽学校の入学試験の準備を始めた。当時は神田に予備校みたいなものがある。いろんな学校のね。英語とか漢読、歴史、数学。相当難しい程度の準備をしなければならん。

当時の東京音楽学校は、一番下に「選科」がある。「選択」の「選」。2年くらい、普通やる。その上に「予科」。「予め」という字だね。これが1年。そのほかに、3年の学科「本科」。それで卒業だ。

まずは選科に入って予科の準備を始める。幸いにパスした。

よほど前から目が悪かったものですからね。学校の体格試験の時でも、非常に困る。眼の視力試験というものがある。視力が少し、悪かったもんだから。視力表というのがあるでしょう。あれをみんな覚えたんだ。三角や四角がある。(形の違いを) みんな覚えた。

先生が向こうで「どうだ、これが見えるか？」

「はい、見えます」

「どちらの方を向いているか」と先生が聞くんだ。「一番上の右の方だよ」

「それは見えとります」

「これはどうだ？」と先生が聞く。下の小さいやつ。

「よく見えます」

それで「はいパス」と言うんだ。とうとう、パスしちゃった。

そういうわけでね。大変、辛かったんだ。

【学習院へ】

それから、どんどん勉強やって。明治39年に卒業したんだ。当時は6月が卒業の時期であって、今とちょっと違います。今はたいてい、4月に学期が始まって、3月でおしまい。ところが、当時は6月で学校が済んで、それから長いお休みがあって、9月から始め、卒業は6月。

それをパスして、今度は研究科。これは2年あるんだ。3年やることも出来た。それに入った。

ちょうどその時に、学習院の方から話があって、「先生が要るから来たらどうか？」と。そこで私は先生になることになった。

毎日、学校へ通勤した。その当時の院長が、乃木大将であった。1年たって次の新学期に今の天皇陛下が学習院にご入学になった。私が音楽を担当することになって、ご卒業までお世話出来た。非常に名誉なことでした。

【欧州留学】

そのうち、今度は外国留学ということになって、外国へ行ったんです。大正9年の9月です。

飛行機なんてない時代。船でインド洋から地中海を経てマルセイユへ。ひと月半かかった。今なら飛行機で30時間ほどですか？　パリまで。当時はマルセイユから汽車でパリへ行って、そこでようやく落ち着いた。

幸いに国立の音楽学校で聴講することになった。作曲と作曲理論を勉強した。

合間にイタリーとか、英国、ドイツ、それから方々の国へ行って、見学したり、調査したり。日本から出る時に、いろいろな役目を持たされた。学校で研究、勉強するだけでなく、実際の音楽の社会的状態を調査して来いということ。

学習院から（の依頼）は貴族音楽（の調査）が主でした。内務省からは「社会音楽の研究をやって来い」と。みんな囑託ということで任命された。文部省からは「一般教育音楽の調査、研究を」との依頼を受けた。これも囑託ですね。

だから、学校以外でのいろんな調査が必要になってきた。学校に少しでも休みがあると、それを利用しては方々の国へ行って、その状態を研究してきた。パリの音楽学校において勉強するほかに、社会的ないろんなこと、簡単に言うと、音楽全般のことをね、調査しなきゃならんという状態であった。そうして、（足掛け）4年、調査をして勉強してきた。

【アメリカモデル】

その帰りにアメリカへ行った。滞在は短かったが、大体の都、ニューヨーク、ボストンなどに行って調査した。これがまた、ヨーロッパとは違った、ひとつのやり方をやっておった、米

国はね。

一般の社会音楽ということでは、非常に得るところがあった。一体、アメリカという国はみんな新しい国でしょう。いわば、ヨーロッパの植民地ですから。新しい時代の国だから、みんなヨーロッパのものを吸収してきて、いろいろなものを行ったわけでしょう。そして、本当のアメリカの教育というものを盛んにしたんだ。

それを見ると、音楽だけでも参考になることが多い。日本に持って行くには、社会的音楽の程度では、アメリカのいろんなやり方は必要だと感じたんですね。その点では大変、参考になりました。

私はその前に、「日本の音楽教育というものはみんな、アメリカから来たものなんだ」ということを学んでいた。なぜかという、いわゆるヨーロッパのやり方をまず、アメリカで研究して、いろんなヨーロッパの音楽をアメリカから持って来てやったもんですからね。それがつまり、明治5年の教育改革ということに。音楽の方も研究していかねばならないということになって、日本からアメリカへ行ったのが、伊沢修二という先生。この人が、日本における音楽教育の元祖なんだ。

この人が、アメリカに行って音楽を習い、と同時に、音楽教育というものの研究を行ったわけだ。日本に帰って来て、音楽教育の必要性を当時の人たちに話した。文部省に意見書を出した。「日本でも音楽教育を盛んにやらなければだめだ。日本は非常に遅れている」と、文部省に建白書を出した。

これが通って、音楽取調所^{とりしらべしょ}が文部省の中に出来た。それによって出来たのが、今の東京音楽学校なんです。従って、東京音楽学校というものは一番最初、アメリカの音楽のやり方を伊沢修二先生が持って来てやったものです。

そういう意味で、アメリカ音楽と日本の音楽教育は、非常に密接な関係を持った。そういうことをちゃんと知っておいしかったから、(アメリカでは)よほど、いろんなものを見て来なければと思って帰って来た。



明治期の音楽取調掛 (取調所とも)

【社会音楽の底上げを】

東京に帰っていろんな人に話をし、文部省にも具申した。一番考えたのは、社会音楽をまず盛んにしなければだめだということ。いくら学校教育をやったって知れたものなんだ、人間の数というものは。全部に行き渡るなんてない。学校の教育だけではまだダメだ。まず、社会的音楽を盛んにしなければならん。

国民全体が音楽というものに対する理解を高めることが大事。と同時に、今度は音楽というものを実際に感じる事が出来ること。理屈じゃないんだ、音楽というものは。

まず第一に、音楽そのものを理解すること。それから、音楽を好きになること。「音楽というものはなるほど、いいものだ」ということが分かって来なければ、誰も本当の音楽というものを知ることは出来ない。ヨーロッパ全体、アメリカ全体で社会的音楽が非常に盛んになって

いる。「日本でも」と考えた。

日本の富士山は日本一の名山であり、一番高い山である。だけど、名山というものはどういう位置にあるのか。考えてみるとあの名山を成しているのは、あのすそ野です。非常に広大なすそ野があるでしょう？ それがだんだん、高まって来て、最後に頂点に達するわけです。

ああいう名山が出来るには、非常に長い、広いすそ野が必要だ。音楽で言えば、そのすそ野こそが、一般の社会音楽なんだ。聴衆も必要、教育も必要。すそ野の上に高くなっていくのが、つまりサミットだ。富士の頂上ですね。そこに行って、初めて作曲家も出るし、演奏家も出る。初めて音楽国というものが出来上がる。こう考えたもんだから、社会音楽というものを盛んにやった。

【コンクール】

それには2つの方法がある。海外で見て気が付いた。

ひとつは声楽です。声楽というのは、声の音楽。これを盛んにすることが合唱になる。合唱、コーラスですね。もうひとつは器楽でやる演奏。これが吹奏音楽。ラッパのようなものや太鼓、それから笛。一緒に合奏するのが吹奏楽。この2つが盛んにならないと、音楽の盛んな国にはなり得ない。

文部省にも具申したんですけど、これがなかなか実行できなかった。

これをやるのには方法がある。コンクールだ。今ではみんな知っているが、その当時はコンクールなんて文字は、誰も知らなかった。合唱でも吹奏楽でも、「コンクールの形式でやって行かなければだめだ」ということを言ったんです。盛んに演説したり、文章を書いたり、新聞にも出したり、盛んに言ったんです。しかしながら、肝心の文部省がダメなんだ。孤軍奮闘でしたね。

そのうち、新聞に「コンクリートという会が出来るそうだ」と書いているんだ。コンクールの誤りなんです。みんな知らないんだから。大きな新聞でも「コンクリート」と書いてある。ばかな話だが、そういう時代でしたよ。

一般にも分かって来て、合唱の方は第1回が出来た。ずいぶん長い事かかったが、今のコンクール形式でやった合唱の最初の会だ。昭和2年です。初めて合唱の会が出来た。「コンクール」じゃ、誰も分からないものだから、「競演」という名前にしたんだ。競争の「競」、「演」は演奏の演。これがつまり、西洋の「コンクール」の翻訳なんだ。それを使った。「合唱競演会」という名前を付けた。

第1回の日本におけるコンクール形式の合唱の会。明治神宮の外苑にある日本青年館。あそこでやった。続けて今日まで来ている。今日では幸いにして全国的運動になった。日本合唱連盟というものになった。立派な効果を生んできた。全国的に日本の合唱界をリードしておる。今は非常に進歩してきた。

もうひとつは吹奏楽。これも盛んになって、吹奏楽の連盟が出来ている。堀内敬三君がその方の仕事をやってくれている。これも非常に盛んになったもんだ。朝日新聞が後援になって、全国的に盛んになっている。

こうして、社会音楽というものが、一般の民衆に親しくなった。社会音楽が盛んになれば、

技術、作曲の側も年々、盛んになって来る。作曲も一般の人が出てきておる。演奏会も、管弦楽団が相当の数、出て来た。2、3のものは、ヨーロッパの楽団にも、一流のものとは言えないにしても、肩を並べるまでに成長している。立派な管弦楽団が出来ています。3あるいは4くらいの管弦楽団は、実に立派なものです。合唱の方は、合唱網が出来て、盛んにやっている。

【オペラ運動】

そのほかに私がやってきた仕事では、作曲の方では、オペラの運動ですね。日本人作曲のオペラは、私が一番、古いんでしょう。私が卒業したのが明治39年。その年に「羽衣」というオペラを作曲し、公演して発表した。第2回は明治40年。オペラ「霊鐘」を書いた。

当時はオペラにお金をだしてくれる人がいない。長く続けようと思ったが、出来なかった。しかし、そのあと、山田耕筰君なんかが出て来て、盛んにオペラ運動をやってくれた。今日では立派な作曲家が出て公演している。藤原義江君などが、オペラの研究をやって、だんだん進んで来ている。国立の劇場も出来た。

いま振り返ると、我々が学生の時代と今日では、非常な進歩があります。しかし、何といっても、先進国のヨーロッパやアメリカには追従出来ていませんよ。まだまだです。

教育音楽にしても、非常によく進歩している。我々の学生時代と非常な差があります。

そういう意味で、私は非常な希望を持って今日、毎日、毎日、楽しく暮らすことが出来る。少しでもまだ、音楽に貢献するように、骨を折っております。もう70、今年は6になります(76歳)。幸いにもまだ元気ですから、もう少し、仕事が出来ると思っております。今日はそのくらいで勘弁願います。

(38分31秒)

録音テープ その2

【芸術と音楽】

<小松耕輔> 音楽というものは私、ほかの図画とかと同じもの、という形で見てる。特に、音楽が非常に優れて、絵とかほかの芸術より音楽がなかったら困るなどと、特に音楽を見ているわけではない。つまり、芸術の一部分として、みんな平等に見ているんだね。特に音楽が特別に芸術的というわけではないんだ。

<聞き手> 教育全般の話として音楽教育とは？

<小松耕輔> 全人的教育という意味ではね、戦後の方が非常にバランスが取れている。大事に考えているね。戦前の教育は、国によって違う。ドイツなどは「音楽は人間に必ず要る」という風に尊重しているわけだね。芸術教育の一番の教育と考えている。

芸術の中には、例えば絵もあるし、詩もあるし、いろいろあるが、上位するものは音楽だと考えている。ドイツより音楽を尊重する国はそんなにない。「第一に音楽でなければ」とドイツほどには考えていない。

戦前から戦後を考えると、全人的教育は高まっている。

もともと、日本の学校教育の中には、他のヨーロッパやアメリカのように、音楽を尊重した歴史がない。孔子は学を礼儀として教えたが、音楽を尊ぶなどは教えなかったもの。

【音楽教育はアメリカから】

<聞き手> 唱歌教育がアメリカから来たというのは本当ですか？

<小松耕輔> 初めはアメリカから日本に入った。万事そうで、みんなアメリカを通してだ。当時はアメリカの教育、教科書をそのまま持って来て教えた。英語だけではない。例えば地理にしても、直訳した原書をそのまま学生に教えた。英語は向こうのナショナルリーダーをそのまま教えた。医学でも何でも、そのまま持ち込んで教えた。

<聞き手> 何故、アメリカなんですか？

<小松耕輔> 何故、アメリカの教育を持ち込んだのかは、私にも分からないところがある。ただ、こういうことは言える

アメリカは元々、ヨーロッパの植民地でしょう？ だから、国が盛んになって教育に力をいれなきゃならんと考えた時の手本は、みんなヨーロッパだった。ヨーロッパから持ち込んだ。

その状態が当時の日本なんだ。(事情が似ていたから) ヨーロッパよりアメリカの方がよく分かる。その型をそのまま(踏襲して)日本に持ち込んで教えた。アメリカなるものが一番、手本になった。

しかし、第2の段階では、アメリカをよして、ドイツを土台にしてヨーロッパを(取り入れた)。最初はアメリカが手っ取り早かったんだが、10年たち、20年たつと、どうもアメリカだけじゃいかん。アメリカが手本にしたヨーロッパに学ぶべきとなった。

ヨーロッパ的教育となれば、当時、一番の勢力だったのがドイツ。かくしてアメリカ文化は光沢を失った。アメリカ式の教育が光を失って、アメリカは単にドルの国になった。教育の手本はヨーロッパ。軍隊なら陸軍はフランス。

とはいえ、教育だけ考えたら、アメリカを持って来るのがいい。事実、当時の留学生はみんなアメリカに行ったものだ。教育的仕事はアメリカに行って、アメリカの師範学校や何々大学とかへ行った。当時の学生や教育家はみんなそうだった。

【^{ヨナ}四七抜き音階】

<聞き手> 音楽教育で言うと、半音が日本人にはまずかった？

<小松耕輔> 日本の音階は「五声音階」。五つしかなかった。

当時は「ドレミ」でなかった。「ヒフミヨイムナ」と教えたものだ。♪ヒフミヨイムナヒ、ヒナムイヨミフヒ(ドレミファの節を付けて口ずさむ)。数字だね。「君が代」だと、「♪フヒフミイミフ ミイムイ」となる。

当初の「^{ヨナ}四七抜き音階」(主音のドから4つ目のファと7つ目のシがない)は、元はと言えば雅楽から来た。「^{りよせんぼう}呂旋法」と言う。「四七抜き」だが、初めから日本にあったものではない。シナの雅楽から日本に入って来て五音階になった。つまり、「四七抜き」だ。当時はみんな、半音がない。

<聞き手> ^{ばんがく} 番楽とはどういうものですか？

<小松耕輔> ほかはどうか知りませんが、ここの番楽は非常に面白い。雅楽がなまってきて、だんだん民間に伝わった。そして、神社に奉納する音楽になった。お祭りに出した。シナから来た雅楽がなまって番楽になった。

雅楽から民謡か何かとして入って来たのが「黒田節」。あれは雅楽だね。「♪さあけは～」となって来た。元々は雅楽。

一方、舞い、舞楽の方はなまって形が崩れてしまった。番楽がそうだ。

「番楽」という文字は、どういう意味か私は分からないのだが、あの当時ね、日本の一般の民謡にも、ああいうものがたくさん、入って来て。シナとか、朝鮮とかから入って来たという意味で、「蛮(?)楽」と言ったのではないか? 「蛮人の音楽」という意味でね。

(19分14秒)

録音テープ その3

【明清楽の思い出】

それでは今日はいろいろ、音楽のことについてお話をしましょう。

私の生まれたのは明治17年12月14日であります。生まれた日は義士の討ち入りの日に当たるわけであります。

玉米の小学校に入った。その学校は3階建ての小学校で、当時としては珍しかった。小学校で3階なんてなかったから。

そこで教育を受けた。しかし、音楽の教育は、あの当時はどこでもそうだが、非常に簡単なものであった。学校の中にはオルガンもなかった時代なんですね。今日の音楽教育という点から見ると、非常に進歩していなかった。

当時、学校以外の音楽はどうであったかという、家庭においては^{みんしんがく}明清楽が非常に流行した。シナの音楽ですね。^{みん しん}明と清。日本中に盛んに流行した。

楽器は^{げっしん}月琴。今は知る人もいないでしょう。それと^{みんてき}明笛。普通の笛だが、上のところに穴がもうひとつ。その上に^{ちくし}竹紙、竹の中にある薄い紙ですね。それを穴に貼って吹くんです。そういう楽器だった。非常に面白い音を出すんです。

月琴は丸い木製の胴が付いていて、4本の弦が張ってある。柱^じがあって、「柱」という字ですね。音階を出すための^じ柱があって、横に付けてあって、そこを押すと音が出る。三味線はすぐに柱でしょう、つまり^{さお}棹^{さお}があってすぐに音が出る。

月琴は横にコマが出来て、それで演奏する。シナの音楽の譜を使った。「ザン、ツエイ、コン」などと、シナの文字を使った。当時の明楽の譜です。これが家庭に流行した。

私の母はあれが好きで、月琴をよくやっていましたよ。それを私は聞いていたもんだから、明笛を盛んにやった。家庭はそんな具合だった。

【紙腔琴と汽笛】

それからもうひとつ、学校音楽のほかに「紙腔琴^{しこうきん}」というものがあつた。

(注・話が飛ぶ)

私の部落から行くには、横手を通つて、そこからずーっと長い事、車で、人力で黒沢尻駅に行つたんです。

朝早く(家を)出ると、夕方、黒沢尻に着くんですね。そうしてひと晩泊まって、それから汽車に乗る。あくる日朝早くです。汽車つてもものを見たことはない。しばらく待っていると、遠くの方から雪の中を、2月でしたからね、雪の中を、線路の向こうから、真っ黒いものが走つて来るんだ。それがつまり、蒸気機関車。機関車に引っ張られて列車が来るわけですね。



紙腔琴 (二子千草氏の論文から)

(汽笛は)風琴の仕掛けですよ。つまりオルガンだ。オルガンの仕掛けを手でぐるぐる回すと、下から風が出て来る。箱から風が出て来ます。弁が仕掛けてある。リードです。リードオルガンの仕掛けになる。リードに風が当たつて音が出る。オルガンの仕掛けを手で回して風を送つて、弁、つまりリードによつて音が出る。こういう仕掛けなんです。

丸いというか、長いというか、相当に硬い紙がありましてね。譜の穴が付いている。くるくる回すうちに、長い紙もくるくる回る。同時に下から風が入つて来る。リードに風が当たつて紙の穴から音が出る。これがつまり、紙腔琴^{しこうきん}。民間で流行した。今ではありませんが、そういう楽器だつたんだ。

それには唱歌とか、いろんな俗楽ですね、みんな入っている。これが大変、面白かつたんだ。

当時、その楽器を持っているのは老方の小松亮太郎。県会議員の人で、文化人でもあつた。その子供にもり太郎さんという人がいた。(この地方で)紙腔琴を初めて持っていた。うらやましくて、しょっちゅう、弾かせてもらつていた。

(12分)

第2部

モコちゃんのピアノ

～師小松耕輔の思い出～

内山 茂子

- I 声楽家の夢育む
- II 東京女高師に学ぶ
- III 小松先生の思い出
- IV ふるさと丹波篠山
- V 時を越えて

付記 ピアノが紡ぐ不思議な縁
教え子と当主の対談



I 声楽家の夢育む

【先生からの贈り物】

モコちゃん^(※)が幼稚園から帰ると、玄関の土間にピアノが置いてありました。



90余年前に届いたピアノには風格と威厳が…

モコちゃんはふたを開けて、そーっとピアノを弾きました。ポーン、ポーンと、ピアノは良い音で響きました。あの時の感動を99歳になった今も、モコちゃんはしっかりと覚えています。

モコちゃんのお父さんは、デコ（英子）ちゃんとモコ（茂子）ちゃんのために、オルガンを買ってあげようと思いました。小松耕輔先生にお世話をお願いしたら、オルガンではなくて、立派なドイツ製のピアノが送られて来ました。

「今、ちょうど手頃なのが家にありましたので、どうぞ使って下さい」とのことでした。

私の運命を変えることになったピアノです。

昭和4年（1929）のことです。この頃、ピアノを持っている家は少なく、珍しかったのです。

デコちゃんがピアノのレッスンを受けることになりました。月謝の500円が高いので、「モコちゃんはまだ少し、大きくなってから」ということで、デコちゃんに教えてもらってバイエルの8番までは進みましたが、その後はどうしても進みませんでした。

モコちゃんのピアノは、いつまでたってもバイエルの8番でした。



モコちゃん(左)とデコちゃん

※ モコちゃん 著者・内山茂子（うちやま・しげこ 1922年生まれ）の幼少時からのニックネーム。実家は兵庫県多紀郡篠山町（現丹波篠山市）の医院で、5人姉妹の末っ子として育つ。ピアノが送られてきた当時は6歳。デコちゃんは2歳上の姉で、後に女医になる。

【チンチン電車さん】

小松先生から「キンダーブック」という立派な絵本が送られて来ました。母が買ってくれる羽仁もと子さんの「子供之友」と「キンダーブック」は、モコちゃんのお宝でした。たのしい夢をいっぱい咲かせてくれました。

小松先生が、篠山の我が家に来られました。モコちゃんは小学校の3年生でした。小学校の先生たちの講習に篠山へ来られたのです。小松先生がピアノを弾いて、歌を教えてくださいました。西條八十作詞、小松耕輔作曲の「電車と汽車」でした。

♪チンチンチンチン電車さん

お前はほんとに勇ましい

雨の降る日も風の夜も
いつでもひとりでチンチンチン
淋しい道でもチンチンチン

ゴットンゴットン自動車さんは
お色は黒いが弱虫だ
どこでも一人じゃ歩けない
大勢そろってゴットントン
お手々をつないでゴットントン♪

モコちゃんは一生涯懸命、大きな声を張り上げて歌いました。そして、たくさん、お歌の本をいただきました。

【父との出会い】

モコちゃんのお父さんは、お医者さんでした。若い時、東京で小松先生とお知り合いになりました。

或る時、兵庫県氷上郡出身のお父さんのところへ、同じ氷上郡出身で東京音楽学校生（現東京芸大）の大西さん^{（※1）}が来られて、「親友が病気になって困っているのだから、診てあげて欲しい」と言われました。

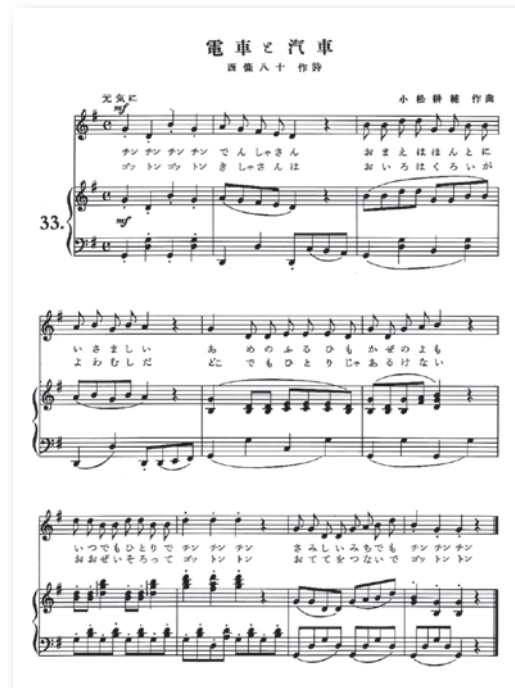
その病人は小松先生でした。重い肋膜炎（胸膜炎）だったそうです。

父は東京で小松先生のご看病などをさせていただいたあと、軍医として日露戦争に赴き、その後、再び上京して東大の専科で学びました。

わが父・内山昌雄（1879～1941）は文学青年で、詩歌をたしなむ田舎歌人でもありました。雅号は「松籟」。小松先生も「玉巖」の雅号を持っておられて、お互いに通じる所が多かったのか、よく文通していたようです。長く、深いおつきあいが続きました。

父は、宮内省の御歌所寄人・千葉胤明先生^{（※2）}に師事。先生の歌道奨励会に入って、新年の勅撰にも入選致しました。

小松先生の結婚の仲人を務めた武島羽衣先生（1872～1967）ともお付き合いがあり、丹波の黒豆などをお送りしてしていました。先生からのお手紙や短冊が届いて、飾られていたのを覚えています。



一家の記念写真。中央が父昌雄。母「こと」に抱かれる筆者

※1 大西さん 東京藝術大学音楽学部の大学史史料室に照会したところ、耕輔の同級生や上級生、下級生に兵庫県出身の「大西」姓は確認出来なかった。学校以外のつながりの友人だった可能性がある。

※2 千葉胤明（1864～1953）歌人、書家。肥前佐賀出身。1892年宮内省御歌所勤務。1908年御歌所寄人。明治天皇御製の編纂に従事。1937年帝国芸術院会員。

【運命を変えた手紙】

モコちゃんは、お父さんの後を継いで、お医者さんになろうと思っていました。ところが、女学校（兵庫県立篠山高等女学校）4年生の時、小松先生から「東京女子高等師範学校^(※)を受けてみないか」とのお便りがありました。現在のお茶の水女子大学です。先生は当時、音楽科の主任教授でした。

モコちゃんは小学校、高等女学校を通じていつも優等生で、女学校では全校でも一番の生徒でしたから、女学校の先生は、女子医専はやめて女高師の受験を勧めて下さいました。モコちゃんは女学校の先生方からも「モコちゃん、モコちゃん」と可愛がっていただいていたいました。

モコちゃんは歌うのが好きでした。モコちゃんはお庭に立って一人で独唱しました。庭の木がお客さんでした。



兵庫県立篠山高等女学校の正門前で

モコちゃんのお母さんは「こと」と言います。時々、ピアノを弾いて歌を教えてくださいました。お母さんは明石の女子師範学校卒で、音楽がよく出来て、卒業式には友人と二重唱をしたそうです。次中音（メゾソプラノ）だったとのことでした。

小松先生のお手紙のお陰で、私の人生が大きく変わりました。父のあとを継いで女子医専への道を歩むことを、自分にも言い聞かせておりましたのでー。

女学校の先生方も女高師を勧めて下さったこともあり、そして、身近に「小松先生からいただいたピアノ」があったことに助けられて、急遽、音楽の受験勉強を始めました。定員30名のところを20名しか合格を許されなかった難関でしたので、まるで夢のように

幸せでした。モコちゃんは飛び上がって喜びました。

卒業してからも、モコちゃんは声楽の道に励みました。お母さんと同じメゾソプラノでした。

デコちゃんは女医になって、ピアノは弾きませんでしたので、モコちゃんのそばにはいつも、あのピアノがありました。

小松先生からいただいたピアノ。

モコちゃんのピアノさん！

本当にありがとう！

※ 東京女高師（東京女子高等師範学校）1890年（明治23）3月、東京市神田区（現文京区）に設立された官立の女子高等師範学校。略称は「東京女高師」、所在地にちなんで「お茶の水」とも呼ばれた。戦後の学制改革で現在の「お茶の水女子大学」に。

II 東京女高師に学ぶ

【素晴らしい教授陣】

東京女高師（東京女子高等師範学校）の音楽科は、当時の時局柄を考えて、文部省は当初、体育科と名付けましたが、実質は音楽と体育でした。音楽科の教授陣は小松耕輔先生が集められました。当時の音楽界の第一線で活躍しておられる先生方が、ずらりと並んでおられました。もったいないような教授陣でした。

モコちゃんは入学して、ピアノは豊増昇先生^(※1)（後に小澤征爾さんも師事されていた）、声楽を四家文子先生^(※2)に学びました。

ありがたく、幸せなことでした。

モコちゃんは、その3回生でした。

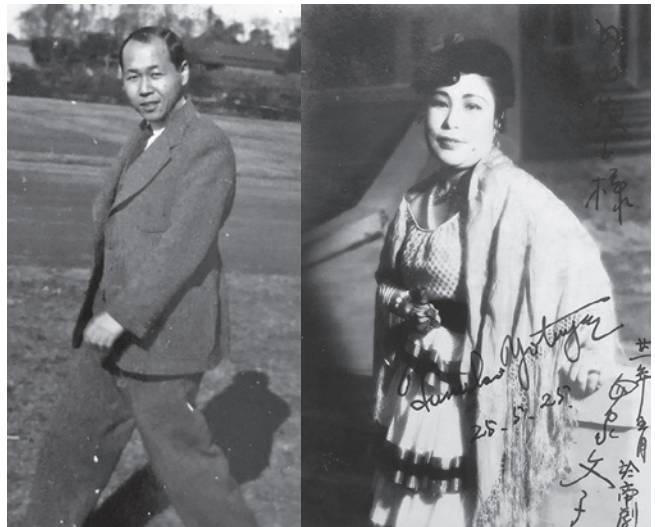
ピアノの豊増先生は、モコちゃんたちの入学と同時に着任されました。小松先生が引っ張って来られた教授の一人です。ピアノの力の弱い私たちには、あまりにも「もったいない」立派な先生でした。そして、いつも優しいお方でした。

後には、小澤征爾さんも師事されていきました。小澤さんがピアノを弾くことに限界を感じて落ち込まれた時に、「ピアノだけが音楽じゃないから」と励まして下さって、小澤さんは指揮者への道を歩まれたそうです。

良い先生方との出会い！ モコちゃんは幸せでした。



東京女子高等師範学校の正門



ピアノの豊増先生

四家先生。「内山茂子様 於帝劇 四家文子」の自筆サインがある

※1 豊増 昇（とよます のぼる 1912～1975）ピアニスト、音楽教育者。日本藝術院会員。佐賀市出身。東京音楽学校（現東京芸大）卒。ドイツ留学を経て1943年同校教授。1940年にベートーヴェンのピアノソナタとピアノ協奏曲全作品、1950年にバッハのピアノ曲全作品の連続演奏会を開いた。小澤征爾に指揮者を勧めた人物としても知られる。

※2 四家文子（よつや ふみこ 1906～1981）声楽家（アルト）、国立音楽大学名誉教授。東京出身。東京音楽学校卒。1930年、日本青年館で初のリサイタル。クラシックからポピュラー、歌謡曲と幅広く、昭和初期に「銀座の柳」「踊り子の唄」が大ヒット。1966年淡谷のり子、金田一春彦、古関裕而らと「美しい日本語と香り高い歌」をモットーに「波の会」を結成。著書に「日本歌曲の歌い方」「歌ひとすじの半世紀」など。

【苦しみを励ましに】

朝の1時間目、小松先生の授業が始まる前だった。モコちゃんの隣にいたIさんが、競技用のピストルをいじっていた。

「パーン!!」

大きな音が鳴った。火薬の燃えカスがモコちゃんの耳に入るほど、近い距離だった。何が起こったのか分からない。みんなびっくりした。

モコちゃんは急いで医務室に走った。鼓膜は破れていなかったが、後に聴神経炎という厄介な故障が残った。それで長いこと、モコちゃんはピアノが弾けなかった。

東京女高師の生活は素晴らしいものでしたが、ほかにも辛いことがいっぱいあった。指のけがが化膿して、3か月もピアノが弾けませんでした。練習がこたえたのか、指が腫れて弾けなくなった時も。

でも、苦しみながら乗り越えました。苦しみを励ましとなり、心の糧となりました。みんな遠い日の思い出です。

【父との別れ】

女高師3年生の時、モコちゃんのお父さんは他界しました。モコちゃんが女学校1年の時に脳卒中で倒れ、ずっと左半身が不自由でした。それでも元気で、筆マメな人でしたから、モコちゃんのところへもよく、お便りが届いていました。

5人姉妹の中で、お父さんと最後に言葉を交わせたのは、末っ子のモコちゃんだけでした。



昭和12年夏、自宅が応召兵の宿舎に。両親と後列左に筆者

モコちゃんは5人姉妹の末っ子でしたから、一番上の和子姉とは18才も年の差がありました。時には親子と間違えられることもありました。和子姉の主人は、大学校の仏蘭西語の先生でしたから、モコちゃんにはフランス語の歌を教えてくださいました。「フレール・ジャック」（フランスの民謡）とか「タバコの歌」でした。

お父さんが逝ったあと、大勢の方々が優しい手を差し伸べて下さいました。

長年の病気の為に、モコちゃんのお家は貧乏でした。まだ元気な時から、モコちゃんのお父さんは、貧しい人からはお金をもらわないという医者でしたから、生活はいつも豊かではありませんでした。「お困りやったら言って下さい」との一言をいただけるだけで、本当にありがたかったのです。

郷土出身の成功者・前田卯之助様^(※)から「ちょっと来て下さい」と連絡をいただきました。国立のお家へ伺いましたら、思わぬ大金の包みをいただきました。前田様は篠山の小学校の図書館にたくさん、寄贈されて、その図書館が「前田文庫」と名付けられているお方です。モコちゃんもこの温かいお志に報いなければと、しみじみ思いました。

※ 前田卯之助（まえだ うのすけ 1877～1937）兵庫県出身の実業家、政治家。1903年、明治法律学校（現明治大学）卒業。1905年、函館に移り函館商船（株）設立。倒産を経て函館時事新聞社社長。北海道会議員、函館市会議員を歴任して、道南を地盤に衆議院議員を2期務めた。

【茨木のり子さんに寄せて】

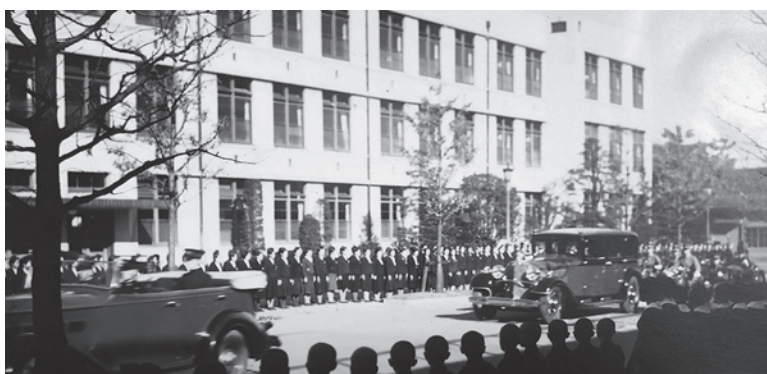
詩人の茨木のり子さん^(※)も、お父様はお医者さんで、ドクトル・メジチーネ（医学博士）の立派なお家柄。そして、「赤ひげ」でもあったそうだ。

スケールは違うが、私も同じ医者^の娘で、父は同じく「貧しい人々」からはお金をもらわない貧乏医者だった。他の医者が往診には行かない貧しい人のところでも、構わずに出かけた。そんな父を今も誇りに思っている。

※ 茨木のり子（いばらぎのりこ 1926～2006）詩人、エッセイスト、童話作家、脚本家。大阪市生まれ。帝国女子医学・薬学・理学専門学校薬学部卒。主な詩集に『見えない配達夫』『鎮魂歌』『自分の感受性くらい』『寄りかからず』など。戦時下の女性の青春を描いた代表作「わたしが一番きれいだったとき」は、多くの国語教科書に掲載。ドラマ『3年B組金八先生』の授業で朗読されるシーンもあった。

【行幸啓のこと】

天皇陛下は東大に、皇后陛下は東京女高師に、それぞれ4年に一度の行幸啓の習わしがありました。4年に一度ということは、生徒は在学中に一度は必ず、行幸啓の光栄に浴することが出来るということです。

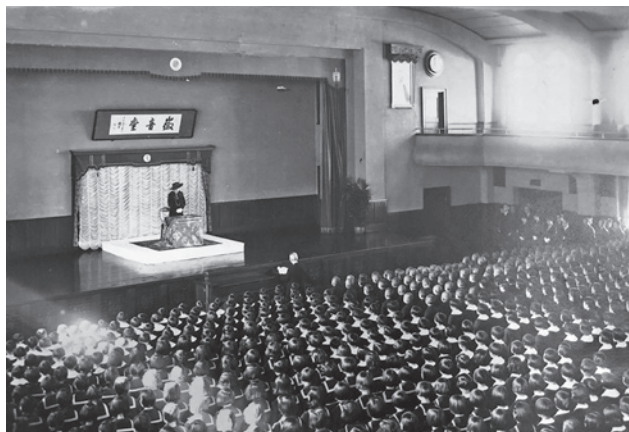


昭和皇后さま行啓の車列（昭和16年11月）

染病ということで、1か月の延期になってしまいました。

行啓の日は晴れました。予定通りの行事が進む中、私たちはタンホイザーの合唱曲を歌いました。皇后さま（香淳皇后）は小松先生の先導で御参観下さいました。

午後になって最後の行事。グラウンドで^{なぎなた}長刀やダンスをご覧いただきました。附属小学校、高等女学校、本校生合同のダンスは圧巻でした。伴奏は、陸軍戸山学校の軍楽隊でした。



講話される皇后さま

すべての行事が滞りなく終わって、再び、正門前でお見送りしました。この時、園児から本校生まで、みんなに皇后さまからのお土産の「とらや」のお菓子をいただきました。菊の御紋のらくがん。光栄に感激した一日でした。

このあと間もなく、大東亜戦争が始まり、行幸啓もこれが最後になりました。昭和16年秋のことでした。



皇后さまに披露された合同ダンス

※誕生日のエピソード

筆者・内山茂子さんの誕生日は大正11年（1922）7月1日だが、実際に生まれたのは6月25日だという。当時の大正皇后（貞明皇后）と同じ日に当たり、「皇后さまと同じ誕生日とは恐れ多い」と、両親が日をずらして届け出たらしい。次の代とはいえ、皇后の行啓に立ち会えたのも何かの縁か？

【陸軍戸山学校】

小松耕輔先生に引率されて、陸軍戸山学校^(※1)の見学に行ったことがありました。いろいろな楽器の学習をさせていただきました。高い所を乗り越えたり訓練の様子も見学しました。

軍楽隊の演奏はもちろん、聴かせていただきましたが、校内の廊下を歩いている時に練習室から聞こえたピアノの音は、今でも心に残っています。シューベルトのアンプロプチュ^(※2)でした。思わず立ち止まって耳を傾けました。本当に美しい、素晴らしい音色でした。

後にわかったことですが、ちょうどあの頃は、作曲家の芥川也寸志さんや団伊久磨さんも、陸軍戸山学校におられたようです。戦争が始まる以前のことでした。

※1 陸軍戸山学校 旧陸軍の軍学校の一つ。射撃や銃剣術の歩兵戦技、歩兵部隊の戦術のほか、軍楽の教官、生徒を育成。陸軍を代表する軍楽隊として陸軍戸山学校軍楽隊があった。所在地は東京・牛込区戸山町（現新宿区戸山周辺）。

※2 アンプロンプチュ Impromptu (仏)。即興曲。器楽小品。ロマン派のピアノ曲に多い。実際に即興でつくられたものではなく、作曲家の頭のなかにひらめいた楽想を自由に展開した作品。シューベルトが1827年ごろに書いた8曲の即興曲が最も有名。

【志賀高原の夏休み】

昭和17年（1942）、東京女高師の4年生となった最後の夏休みに、志賀高原の山小屋で1週間を過ごしました。

希望者を集めて30名ばかりをグループに分け、私たちはその4番目の最後のグループでした。4年生ということで、私はその1週間の生活のリーダーにされてしまいました。

あれやこれやと、プランを練りました。責任重大でした。

朝の集いの時には、級友のNさんがオルガンで伴奏を弾いてくれるので、みんなで「見よ東海の空明けて―」を元気に歌いました。太平洋戦争が始まった翌年でもあり、「撃ちてしままん」と、国民はみんな張り切っていました。お向かいの山の遠くに見える京大のヒュッテからも、時々、歌声が聞こえて来ました。毎日の山歩きに私たちも元気いっぱいでした。

日本医大のヒュッテには、スポーツ医学の先生が来ておられたので、お薬をもらいに行ったりして、行き来がありました。山歩きの途中でご挨拶に寄りましたら、山岳部長の方が出て来られて「女の人は戦争に行かなくていいから、いいですね」と、しみじみとした口調で言われました。切なくなって、返す言葉が見つかりませんでした。あの方は、戦争から無事、帰って来られたらどうかと、しみじみとした気持ちで今も思い出します。

【親泊千代さん】

山小屋生活最後の夜、私たちは高天ヶ原でキャンプファイアーを囲みました。山歩きの途中で親しくなった文化学園の学生さんたちも来て下さいました。満天の星空でした。

この世界のどこに戦争があるのかと疑いました。文科3年の親泊千代おやどまりちよさんが立って皆に語りかけました。

「沖縄は日本の為に、文化をそこなわれていく。私の大切な祖国沖縄」と強調しました。そして、切々とした沖縄の唄をうたいました。

憲兵の耳に入ったら、引っ張られてしまう、大変だと、私は心配しました。

親泊千代さんは卒業後、沖縄に帰り、「ひめゆり部隊」^(※)の教師となって、戦死されました。志賀高原の満天の星空の下で、彼女がうたった沖縄の唄は、私の心に初めて聞こえた沖縄のメロディでした。

沖縄の美しい文化が、これからも亡ぶことなく、美しく残ってゆきますようにと祈ります。



「ひめゆり学徒隊」の慰霊塔（ひめゆり平和記念資料館HP）

※ ひめゆり部隊（ひめゆり学徒隊） 1945年の沖縄戦で看護訓練によって作られた女子学徒隊のひとつ。沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の生徒222人、教師18人の総勢240人。部隊を率いたひとりが第一高女の教諭だった親泊千代さん（当時23歳）。親泊さんを含む教師・学徒136人が犠牲になった。東宝映画「ひめゆりの塔」（1995年）では沢口靖子が演じた。

Ⅲ 小松先生の思い出

【お父ちゃん！】

すっかり忘れていたが、またひとつ思い出した。

私たちは小松耕輔先生のことを「お父ちゃん」と呼んでいたのです。

「お父ちゃん」の講義の時間は、いろいろたくさんあった。3階の音楽教室は、「お父ちゃん」との思い出の場所だ。「お父ちゃん」はいつも始めに出席を取られた。アイウエオ順に並んで席が決められているので、あ行の私は「お父ちゃん」に近い、一番前の席だった。



学校内での小松耕輔先生（中央）

ある時、誰かの発案で、私たちは「ハイ」と返事するのを、「ド」から始まって音階をたどって行くことにした。私は5番目の「ソ」で「ハイ」を言う。私たちの「ハイ」の返事が音階をたどっていることに気が付いた先生が、「ほうっ」とうれしそうな声をあげられた。みんなで笑った。楽しかった。

「お父ちゃん！」

小松先生は私たちの「お父ちゃん」だった。

【レコード鑑賞】

「お父ちゃん」がレコードで良い曲を聴かせて下さる時、私の隣のKさんはいつも眠っていた。机を枕にして、気持ち良さそうに「ぐーすか」。いつもいつも、よく眠れるものだと感心した。

田舎育ちの私は、オーケストラなど聴いたこともなく、初めて接する音楽に戸惑いながらも、「眠る」なんてことは、とても出来なかった。実際のコンサートには、音楽科全員が小松先生に連れて行ってもらった。

広い音楽の世界への目覚め！ そこにはいつも「お父ちゃん」、こと小松先生が私どもを見守って下さっていた。

【お宅でおしゃべり】

モコちゃんは時々、小松耕輔先生のお宅へ行きました。先生はグランドピアノに向かって、校歌などの作曲をしておられることが多かった。

先生宅にはいつもピアノが4台くらいあって、2階では奥様がピアノのレッスンをされていました。

先生はいつも、モコちゃんの話し相手になって、「そうか、そうか」と面白そうに聞いて下さいました。

モコちゃんは声楽の四家先生のレッスンを厳しくて、恐ろしいという話もしました。四家先生はお宅での個人レッスンの時には、気に入らない、勉強の足りない人をドシドシ止めさせるので、「破門のヨツヤ」と言われて恐れられている。学校のレッスンでも厳しくて、恐ろし



たまにはおめかしして銀座へ。
右側が筆者

心に残る風景でした。その海岸での小松先生の写真も残っています。

あともう一回は、これもやはり、小松先生の指示で清澄庭園へ行きました。美しいお庭で、これもまた、先生のお気に入りの場所でした。

その翌年から、伝統の校内遠足もなくなりました。世の中が戦争へと傾いていました。

い！ そんな話のあれやこれやでした。

うどんをいただいたり、おいしい栗ご飯をいただいたこともありました。みんな、温かい、楽しい思い出です。

小松先生がひどい弱視なので、学校での講義の時、みんながちょっとしたいたずらをしたのも、今では懐かしい思い出です。

いつも、穏やかで、良い先生でした。

お茶の水伝統の校内遠足のあと、小松先生の希望で、三浦の三崎海岸へ行きました。澄んで、海の水が美しい、



戦局悪化の下、東京女高師を卒業して県立赤穂高女に赴任。
勤労奉仕の稲刈りで生徒を引率する筆者(後列左端)

【和声学で叱られる】

先生の講義は広範囲にわたっていたので、音楽教室でお会いする時間は多かった。たまには居眠りする人もいたけれど、大抵の者はみな真面目に講義を聴いた。

先生は眼が悪く、講義の資料に10センチほども眼を近付けておられるので、生徒の方は見えない。でも、私たちはみんな、「お父ちゃん」を欺かなかった。「よい先生」と「よい生徒」であったことは、今でもうれしく思っている。

たった一度だけ、小松先生に叱られた思い出があります。



音楽科の先生の皆さん。前列中央が小松耕輔先生

3、4名が「教官室へ来るように」と呼ばれました。「一人ずつ入って来い」とのことでした。

「これはどうしたんだ！」

和声学^(※)の答案を先生から突き付けられました。

「××??」と、まるで進行のメチャクチャな私の答案を見せつけられて、がっかりしました。数学の苦手な私は、和声学も苦手でした。自分でもがっかりしましたが、先生には申し訳ないと思いました。

小松先生から叱られた悲しい思い出は、このたった一度だけでした。

和声は難しかった。特に、私は苦手だった。苦手の人は大勢いた。与えられた和音を展開したものを、順番に一人ずつピアノで弾かなければならない。それがまた、なかなか弾きこなせない。おのれの力不足がまざまざと見えて悲しい。

一人ずつ本人が前に出て教壇のピアノを弾かなければならないのに、弾き手はJさんがいつも引き受けてくれた。先生には、Jさんばかりが弾いていることが分かっていない。みんな、先生をだましました。ゴメンなさい！

※ 和声学 (harmony) 西洋音楽の音楽理論の用語で、和音の進行、声部連結および配置の組み合わせを指す概念。西洋音楽では、メロディ (旋律)・リズム (律動) と共に音楽の三要素の一つとされる。合唱なら、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4つのパートをどうやって重ね、動かしたらきれいに響くかを学ぶ。小松耕輔の著書の中に「和声学教科書」「音楽理論と和声学」「和声学」がある。

【ピアノ弾かんんなあー】

阿佐ヶ谷の小松先生のお宅は、戦災にも遭わずに残りました。戦後初めてお宅へお伺いした時、モコちゃんは感極まって、お玄関で声をあげて泣きました。迎えて下さった奥様が戸惑われるほどでした。

その後、ひとり娘を連れてお伺いしたこともありました。娘がピアノを弾くことを余り好まないのだと言いましたら、先生は「どうしてなんだい？」と優しく言って下さいました。帰り道で「ピアノを弾かんんなあー」と娘が言いました。

この時、おうどんをご馳走になりました。仕出し屋のおうどんの真っ黒いだし汁に、関西育ちの娘はびっくりしていました。そのひとり娘も3年前に、私よりも先に世を去りました。

【広子日記】

奥様の広子様は、小松先生と同じ上野 (東京音楽学校) のご出身で、いつも和服をきちんと身に付けられておられました。亡くなられた後、先生は「広子日記」の本を出版されて、私の方へも送っていただきました。

小松先生の広い音楽界でのお付き合いやご活躍のご様子が、記録されていました。改めて先生のご活躍の広さが伺えました。貴重な記録でした。奥様の内助の功を示される貴重な書物でした。

【昭和天皇に慕われる】

昭和天皇が学習院で学ばれることになった時、小松先生はその人格を認められて学習院の先生になりました。天皇の学習院での音楽の勉強のためでした。

「先生、先生」と、幼い天皇は小松先生を慕われたと、先生がおっしゃっていました。その後も何かの機会に参内された時には、いつも「先生、先生」と懐かしがられたとのこと。このことを話される時は、小松先生も楽しそうでした。

【小松4兄弟】

長男が小松耕輔先生で、次いで平五郎さん、清さん。そしてもう一人、本当はヴァイオリニ

ストの三樹三さんがいました。良い演奏家だったのに、早く亡くなられたのは残念なことであった。

清さんは岩波文庫から出た著書が有名であった。小松先生と同じく、文筆も素晴らしかった。改めて、素晴らしい兄弟であったと感心する。

東北の田舎で、どんなご家庭で、どんなご両親であったのだろう。記念館（小松耕輔音楽兄弟顕彰会）が出来、御血縁の方がその歴史をお守りいただいていると伺い、本当にうれしく思う。

小松先生のことを忘れてはならないと、つくづく思う。

皆さま、よろしく願い申し上げます。

【フランス留学】

小松耕輔先生は、日本人としてフランスへ音楽留学された最初期の人であった。ドイツやイタリアへは既に留学が始まっていた。先生はフランス音楽の美しさに魅かれて、日本へその美しさをしっかりと伝えられた。コーラスの魅力をも日本に伝え、日本では合唱連盟の組織も作り上げられた。フランス音楽の美も日本へ！ とても大きな功績であったと思う。



音楽科の先生と生徒たち。前列左から3人目が小松先生。真ん中の列の右端が筆者

【最後の電話】

小松先生からお電話がありました。山梨へ出張した時、先生はモコちゃんに会いたくなって、探して下さったそうです。

「周りの人々にも探してもらったが、心当たりはないと言われてしまった」

先生のお言葉でした。先生は私が山梨にいると勘違いされていたようで、ちょっと変だなと思いました。

そのお電話は丹波篠山で受けました。小松先生が逝かれたのは、それから余り遠い日ではなかったと思います。いつかは迎えなければならないことでした。

Ⅳ ふるさと丹波篠山

【幸田の小母さん】

モコちゃんにとって、幸田の小母さんは大切な人です。

幸田の小母さんは、湊川相野学園^(※)をつくった人です。最初、たった3人だけの裁縫塾から、だんだん大きくして、現在では短大、附属高校といくつかの附属幼稚園を持つ大きな学園となっています。

「湊川」の名前を考えたのは、モコちゃんのお父さんです。幸田の小母さんは、お父さんのことを「生命の恩人^{いのち}」といつも言うておられました、事実だったようです。

以来、お父さんを大層、信頼されて、何かにつけて相談に来られていました。モコちゃんは小さい時から、幸田の小母さんに可愛がっていただきました。後に、小母さんはモコちゃんに「自分の養女になってほしい」と言われました。女高師を出ているモコちゃんに学校を運営してほしいと思われたようです。

ご自分の実子が3人も居られることを考えて、モコちゃんは辞退いたしました。とても、残念がられました。

幸田の小母さんは、モコちゃんのことを、いつも「シゲちゃん」と呼んで下さいました。夜、休む前にモコちゃんはお祈りをしますが、「幸田の小母さん、ありがとう」と、今でも欠かしたことはありません。

※ 湊川相野学園 学校法人湊川相野学園は、2019年に100周年を迎えました。1919年、神戸湊川のほとりに生まれた小さな裁縫塾は、校祖幸田たま女史の「まことの近代女性の育成」にかける情熱により、三田相野の地で短期大学となって花開きました。男女共学化以降も、専門職として活躍する知識や技術の習得とともに、人間性の涵養を大切にまいりました。(湊川相野学園HPの理事長挨拶)

【幸田の小父さんのこと】

幸田の小母さんの3人の塾が次第に発展しかけた頃、小母さんは再婚されました。「学校事情に詳しい人の力を借りたい」との小母さんの願いでした。モコちゃんのお母さんの弟で、教育者だった「高田の叔父」がお世話をし、お仲人をしました。

幸田の小父さんは静かな人格者で、小母さんの希望通り、学校をどんどん発展させ、神戸に「湊川実業高等女学校」を開校されました。普通の女学校ではなく、しっかり技術を身に付けさせるといふ強い目的がありました。

学資の豊かでない生徒さんには、特別の宿舎を与え、交替で校長住宅で家事の手伝いをしてもらっていました。授業料も免除であったと思います。

モコちゃんたちが遊びに行き、泊まらせてもらったりした時も、このお姉さんたちは、いつも楽しそうにお仕事をされていて、優しかった。卒業されたら小学校の裁縫の先生になられる方がほとんど。皆が「お座敷さん」と呼んでいたこれらのお姉さん方は、みんな、よい先生になりました。

今で言う「アルバイト学生」と言うことになりますが、当時としては、珍しい、良い組織であったと思います。

【木下楽器店のこと】



ストラディバリウスのチェロ

篠山の木下楽器店は1895年（明治28）創業の老舗。以前はお琴や三味線の和楽器店のお店でした。楽器店のお爺さんは浄瑠璃をよくされました。太棹三味線がよく響く音が、モコちゃん大好き。小さな胸にずっしりと響く良い音でした。後に大阪で人形浄瑠璃を見た時には、久しぶりに太棹三味線の音を聞いて、とても感激しました。

その後、木下楽器店は茂一さんが継がれて、洋楽器の店になりました。「もーちゃん」と皆が呼んでいたその方は、チェロを弾いておられました。篠山に出来た「スモール・オーケストラ」のメンバーとして活躍しておられました。そのチェロはストラディバリウス^(※1)だったそうです。お店はさらに息子さんの茂さんの代になり、どんどん大きく発展してゆきました。

ヤマハ音楽教室も出来、たくさんの講師や生徒さんを抱えて大盛況でした。今はさらにその息子さんのゆずるさんの代となりました。浜松で調律の勉強をされました。木下茂さんのお兄さんは、ヴァイオリンを早くから弾いておられましたが、後には日航のパイロットになられて、アラスカにお住まいでした。

茂さんはヴァイオリンが上手で、声も良く、声楽同好会でも活躍されました。

青山五万石の丹波篠山城下^(※2)にも、時代とともに様々な移り変わりがあり、令和の時代を迎えています。今は丹波黒豆の産地としても有名になり、観光の方々も町にあふれています。

わずらわしいコロナの時代。さわやかな田舎の空気を求めて、人々の足が向くようです。



篠山城の石垣

※1 ストラディバリウス イタリアのストラディバリ父子3人が製作した弦楽器のこと。特にアントニオ・ストラディバリが17世紀～18世紀にかけて製作した弦楽器が有名である。父子はヴァイオリンやヴィオラ、チェロ、マンドリン、ギターなど約1100～1300挺の楽器を製作したとされ、約600挺が現存する。

※2 篠山城 兵庫県丹波篠山市北新町にある近世城郭。篠山盆地中央部の小丘陵に築かれた平山城で、「丹波一の名城」とされ、篠山藩の藩庁であった。寛延元年（1748）から明治維新まで、青山家が藩主。城跡は国の史跡に指定。大書院が有名だ。

【畑儀文さんのこと】

畑儀文さん^{はたよしふみ}^(※)は兵庫県立篠山鳳鳴高校で、モコちゃんの生徒さんであった。

ブラスバンドでクラリネットを吹いておられ、音楽が好きで、クラリネットに進学したいと思っておられた。同じ郷土の先輩で、海軍軍楽隊のクラリネット奏者、当時は大阪放送局に勤

めておられた後藤庫太郎先生に師事されていた。

畑さんの声の良さに感心したモコちゃん先生は、「その声が惜しい！」「その声が惜しい！」と度々、繰り返した。そして、とうとう、「声楽の勉強を始めます」ということになってしまった。

クラリネットの後藤先生は「このままクラリネットを続けていても立派に成功されたはず」と惜まれたので、申し訳ない気持ちだった。

ずいぶん以前のことになるが、兵庫県で国体が開催された時、畑儀文さんは兵庫県を代表する歌手として、開会式で「君が代」を独唱された。テレビでその光景を見たモコちゃん先生は、うれしくて泣いた。

70歳近くになられた現在も、丹波の「シューベルティアード」で活躍しておられる。お元気で末永いご活躍をと、モコちゃん先生はいつも祈っている。

※ 畑 儀文（1955年生）丹波篠山市出身のテノール歌手、指揮者、合唱指揮者。元武庫川女子大学教授。県立篠山鳳鳴高等学校の吹奏楽部でクラリネットを演奏していたが、内山茂子に声楽を勧められ声楽家を志す。大阪音楽大学声楽科入学、同大学院修了。ソリストとして世界的に活躍。関西フィルハーモニー合唱団の指導を担当。「シューベルティアード・ジャパン」代表、「丹波の森国際音楽祭シューベルティアードたんば」総合プロデューサー。

【高橋竹山さんのこと】

モコちゃんは、津軽三味線の高橋竹山さん^{ちくざん}（※）の大的ファンでした。心に沁みる音の響きは格別でした。大阪で演奏会がある時には、放課後、2時間かけて福知山線の列車に揺られ、聴きに行きました。帰りは夜行列車で、家へ帰り着くのは深夜になりました。

3年生の選択生の音楽の時間に、レコードをかけました。「ヒエーッ」と悲鳴を上げた生徒もいました。既によく聞き知って「我が意を得たり」といった表情で、拍をとる子たちも何人かいました。

津軽の風雪に耐えた音色は、人々の心の奥深くまで沁み込む音でした。

モコちゃんと同僚で、国語の先生だった三浦先生も、津軽三味線に魅せられた一人でした。神戸まで行って、自分も津軽三味線を学ばれる熱心さでした。その先生は、師とともに何度も竹山さんの私宅へ行かれて、感激の日々を過ごされました。

美しく生きることは、何と素晴らしいことでしょう。

※ 初代・高橋 竹山（1910～98）津軽三味線の名人。青森県東津軽郡生まれ。3歳の時に麻疹をこじらせて半失明。近所の盲目の門付芸人から三味線と唄を習い、東北北部や北海道を門付けした。一地方の芸であった津軽三味線を全国に広めた。

【論文が最優秀に】

モコちゃん先生は、音楽鑑賞教育振興会の論文に応募して、思いもかけない最優秀賞をいただくことになりました。審査の先生方が10名とも、一位指名して下さったそうです。授賞式が東京であり、偉い先生方もたくさん参列しておられて、身に余る光栄でした。

たくさんの賞金と賞品をいただいた上に、ヨーロッパの音楽研修の旅にも連れて行っていただきました。教師をしていて、泣きたいほど辛かったことや、悲しかったことも、すべて報われるような幸せを実感させてもらいました。



メゾソプラノの音楽家として活躍



教室でピアノを弾く



篠山鳳鳴高校合唱部を指揮



1961年ごろのモコちゃん先生

V 時を越えて

【調律師の丹後さん】

モコちゃんのピアノを長らく見守って下さった方が、調律師の丹後さんです。

中学校ではモコちゃんの娘の美世と同級でした。大阪の学校で調律を学ばれて、篠山の木下楽器店に勤められ、以来、ずっとお世話になりました。

20代から70才も間近くなられた現在まで、モコちゃんのピアノに温かい愛情を注いで下さっています。造りが旧式で、修理はなかなか大変と思いますが、深い愛情をこめての扱いに感謝しています。

以前は京都府の福知山という所から調律の方が来ておられました。

【お母さんのピアノ】

娘の美世が、モコちゃんのピアノを讃えるミニコンサートを開いてくれた。自分の経営していたケアステーションを開放して、知り合いの方々をお招きした。ピアノ演奏と独唱は、木下楽器店の教室の優秀な先生が引き受けて下さった。モコちゃんのピアノがとても喜んでいといった表情で躍動した。司会役の娘は、自分も幼い時から親しんで来た「モコちゃんのピアノ」を「お母さんのピアノ」と表現し、その功を労ってくれた。

このピアノから何人もの声楽家が生まれ、音楽の道へ進んだ多くの人々があつたことを讃えた。

この催しは、木下楽器店の木下茂さん、奥さん、息子のかおるさんも、みんなで協力して、お世話をして下さった。地方新聞も大きく取り上げて下さって、写真とともに紙面をにぎわせた。記念すべきコンサートであった。

モコちゃんのピアノも、さぞうれしかったことだろう。モコちゃんのピアノを讃える集いは、この一回で終わり、ひとり娘の美世はがんのために、モコちゃんより先に他界した。そして、モコちゃんのピアノは取り残された。

【原未夏さんに託す】

モコちゃんが99歳を迎えた現在、モコちゃんのピアノを大切に保管して下さっている人があります。

はらみか
原未夏さんです。

モコちゃんは未夏さんを娘のように思っています。

将来、未夏さんがこのピアノの保管を重荷に思うようになられたら、その時には小松記念館に送り届けてもらえたら、一番、うれしい方法だと思っています。



原未夏さんと「モコちゃんのピアノ」(丹波篠山市の「みくまり」で)



ピアノには上品な線刻の装飾



裏蓋に「オットー ベルリン」とある

【ピアノよ健やかなれ】

小松先生がお亡くなりになる少し前に、はるばるとお電話を下されたことも、今思い出しますと、不思議でなりません。あのピアノといい、私の運命といい、何故こんなに深いご縁があって、私の生涯を支えていただいたのか？ 神のみぞ知るの想いです。

一人の音楽学校生の「病」が、何十年も経て、一人の少女の運命を変えた。99歳になった今、私には小松先生をはじめ、父や家族や友人など、いろいろな方々が、応援して下さいと感じます。老いた「少女」の心は、温かい思いで満たされています。

みんな、ありがとう！
美しい人生をありがとう！

小松先生、本当にありがとうございました。
夫が逝き99歳のモコちゃんは一人になりました。昔の思い出に浸っています。そして、いつまでも末永く、小松先生の愛情のこもったあのピアノが健やかでありますように、祈っています。
美しい思い出があって、モコちゃんは幸せです。



夫の弘成^{ひろしげ}さんは油彩画家で、2020年9月、93歳で永眠。「モコちゃんのピアノ」を弘成さんの作品が見守る



「みくまり」に掲示されている内山弘成さんの紹介パネル

完

著者紹介

内山 茂子 (うちやま・しげこ)

大正11年(1922)7月1日、兵庫県^{ささやま}篠山町(現^{たんばささやま}丹波篠山市)生まれ。県立篠山高等女学校を卒業して、昭和14年(1939)、東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)入学。小松耕輔に師事する。

昭和17年(1942)9月、戦時下で繰り上げ卒業。終戦をはさんで県立赤穂高等女学校や母校の篠山高等女学校、篠山高校などで音楽を教える。篠山鳳鳴高校で退職するまで合唱部を指導した。

地域でも精力的に音楽活動を展開。昭和29年(1954)、篠山声楽同好会、昭和36年(1961)、「のぼら音楽研究会」結成した。昭和22年(1947)から関西在住の四家文子門下でつくる「四ツ葉会」に所属し、関西を中心にメゾソプラノ歌手として活動を続けた。

<モコちゃんのピアノはいま>

2018年1月18日から、兵庫県丹波篠山市の無料休憩所「みくまり」の店内に置かれ、誰でも自由に弾くことが出来る。1891年ドイツ・オットー社製のアップライト・ピアノで、ふたの内側にメダルのような丸いメーカーマークが刻印されている。ピアノの周りを中心に、油彩画家だった夫弘成さんの作品が展示されている。

「みくまり」は築150年の古民家で、原未夏さんが経営。名物のみくまりだんごやコーヒーをいただける。観光商店街の一角にあって、近くに篠山城がある。

10:00~18:00 (火曜定休)

〒669-2336 兵庫県丹波篠山市魚屋町4の1 TEL079-550-1167

付記 ピアノが紡ぐ不思議な縁

教え子と当主の対談

2021年11月18日

内山 茂子

小松 義典

小松耕輔こまつこうすけの生家の現当主で小松耕輔音楽兄弟顕彰会長を務める小松義典こまつよしのりさん（73）が、耕輔が東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）時代に教えた元音楽教師で声楽家の内山茂子うちやましげこさん（99）を、兵庫県丹波篠山市の自宅に訪ね、在りし日の耕輔の思い出話に花を咲かせた。

【余分の命に感謝】



内山茂子さんに小松耕輔の家系図を説明する小松義典さん

<小松> お初にお目にかかります。今日は教師としての小松耕輔、音楽家としての小松耕輔、人間としての小松耕輔についてお聴きしたく、お伺いしました。内山さんから頂いたお手紙を拝読してまず思ったのは、白寿というご高齢にありながらの記憶力の確かさでした。耕輔の印象は、それほど強かったということですか？

<内山> おっしゃる通りです。去年、大病をしました。「これで人生終わり」と覚悟したのですが、幸いにも治って余分の命を頂きました。そして、耳にしたのが、地元の秋田で小松先生を讃える活動が行われているというお話です。うれしくて、うれしくて…。余分の命があって良かったと感謝しました。それから、先生のことが次から次へと思い出されるんです。自分でも不思議なくらい、鮮明に。

<小松> 「小松耕輔の教え子が今も元気いらっしゃる」と聞いた時には、びっくりしました。連絡してくれた原未夏はらみかさん（内山さん宅の近くで無料観光休憩所「みくまり」を経営）には感謝しています。貴重なご縁を取り持ってもらいました。

<内山> ややこしい事はみんな、原さんをお願いしています。私にとっても、亡くなった主人にとっても、娘のような存在です。原さんのお陰



ピアノを弾く原未夏さん

で、今日こうして小松会長とも不思議なご縁を結ぶことが出来ました。小松耕輔先生から頂いた「モコちゃんのピアノ」も、原さんのお店に置いてもらっています。

<小松> 先ほど、拝見しました。小松耕輔がパリ留学時代に買い求めたドイツ・オットー社製のピアノですね。

原さんに弾いてもらいましたが、素晴らしい音色でした。上品な線刻の装飾や黄ばんだ象牙の鍵盤が、歳月の重みを感じさせます。

【ピアノが届いた日】

<内山> ピアノが家に届いた日のことは、今でも忘れられません。幼稚園から帰ると、玄関先の土間に、木箱から出されたばかりのピアノがありました。頑丈な木箱は、その後も長いこと、うちにあったように思います。ピアノを輸送するトラックもない時代です。国鉄の貨物列車で東京から篠山の駅まで、そこから家までは荷馬車で運んだのでしょうか。

<小松> お父さんは出身地の丹波篠山で医院を開業なさっていたんですね？ 東京での勤務医時代に、病気の耕輔を診てあげたと聞いています。治療代も受け取らずに。これがきっかけで、2人の親交が始まった。ピアノは若き日に病気を診てもらったお父さんへのお礼の意味があったんですね？



父親が医院を開いていた内山さんの実家。画家であった亡きご主人・弘成さんの画廊でもあった

<内山> そうです。地元に戻ってからも、小松先生とのおつきあいは続きました。ある日、父はモコちゃん、あっ、これは私茂子のニックネームです（笑）…。そのモコちゃんと2歳上の姉デコちゃん（英子さん）のためにオルガンを買ってやろうと、小松先生に相談を持ち掛けたんです。そしたら、「うちに手ごろなピアノがある」と、即座に送り届けて下さった。

<小松> 耕輔が病気した時、お父さんを紹介してくれのが、2人の共通の友人だったそうですね。

<内山> 父の友人に当時、「大西さん」という方がいました。父と同じ兵庫県氷上郡（現丹波市）出身で、東京音楽学校で学んでいた。音楽学校の同級生の小松耕輔先生が病気になったが、医者にかかるお金がない。そこで父に診療を頼んだのです。

<小松> お父さんと耕輔の間を最初に取り持ったのが、大西さんだった。

<内山> でも、私はその大西さんとは会えずじまいで今日まで来てしまい、それが今も心

残り。小松先生から「神田の教育会館に勤めている。いつでも連れて行ってあげる」と言われながら、機会を逸しました。私の怠慢です。

篠山に帰ってから、新聞に投書したりして、実家を探しましたが、分かりませんでした。大西さんが父と小松先生を結び付け、これが縁で先生がピアノを送ってくださった。そのピアノが、女医になるはずの私を音楽家へと導いた。巡り巡って、私が音楽の道に進んだのは、大西さんがいたからなんです。

※「モコちゃんのピアノ」でも触れたが、東京芸大に照会したところ、小松耕輔と同期間に在籍した学生で「大西」姓は2人。しかし、本籍は千葉県と長野県で、兵庫県出身の「大西」姓はいなかった。音楽学校ではなく、耕輔と下宿が同じだったとか、短歌などを通じての友人だった可能性が考えられる。

一般財団法人・日本教育会館（東京都千代田区一ツ橋 神保町）にも照会したが、1948年に財団として発足する以前の組織の役職員名簿は引き継がれておらず、「分からない」との回答だった。

<小松> 「モコちゃんのピアノ」で練習した教え子は、ざっと2,000人と伺いました。

<内山> 古いピアノなので、今のピアノとは構造が違います。だから、調律が難しいんです。木下楽器店のベテラン調律師・丹後さんのお世話になっています。もう、かなり年配の方なんですけど…（笑）。「みくまり」には時々、「ピアノを弾かせて」と通り掛かりの人が入って来るそうです。「駅ピアノ」みたいなものです。

【古いアルバム】

<小松> ピアノも幸せですね。先だって、内山さんの幼少時から女学校時代、東京女高師時代、高校教師時代など、ご自分の来し方を撮られた写真アルバムが、原さん経由のメールで送られて来ました。皇后陛下の行啓などもあって、一級の歴史資料と言えます。中にユーモラスな写真が1枚。部屋の中で5人が、「モコちゃんのピアノ」をはじめ、バイオリンやフルート、タンバリン、ほら貝を合奏しています。

<内山> ああ、これですね（笑）。兵庫医大予科の男子学生が、わが家に遊びに来たんです。着物姿で「モコちゃんのピアノ」を弾いているのは母。フルートはモコちゃん、つまり私です。バイオリンは女医になった姉の英子、デコちゃんです。タンバリンとほら貝は医学生の2人。おふざけ半分で撮った写真です。戦後のわが家のほほえましいひとコマですね。



家族で合奏。左端のフルートが茂子さん、バイオリンが英子さん、ピアノがお母さん。男性2人は医学生

<小松> かなりの名家とお見受けしま

した。お母様もピアノを弾かれたんですね。

<内山> 母の「こと」は（兵庫県立）明石女子師範学校を出て、しばらく教員をしていました。歌が好きでした。私と同じメゾソプラノです。

【歌詠みの赤ひげ】



両親に挟まれた前列中央が茂子さん

<小松> ご両親と5人の姉妹、2人のお手伝いさんと、総勢9人が並んだ記念写真があります。和服姿のお父様は目元が涼やかで、お人柄が偲ばれます。どんな方でしたか？

<内山> 小松耕輔先生に対してもそうでしたが、貧しい患者さんからは治療費は一切、受け取らなかった。だから家は決して豊かではありませんでした。

<小松> 「篠山の赤ひげ」ですね。

医師にして文学青年であったとか？

<内山> 田舎歌人でした（笑）。「松籟」の雅号を持ち、宮内省御歌所おうちどころで寄人よりうどを務めた千葉胤明先生たおあきに師事していました。勅題ちよくだいに入選したこともあったんですよ。気恥ずかしかったのか、姉の名前で応募したそうです。でも、審査員の皆さんは父の作だと分かったようでした。

【先生を「お父ちゃん」】

<小松> 東京女高師時代の写真には、小松耕輔も登場します。どんな先生でしたか？

<内山> 「優しい先生」でした。私たちは、仲間内で「お父ちゃん」と呼んでいたくらい。大変な実績がある方だったなんて、知りませんでした。評伝を読んで「こんなに立派な方だったのか」と驚きました。

先生はご自分のことを吹聴したり、自慢するような方ではなかった。合唱コンクールや著作権も先生の努力で出来たのですね。

そんな偉い先生とは知らずに、のんきに、自由に、気ままに、勉強させてもらいまし



今も空の上から見守ってくれているような…



2年の時、「月之寮」の仲間と（左から2人目が筆者）
て、つい最近まで忘れていました。

<小松> 昭和16年（1941）、東京女高師へ昭和皇后さまの行啓がありましたね。耕輔は学習院で昭和天皇を教え、その後、度々、参内していましたから、皇后さまとも面識があったと思います。

<内山> 皇后さまはすぐに貴賓室に入られました。音楽科の視察を先導されたのが小松先生でした。私は皇后さまのお近くに座っていたので、口紅が玉虫色の緑だったことを覚えています。一瞬、生徒たちもざわつきました。高貴な口紅に見守られて、タンホイザーの合唱曲を歌いました。



教室に入られる昭和皇后さま



皇后さまから頂いたお菓子。菊の御紋がくっきりと

た。いま思えば、幸せな時代でした。

<小松> そう言って頂いて、耕輔も空の上で喜んでいると思いますよ。耕輔の次女の名前が、内山さんの同じ「茂子」です。不思議なご縁を感じますね。

<内山> 先生と父が2人して、空の上から私を見守ってくれている。この頃、そんな気がしてなりません。だから、昔のあんな事、こんな事が、次々と思い出されて来る。先生を「お父ちゃん」と呼んでいたことだっ

<小松> 皇后さまからお土産を頂いたそうですね。

<内山> 特別に用意された「とらや」のらくがんです。女高師や付属高等女学校、小学校、幼稚園の全員が頂きました。忘れられない思い出のひとつです。

【素晴らしい教授陣】

<小松> 内山さんが東京女高師に在籍していた時代は、時局が風雲を告げることもあって、耕輔にとっては音楽家としても、教育者としても、最も多忙かつ、悩み多い時だったと思います。眼も悪かった。

<内山> 自分の苦勞や悩みを生徒に感じさせる方ではなかった。お人柄ですね。私たちは、のんびりと授業を受けていました。ただ、お眼が不自由で、先生の五線紙はとても大きかった。遠くまで見えないのをいいことに、和声学では自分でピアノを弾くところを、ほかの人に代わってもらったりして。特に、イタリアの和音なんて、とっても難しいんです。

<小松> 代弁ですね（笑）。女高師でピアノを習われた豊増昇や声楽の四家文子について、耕輔は自伝の随所で高く評価しています。思い出に残る先生たちですか？



ピアノの土川先生。奥様は志賀直哉のご息女

<内山> 教授陣の多くは小松先生が連れて来た方々です。みんな素晴らしかった。女高師で教えた後、東京音楽学校に転任される先生も多かった。両方とも官立の学校ですから、行き来が容易だったのですね。



四家文子先生（中央）を囲んで。先生の左隣が内山茂子さん

私は卒業後、地元の高校で教える傍ら、四家先生門下の「四ツ葉会」に所属し、メゾソプラノ歌手として活動しました。でも50代の時に大きなけがをして、それからステージには立っていません。四家先生はとても心配されて、東京のお医者さんを紹介してくれました。苦しい時に励ましてもらいました。今でも感謝しております。

【再評価の機運を】

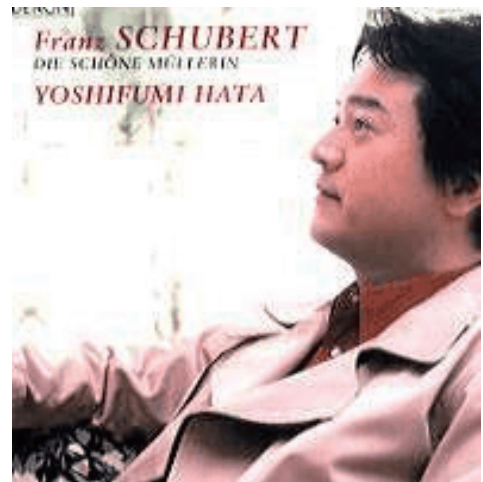
<小松> 小松耕輔の話に戻ります。耕輔は、日本の音楽界に果たした功績の大きさの割には、あまり知られていないのが現状です。「小松耕輔音楽兄弟顕彰会」の会長として、耕輔の母校の東京芸大（旧東京音楽学校）に時々、資料などを問い合わせるのですが、そのたびに「小松耕輔先生はもっと、もっと評価されるべき人です。頑張ってください」と励まされます。再評価の機運を高めたい。

<内山> その通りだと思います。教え子の私だって、知らないことばかり。今こうして生家のご当主が訪ねて来てくれた。大変、光栄ですし、不思議なご縁を感じます。

<小松> 内山さんは長く、高校教師を務められました。音楽家を目指した教え子もいらっしゃるのですか？

<内山> たくさんいますよ。テノール歌手として活躍している畑儀文さんも、県立篠山鳳鳴高校で私と出会ったのが縁で、声楽家の道に進みました。本当はクラリネットをやりたかったんですが、私が強く勧めたものだから…。CDの評判もいいんですよ。人と人の出会いの不思議さですね。ほかにも関西二期会で主役で活躍している教え子もいます。

<小松> 耕輔の情熱と信念が内山さんに受け継がれ、たくさんのお音楽家を育てた。音楽家としての耕輔のDNAが、若い世代に伝わったんです。



畑儀文さんのCDジャケット

【オペラ「羽衣」の再演】

<小松> 小松耕輔は明治39年（1906）、日本人による初のオペラ「羽衣」を創りました。秋田大学名誉教授の四反田素幸^{したんだもとゆき}先生がいま、楽譜を書き直して、再演しようと動いていらっしゃいます。



小松耕輔が手がけたオペラ「羽衣」

<内山> 先生はあの時代に、オペラまで創ったのですね。すごい方だったんですねえ。

<小松> まあ、「羽衣」への評価は当時、好悪が分かれたようですが…。2、3年で何とか再演に漕ぎ付けたいと思っています。内山さんにもぜひ、秋田までご鑑賞にいらして頂きたい。

<内山> ありがとうございます。これも小松先生が作ってくれたご縁ですね。今でも寝る前には「小松先生、ありがとうございます」と手を合わせるんですよ、私（笑）。

<小松> 最後に、耕輔が作曲した作品の印象についてお聴きかせ下さい。

<内山> ただただ、懐かしいですね。素晴らしい曲ばかりです。先生の「母」や「泊り舟」をよく独唱しました。

【思い出の中に生き続ける】

<小松> 内山さんの素晴らしい記憶力を、「何故だろう？」といま改めて考えています。おそらく、人生で最も素晴らしい時期を耕輔と出会った。それが今になって記憶を刺激し、昔のことを次から次と思い出されるのではないのでしょうか。「モコちゃんのピアノ」がある限

り、耕輔は思い出の中に生き続けます。

<内山> 亡くなった娘が5年前、母親の私のために、このピアノでミニ・コンサートを開いてくれました。集まった方には「モコちゃんのピアノ」とは言わず、「母のピアノ」と紹介しましたが、「モコちゃんのピアノ」はうれしそうでした。「モコちゃんのピアノ」のお陰で、不思議な出会いに恵まれ、素晴らしい人たちと巡り合いました。感謝しています。

<小松> 年齢を重ねるにつれて自分の来し方が美しく見えて来る。そんな人生こそ、幸せな人生です。その幸せは、周りの人をも幸せにします。私は今日、内山さんから幸せのおすそ分けを頂きました。これを秋田まで持ち帰って、これからも小松耕輔を語り続けます。ありがとうございました。

おわり



花と夢に囲まれる若き日のモコちゃん先生



左から内山茂子さん、小松義典さん、原未夏さん

小松耕輔の年譜（年齢は誕生日前）

年	年齢	主 な 出 来 事
1884（明治17）	0歳	12月14日 玉米村館合（現由利本荘市東由利）に誕生
1891（明治24）	6歳	館合尋常小学校入学。入学前から目の病気に悩まされる
1894（明治27）	9歳	矢島高等小学校入学。オルガンと出会って音楽と親しむ
1898（明治31）	13歳	矢島高等小学校卒業。「玉米八景唱歌」を作曲
1901（明治34）	16歳	上京。東京音楽学校（現東京藝術大学）選科に入学
1902（明治35）	17歳	東京音楽学校予科に入学
1903（明治36）	18歳	音楽学校本科に入学。翌年「音楽新報」執筆、文壇と交流
1906（明治39）	21歳	歌劇・羽衣上演、森鷗外が賛辞。本科首席卒業、学習院講師
1907（明治40）	22歳	帝国音楽会を組織して理事となる。歌劇・霊鐘
1908（明治41）	23歳	学習院助教授。皇孫（後の昭和天皇）の音楽担当
1909（明治42）	24歳	東京音楽学校研究科ピアノ科を修了
1910（明治43）	25歳	音楽教育会を組織。音楽学校後輩の本多広子と結婚
1914（大正3）	29歳	八等瑞宝章を叙勲
1915（大正4）	30歳	音楽普及会結成。葛原しげる、梁田貞と「大正幼年唱歌」等
1920（大正9）	35歳	フランス留学。「西洋音楽の知識」出版。「音楽遍路」連載
1923（大正12）	38歳	帰国。東京シンフォニー創設に尽力。9月関東大震災
1924（大正13）	39歳	学習院教授。「世界音楽遍路」出版
1925（大正14）	40歳	作曲者組合を組織、著作権運動。後の日本音楽著作権協会に
1927（昭和2）	42歳	国民音楽協会を設立。合唱音楽祭開催。盟友山田源一郎没
1928（昭和3）	43歳	日本作曲家協会を設立、理事長就任
1937（昭和12）	52歳	東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）教授
1940（昭和15）	55歳	国民学校教科書編集委員。「日本愛国唱歌集」
1942（昭和17）	57歳	親友・北原白秋の死に水とる。2人の代表曲に「泊り舟」
1945（昭和20）	60歳	眼病悪化。玉米村に疎開、終戦。戦後は音楽教育再興に尽力
1946（昭和21）	61歳	皇太子（現上皇さま）に御進講。「西洋音楽史」出版
1947（昭和22）	62歳	教育音楽協会長。翌年全日本合唱連盟理事長。初のコンクール
1952（昭和27）	67歳	文部省著作権審議委員。自伝「音楽の花ひらく頃」
1953（昭和28）	68歳	教科書「中学の音楽」編纂。音楽は社会の健全な発展に…
1958（昭和33）	73歳	紫綬褒章。妻広子71歳で他界。「広子日記」出版へ
1966（昭和41）	81歳	2月3日永眠。享年81。勲4等旭日小綬章

参 考 文 献

- ① 小松耕輔生誕130年記念誌から
「小松耕輔の楽壇活動—音楽の社会的発展を目指して」(二子千草)
「小松耕輔研究—末弟の小松清研究ノートを添えて」(船山信子)
「小松耕輔の業績」(四反田素幸)
「無題 (シンポジウム発言録)」(田中みや子)
- ② 「音楽の花ひらく頃」(小松耕輔)
- ③ 「わが思い出の楽壇」(小松耕輔)
- ④ 「世界音楽遍路」(小松耕輔)
- ⑤ 「広子日記」(小松広子)
- ⑥ 「昭和28年版文部省検定済教科書・中学の音楽」(小松耕輔編著)
- ⑦ DVD「秋田人物伝・小松耕輔」(秋田テレビ制作・著作)
- ⑧ 「『楽苑會』のオペラ活動について」(伊藤直子)
- ⑨ 「『教育音楽』という用語についての歴史的考察—明治期から大正期を中心として」(山本真紀)
- ⑩ 「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む—童謡詩人 葛原齒の生涯」(佐々木龍三郎)
- ⑪ 「フランス史10講」(柴田三千雄)
- ⑫ 「私の履歴書・田中耕太郎」(日本経済新聞社)
- ⑬ 「生きて来た道 伝記・田中耕太郎」(柳沢健)
- ⑭ 「蕩尽王、パリをゆく 薩摩治郎八伝」(鹿島茂)
- ⑮ 「歌に生き 恋に生き」(藤原義江)
- ⑯ 「篠山の音楽七十年史」(波部初雄)
- ⑰ 「音楽の師 梁田貞」(岩崎呉夫)

小松耕輔音楽兄弟顕彰のあゆみ

－ 主 な 事 業 －

- 昭和52年 4月 小松兄弟音楽顕彰発起人会を結成
- 昭和53年 3月 東由利町議会、一般会計当初予算で顕彰建立補助金350万円を計上、議決
音楽顕彰碑建設委員会を設立
小松兄弟音楽顕彰会を設立
- 昭和53年10月 4日 顕彰碑除幕式挙行
小松兄弟音楽顕彰会主催
- 昭和56年10月 6日 音楽顕彰碑建設委員の解任、現顕彰会の今後の運営について協議
建設委員会を解散し、顕彰会は継続させることで合意
- 昭和57年 8月 小松音楽兄弟作品選集
東由利教育研究所 発行
- 昭和57年11月12日 小松音楽兄弟作品選集刊行記念
小松音楽兄弟顕彰音楽会
主催 東由利町教育研究会
後援 東由利町教育委員会
- 昭和58年10月30日 新たに「小松兄弟音楽顕彰会」を設立
- 昭和59年10月25日 小松耕輔先生文化振興記念懸賞記念誌 生誕100年
教育音楽の父 小松耕輔－伝記・校歌作品集 発行
秋田県教育委員会・東由利町・東由利町教育委員会
- 昭和59年11月 1日 昭和59年度県文化顕彰事業（記念演奏会・合奏）に共催
主催 県教育委員会・東由利町教育委員会
- 昭和60年10月18日 音楽主任教員研修に助成
県青少年劇場バイオリンコンサートの後援
- 昭和63年 9月23日 森吉町「浜辺の歌音楽館」視察
- 平成 2年 6月28日 福島中新町「バッハホール」視察
- 平成 3年 7月 「小松音楽兄弟」高野喜代一編著に資料等を提供
- 平成 4年10月21日 音楽祭の主催事業について検討
- 平成 5年10月24日 第1回ひがしゆり音楽祭開催
主催 小松兄弟音楽顕彰会 主管 東由利教育委員会
出演者 吹奏楽、合唱 東由利中学校
これ以降毎年音楽祭開催
- 平成16年12月 1日 特集 小松耕輔生誕120年（広報ひがしゆり p12-15）
「音楽の花ひらく頃」1 小野千草対談集
- 平成17年 1月 1日 特集 小松耕輔生誕120年（広報ひがしゆり p18-21）
「音楽の花ひらく頃」1 小野千草対談集

- 平成25年 4月 顕彰会の名称を「小松耕輔音楽兄弟顕彰会」に改める
規約も変更制定する
- 平成25年 9月23日 ウィーンピアノデュオ クトロヴァッツ in 由利本荘
共催 由利本荘市・由利本荘教育委員会
小松耕輔音楽兄弟顕彰会・カダーレ自主事業実行委員会
協力 (財)日本青年館／(株)社 ニッセイ
- 平成26年11月15日 小松耕輔生誕130年記念市民音楽祭
- 平成29年 3月 小松耕輔生誕130年記念誌発行
小松耕輔音楽兄弟顕彰会、由利本荘市教育委員会
- 平成30年 1月 秋田テレビ制作「秋田人物伝」に資料提供
- 平成30年 2月 第43回秋田県芸術選奨特別賞～ふるさと文化賞～受賞
- 令和 4年 3月 マンガふるさとの偉人 西洋音楽の伝道師 小松耕輔物語
秋田県由利本荘市
由利本荘市偉人マンガ製作・活用検討委員会の構成委員
および資料提供者
- 評伝 西洋音楽の伝道師 小松耕輔物語
小林義人編著・出版

小松耕輔音楽兄弟顕彰会

顧問	四反田 素 幸				
会長	小 松 義 典				
副会長	長谷山 博 昭	須 藤	完		
会計	小 松 建				
監事	小 松 慶 悦				
理事	佐々田 亨 三	鈴 木 憲 一			
	小 松 幸 円	伊 藤 彦 舟			
	工 藤 良	高 橋 裕 子			
	松 橋 隆	斎 藤 則 子			
	小 松 幸 月	佐 藤 真 紀			
	佐々木 美 紀	織 田 羽衣子			
	佐 藤 真由美	佐 藤 広 樹			
	佐 藤 隆				
特別理事	小 林 義 人				

あ と が き

新聞社を定年退職した後、縁あって2014年7月から4年弱、由利本荘市に嘱託記者として勤務した。小松耕輔の名前を知ったのは、その年の11月。当地で開かれた生誕130年記念市民音楽祭がきっかけだ。小松耕輔音楽兄弟顕彰会長で小松家現当主・小松義典氏の知遇を得て、地域版紙面に小さな記事を幾つか書いた。

小松耕輔は銀の音符をくわえて生まれて来た人ではなかった。音楽の才は天賦のものというよりは、むしろ、努力の結果として育まれた。日記や自伝を読んで、つくづくそう思う。天才と秀才の間には天と地ほどの開きがある。天と地の開きを前に端から諦めるか、その差を少しでも埋めようともがき苦しむかは、人それぞれだろう。小松耕輔は後者のタイプの秀才であった。半面で、人の痛みが分かり、人の情けを知る苦労人。西洋音楽の伝道師は、人生の達人でもあった。

耕輔のふるさと・東由利には幾度も通った。道の駅の温泉に浸かり、玉コンニャクをかじり、一升瓶の「ボツメキ地ビール」を各地の飲み仲間にした。生家が残る中世の城下町や本荘街道の宿場町には、地域の文化や人々の誇りに裏打ちされた豊かでしなやかな表情があった。過疎を笑い飛ばす余裕さえ感じられたものだ。

この度、伝記漫画の脚本を頼まれた。しかし、コロナ禍で遠出の取材は出来ない。大きな段ボールで送られて来た日記や自伝を読み込むほかはなく、行間から匂い立つ香気からイメージを膨らませた。内心、忸怩たるものがある。しかし、楽しかった。東由利の懐かしい風景や、出会ったあの人、この人の顔を思い浮かべ、しばしの間、浮世の憂さを忘れた。

稿を閉じるにあたって、ひとりの碩学大儒に謝意を申し上げねばならない。耕輔の後輩にあたる東京芸大OBで、前秋田大学副学長、作曲家の四反田^{したんだもとゆき}素幸氏である。

この人がいなければ、小松耕輔生誕130年記念事業も、この伝記漫画も生まれはしなかった。生誕130年の「天の時」、秋田大学で教鞭を取った「地の利」、地元顕彰会と気さくに膝を交えた「人の和」と、三拍子がそろったのだろう。耕輔の実績や人となりに共感と研究の光を当て、その照り返しの中に我が国西洋音楽史の発展過程や音楽家群像を生き生きと映し出してくれた。

本稿は氏の論文「小松耕輔の業績」（小松耕輔生誕130年記念誌に所収）をなぞったに過ぎない。拙い原稿に的確な助言とお叱りを幾度も頂いた。執筆の機会を与えてくれた上、漫画の原稿そのものをブックレットにしてくれた小松義典氏ともども、心からの感謝を申し添えて筆を置く。

2022年春弥生 札幌にて

小林 義人

(1951年北海道生まれ 元読売新聞地方部記者)

西洋音楽の伝道師

－ 小松耕輔物語 －

令和4年（2022）7月発行

編 著 者	小 林 義 人
音 楽 史 監 修	四反田 素 幸
発 行	小松耕輔音楽兄弟顕彰会
問い合わせ先	小 松 義 典 〒015-0221 秋田県由利本荘市東由利館合字館前 23-2 電話 0184-69-3838 FAX 0184-69-3888 e-mail : komatsu_y@r7.dion.ne.jp
印刷・製本	(株)本間印刷所 〒015-0817 秋田県由利本荘市中町 10

この冊子は、由利本荘市地域づくり推進事業としての助成を受け作成したものです。